

# 絶対君を見捨てない スクーパーズ来襲編 1 るな充120%

(アニメURAHARA同人小説)

## 注意

この同人小説は、春奈るなが主演声優を務め、2017年秋に公開されたアニメ「URAHARA」をもとに書かれています。設定や内容はかなり変更されていますが、この小説を読む場合は、アニメ「URAHARA」をご覧になってからの方が、声の感じが掴め、より会話を楽しむことができると思います。ですので、この小説は、アニメ「URAHARA」をご視聴されてからお読みになることをお勧めします。

なお、この小説はフィクションです。実在の人物や団体などとの関係はありません。

## 概要

天の川銀河(地球が存在する銀河系)の盟主であるスクーパーズは、アンドロメダ銀河のデストロイヤーズと銀河の命運をかけた戦争状態にあった。現在は休戦中ではあるが、絶対に負けることができない戦いの中、文明・文化を進歩させることができなくなったスクーパーズは、新たな進歩を生み出すため、銀河系の様々な惑星から文明・文化を収集していた。第8連隊を含む3個連隊は、みさ王女の指揮のもと、天の川銀河オリオン腕太陽系の第3惑星「地球」からの文明・文化の収集にあたっていた。スクーパーズと地球人には圧倒的な力の差があるため、双方ともほとんど犠牲が出ることなく、簡単に終わるはずの作戦だった。しかし、日本の原宿でエビふりや1侍従長と共にみさ王女が、現地人(りと、まり、ことこ)に捕らえられ、さらに予想外の反撃を受け、多大な損害を被ってしまった。王女救出のために、その作戦の本当の意味を知ることなく、数多くのスクーパーズの兵たちが原宿の地に消えていった。そう、文字通り消えていったのである。

目次

(スクーパーズ来襲編 第1巻)

第1章 原宿PARK

第2章 スクーパーズ来襲

第3章 原宿封鎖

(スクーパーズ来襲編 第2巻)

第4章 ラフォーレ陥落

第5章 明治通り防衛線

第6章 捕虜

(スクーパーズ来襲編 第3巻以降の予定)

第7章 ラフォーレ奪還作戦

第8章 決戦

第9章 黒いスクーパーズ

第10章 ラフォーレの決闘

第11章 PARK動乱

第12章 原宿の結婚式

第1章 原宿PARK

空が白みかけたころ、原宿の二戸建の家のベッドの上に一人の少女が静かに眠っていた。少女は、幼いころ、おばあちゃんと一緒に宗教画の本を見ているときの夢を見ていた。

「この絵、怖い。」

「どれどれ、これは天使と悪魔の絵だね。」

「人の上に乗って、尖ったもので刺そうとしている人が悪魔なの？」

「違うよ。これが天使ミカエルだよ。」

「じゃあ、下の人が悪魔なの。」

「そうだよ。ルシファーかな。悪そうな顔をしているだろう。悪魔は悪いことをするから、天使がとどめを刺そうとしているところだよ。」

「そうなんだ。でも、なんかかわいそう。悪魔さん。」

「そうかい。」

「天使の方が残酷でひどいように見えちゃう。」

「そうだね。でも、何かを守るためには残酷にならなくちゃいけないときもあるんだよ。」

「そうなの。」

「そうだね。おばあちゃんも、りを守るためならば、残酷になれるよ。」

「ふーん。わかった。りともおばあちゃんを守るためならば残酷になる。悪魔がいたらやつけてあげる。」

「ありがとよ。でもね、本当の悪魔は、こんな顔はしていないんだ。とつても綺麗な顔をして、可愛くて魅力的な笑顔で惹きつけて、人に悪いことをさせるんだよ。」

「そうなの。」

「そうだよ。だから、何が悪いことか、ちゃんと考えなくちゃだめだよ。」

「わかった。いっぱい考える。でも、おばあちゃんは絶対守るね。」

「本当は、おばあちゃんが一番悪かったらどうする。」

「おばあちゃんが一番悪くても、おばあちゃんを守る。絶対。」

「そうかい。ありがとよ。お前は強くなる。その時、力の使い方を守るんじゃないよ。」

「強くなるの？りとが。」

「ああ、そうだよ。だって、お前は……」

最後の言葉が聞き取れないまま、おばあちゃんの姿が薄くなって、少女は目を覚ました。

この少女の名前は須藤りと、高校2年生である。幼い時に両親が急に家を出て行ってしまっため、おばあちゃんに引き取られ、今も二人で暮らしている。

「おばあちゃん、行ってくるね。」

りとは現在春休み中。原宿の明治通りより東側の裏原と呼ばれる地区にあるオタク系のファッションやグッズを扱うお店PARKでバイトをする毎日である。と言っても、PARKの店長一家は長期海外旅行中のため、3人の女子高校生が実質PARKの切り盛りをしている。無責任な店長と思うかもしれないが、本当のPARKの店長もそういうことをしそうな方ではある。りとおばあちゃんが、りとを送り出す。

「いってらっしゃい。夜は遅いのかい。」

りとは、今日の予定を考えながら答える。

「今日は7時に店を閉めるので、あまり遅くならないかな。」

おばあちゃんは、出かけようとするりとに自分が書いたSF小説を渡そうとする。

「あ、そうそう、このSF、ことちゃんに渡しておいてちょうだいな。」

「おばあちゃんが書いたやつね。ことが、この間の『ワームホールをめぐって行く、銀河群旅行』や『サイコ3次元プリント』、すごい面白って言った。」

「ことちゃんに有難う、って伝えておいて。いい読み手が見つかったわ。りとも読みなさいよ。」

おばあちゃんのSF。」

「面白けれど、小説なのに数式が出てきて、大変。」

「ことちゃんに聞くといいよ。」

「うん、そうする。じゃあ、行ってきます。」

りとおばあちゃんは、SF小説を書くだけでなく、原宿にはいろんな人がいて危ないからと言って、りとに護身術を教え込むスーパーおばあちゃんである。

りとは、玄関から表に出てスケボーを下ろしながら、となりのおばさんにご挨拶。

「りとちゃん、おはよう。今日もPARKでバイト?」

「おはようございます。はい、PARKでバイトです。運営をまかされているので、頑張ってます。」

「偉いわね、まだ高校生なのに。また悪いんだけど、うちの三毛を猫カフェまで連れて行ってくれる?。」

「もちろん、いいですよ。って、もうスケボーに乗ってますね。」

三毛がスケボーの前の部分にちょこんと乗って、首を曲げて、りとの方を見ていた。

「そこが大好きみたいね。運転大丈夫?」

「少し乗りにくいけれど、そんなに急な坂はないので。大丈夫、ゆっくり行きます。それでは、行ってきます。」

そう言うと、りとはスケートボードに片足をおいて、反対側の足で地面をキックしてスケボーをスタートさせた。おばさんは、去っていくりとの背中に呼びかけた。

「よろしく、お願いね。」

ここ最近、りとはPARKに行く途中に、となりの家の猫を猫カフェまで連れて行くようになっていた。スケートボードで坂を下りながら、スケートボードの前に乗っている三毛をチラッと見た後、現実的なことを考えたりする。

「猫なのに、バイトか。時給いくらなんだろう。」

自分より猫の時給が高かったら、自分が猫以下の存在なような気がして、少し悔しいのかもしれない。りとは、あまり飛ばさないで、スケボーで坂を下っていく。ほどなく、猫カフェの建物に到着した。1階は猫カフェと経営者が同じクレープ屋さん。スタッフのさゆみんが、店の準備をしていた。

「おはよう、りとちゃん。」

さゆみんは、いつものように明るく朝のあいさつをした。りともいつものようにあいさつを返す。

「おはよう、さゆみん。」

さゆみんが三毛を運んでくれたお礼を言う。

「今日も、三毛ちゃん運んでくれたのね。ありがとうございます。」

「PARKに行くついでだから。」

さゆみんはりとのボードから三毛を抱き上げる。

「三毛ちゃんも、おはよう。りとちゃんのボードが好きなのね。」

三毛は不愛想な顔のままだった。りどが開店の準備ができているお店を見て、心の中ですごいと思う。

「さゆみん。いつも朝が早くて大変そう。」

「最近、原宿に世界中から観光客が来るようになってね。商売繁盛はいいけれど、忙しい毎日かな。お客さんが喜んでくれるのは嬉しいけど、りとちゃんの言う通り結構大変。」

りとも、うなづくかのように答えた。

「PARKも、店長が以前よりお客さんが来るようになったって言ってた。」

「2階の猫カフェも大繁盛みたい。三毛ちゃん、素朴だけれど、その素朴さを受けてすごい人気なの。時給、私より高いみたいで、私、猫以下の存在かと思うと少し悲しくなる。」

あきらめ顔で、さゆみんが言った。りとも、予想はしていたけれど驚いたように返事をした。

「えー、さゆみん以上ならば、私以上だ。私もやっぱり猫以下の存在か。三毛様と言わなくてはいけないか。」

「二人足したより高かったらどうでしょうか。」

「侍従かな。三毛様、どこへお連れしましょうか。」

二人そろって、

「あはははは。」

と屈託なく笑った。さゆみんが、若い人が自信を失ってはいけないと思ったのか、りとを励ますように言う。

「でも、三毛にはりとちゃんみたいな心温まる絵は描けないから。やはり人間は違うわ、時給が安くて。」

「時給が安くて。あははは。」

励ましても冗談ともとれる言葉が嬉しかった。

「時給が安くて、さゆみんみたいに、美味しいクレープは焼けないし。」

「おいしい？ほんとにー。」

さゆみんは、うれしそうに答えた。りとは、少し真面目な顔で続けた。

「本当においしいよ。今日も、おやつの時間買いに来る予定。」

「有難うございます。スペシャルにおいしく作るね。りとちゃんの裏原の壁の絵も、なかなかのものよ。あつたかい家庭の感じが出てる。」

絵を描くことが一番好きなりとは、壁の絵のことを知っていてくれて、絵を誉めてくれて、心の底から嬉しかった。

「ほんとに。有難う、さゆみん。ほんとに嬉しい。おばあちゃんとの生活も楽しいけれど。あの絵は両親といっしょの家庭、現実にはもうないけど、やっぱりあこがれはあるのかな。あつ、もちろん心配はいらないよ。」

「うん、今は仲のいい友達もできたじゃない。中学の時は友達があまりいなくて心配していたけれど。」

りとも昔からクレープを買いに来ていたけれど、一個人として知っていてくれるとは思っていなかった。少し驚いたように言った。

「えっ、そんなときから知っていてくれてたんだ。」

「うん。いつも一人で歩いていたら、クレープをかうときも1つだったから。今は、3つ買って行ってくれる。商売繁盛。」

心配してくれていたことを知って、りとは喜んで答えた。

「あはは。心配してくれていて、有難う。」

「お礼を言うのはこっち。毎度有難うございます。お得意様ですから、何かあったら言っつてね、力になるから。あんまり力はないけど。あつ、でも、重いものを持つのは得意。いつも荷物を運んでるから。そっちの力ならある。」

それに答えてりとがさゆみんの腕っぷしを見る。

「確かに、力ありそう。」

「そう言われると、怪力の持ち主みたいで、少し嬉しくないか。」

二人で笑った後、りとは心から、こんなにやさしいさゆみんの絵を描きたいと思った。

「今度、さゆみんの絵を描きたい。きつと、いい絵になると思う。」

「ほい、お得意様には逆らえない。休みの日にPARKに行けばいいのかな。」

「お店で働いているさゆみんを書きたいから、PARKが休みの日にこっちに来る。スケッチし

ていても、かまわないでね。」

「了解。」

と敬礼して答える。りとが気が付いたように言った。

「あっ、もうこんな時間、PARKに行かなくちゃ。」

「いつてらっしやい。あまり飛ばしちゃだめよ。」

「はい。行ってきます。」

りとは温かな気持ちで、PARKへ急いだ。

PARKは裏原のキャットストリートから遠くない建物の2階にある。建物の入口に着くと、りとはスケボーを抱えて、階段をトントントンと上がった。廊下を少し進むと、準備中と書いてある札が掛けられた扉が目に入った。その札は、昨日りとが描いた服とグッズの絵で可愛さを演出していた。りとは、その絵を見てまたちょっとだけ嬉しくなった。そして、期待を膨らませて扉を開けた。店の中では、学校はバラバラであるが学年が同じ高校2年生のまりとことがおしゃべりしていた。りとは朝の挨拶をしながら、店に入ってしまった。

「まり、ことこ、おはよう。」

りとを見たことが嬉しそうに返事をする。

「あっ、りとちゃんだ。」

そして、まりといつしよに挨拶を返す。

「りと、おはよう。」「りとちゃん、おはよう。」

契約時間前とはいえ、いつも自分が最後にPARKに着くので、りとは少しバツが悪い。

「二人とも早いね。ごめん、いつも私が最後。」

ことこはそんなことは全然気にしていない。

「一番近い人が一番遅く来ることは、良くあることだよー。」

まりもフォローも忘れない。

「まだ開店まで30分以上あるから、余裕ね。」

ただ、店長がいない中、店長代理を任されているまりは、さっそく仕事の話に入る。

「いま、ことこ昨日の反省をしていたのよ。」

ことこが具体的な内容を話し出す。

「そうなの、PARKを良く知っているお客さんは大丈夫だけど、観光客のお客さんがお店に入りにくいんじゃないかなーって。」

「この店、ちょっと奥まっているしね。」

りとが、あまり考えないで、とりあえず案を出す。

「どうする。ことこのアロマでおびき寄せる。」

まりが、いつもの通りのりとの提案に、いつものように少しあきれれる。

「おびき寄せるって、動物じゃないんだからお客様は。」

そんな感じで、りととまりの、とりとめのない会話が続く。

「そうか。じゃあ、キャットストリートで客寄せをする。」

「どうやって。」

「キャットストリートだから、猫で。」

「猫は、どうするの。」

「うーん、猫カフェから借りてくる。あーだめか、猫の時給は私たちより高いんだ。」

と言って、さっきのさゆみんとの話を二人に伝えた。まりが、それを聞いて、

「やっぱり、ねこ様を使うのは難しいわね。」

と、ねこに様を付けて答える。

「ねこの絵を描くこともできるけれど。」

「そうね、絵はいいけれど、絵だと置くところがあるかしら。」

「じゃあ、この建物の玄関に絵を置く。」

「そう、そうね、それが現実的よね。」

まりに続いて、ことこも同意する。

「それがいちばんPARKらしいと思うよー。」

店長代理のまりが指示を出す。

「じゃあ、りとは、お客さんを誘導するために、建物の前に置く絵を描いてちょうだい。」

りとは、自分の絵がまりに認められていることに喜びながら、すぐに返事をする。

「了解。」

昨日の問題が一段落して、まりはことこに開店に向けての指示を出す。

「ことこは、レジの準備をお願いね。あと、お店のホームページのチェックも。」

「まかせて、電子機器を扱うのは得意。」

「ことこのオタク力に期待しているわ。」

「嬉しいような、嬉しくないような。でも、わかったー。」

「私は、そうね、品物の整理をするわ。昨日の夜、新作の品物も届いているし。」

3人は仕事を始めた。まりは、手際よく商品を並べている。ことこはレジなどの電子機器の準備をしている。

りとは絵に何を描くかで悩んでいた。

「何の絵にしようか。猫だと客引きにはもう一つかな。」

少しして、アイディアが浮かんだ。

「そうだ、ここがいい。ことこがお客さんを招いているような感じがいいかな。」

と方針を決定して、スケッチを始める。ことこがりととの視線に気付き、真面目に尋ねる。

「りとちゃん、私に何かかっている?」



ことは、りとがじつと見ているのは、本当に自分に何かおかしいところがあるのかも知れない  
と思っていた。

「店の前の看板の絵、ここにしようと思って、スケッチ中。気にしないでいいよ。自然な感じ  
で描きたいから。」

「えー、私？まりちゃんの方がいいんじゃない。」

「今日は、ことこの気分かな。」

「どういうの、それー。」

「愛らしいくて清々しくなるような可愛さが欲しいときは、ことこかな。元気で暖かくなるよう  
な可愛さが欲しいときは、まりかな。今日は暑いで、ことこ。」

「よくわかんないけど、まあいいやー。」

まりが、口をはさむ。

「りとは、どんな可愛ささ。」

「えっ、私は別に可愛くないし。」

ことこが感じていることを素直に言う。

「りとちゃんは、意思が強くて熱くなる可愛さかな。」

まりも同意する。

「そうね。自分があって、芯が強そうだもんね。」

りとが、反論する。

「それは、まりもことこもそう。自分があって、いろいろなものを作っている。」

まりは、やっぱり違うと思って再反論する。

「うーん、私たちが意志が弱いほうとは思わないけど、でも、やっぱり、りとほどではないわね。」

りとは、議論しても仕方なさそうと思い、絵を描くための素材をまりに聞いた。

「もう、二人とも。まあいいや。そうしておく。ところで、まり、今日のお勧めの服はどれ。こ

とこに似合いそうなやつ。それを着た風のことこを描こうと思って。」

ファッションが大好きなまりが、準備していたかのようにすぐに服を取り出す。

「これかな。」

ことこは、可愛すぎるデザインに心配する。

「えー、その服、可愛すぎない。」

りとはすぐに太鼓判を押す。

「大丈夫、ことこは十分以上に可愛すぎるから。それで描くわ。まり、有難う。」

りとは絵を描き始めた。他の二人も自分の作業を続けた。

少しして、りとが絵を描き上げて、二人に尋ねた。

「どう？」

りとは、少し心配だったが、まりが絵を見て、すぐに本心からほめた。

「すごくいい。すごく可愛い。ことこの良さを引き出している。ホント、りとは絵の才能があるわ。羨ましい。」

大好きな友達から褒められて、りとも半端なく嬉しかった。

「まり、ほめすぎ。」

ことこの自分の可愛いすぎる絵に驚く。

「可愛いけれど、とても可愛いけれど、私じゃないみたい。さすが、りちゃん。似顔絵は、本物より可愛くするというもんね。」

まりは勇気づけるかのように、保証する。

「大丈夫、この絵の女の子、100%ことよ。」

まりは説明書きに関してアイデアを出す。

「下に、『こんな可愛い店員が、皆さんをお待ちしています。』と書いたらどう。私ならば入りたくなるわ。」

ことこは、少し恥ずかしそうする。

「えー。」

りとは、まりに絵を認められてもらったことはすごい嬉しかったけれど、ことこのことを考えて、もう少し柔らかな表現にすることを提案する。

「お客さん呼び込むアイデアとしてはとてもいいけれど、少し怪しいお店みたいになっちゃうわない。」

りとの意見を聞いて、まりも考え直して、指示をする。

「そ、そうね。ちょっとやめておいた方がいいかもね。『PARK 2階、可愛い服、グッズがいっぱい。皆さんをお待ちしています。』とだけ書いておいて。」

りとも同意する。

「了解。」

そして、看板にまりが言った文を書いた後、看板を建物の玄関に置いて、道から見ても、嬉しそうにつぶやいた。

と、嬉しそうにつぶやいた。

開店時間1分前。まりが、お店の準備の最終確認をしていた。そして、ことこに準備状況を確認する。

「ことこ、レジの準備はいい?」

ことこもちろんという感じで答える。

「準備OK。」

まりが指示を出す。

「じゃあ、開店するわよ。」

りとはことこが、今日起るできごとへの希望と不安を胸に答える。

「了解。」「ラジャー。」

まりが扉を開け、りとが扉が開けっ放しになるように固定した。さすがに、開店を待っているお客さんはいなかった。3人は顔を見合わせた。まりがりにとまりに指示を出す。

「まだ、時間も早いし。とりあえず、今できることをしましょう。」

二人も、もちろんそれは分かっていた。

「了解。」「ラジャー。」

と返事をする、3人は店の中に戻り、まりはお店や商品のチェック、りとはホームページに載せる絵の作成、ことはお店のホームページの確認作業を続けた。

開店から15分ぐらい経った頃、国内の観光客らしいカップルが店に入ってきた。まりがすかさず挨拶をする。

「いらっしやいませ。」

それを聞いて、りととことこが挨拶をする。

「いらっしやいませ。」

客の女性がレジのことを見て、嬉しそうな顔をしながら隣の男性に話しかける。

「表の看板の絵と同じ女の子。このお店、こんな可愛い子が本当にいるんだ。」

男性は、ことこのことを可愛いとは思ったが、ここで可愛いというと後々問題になるかもしれないと思って、同意だけすることにした。

「そうだね。」

レジの方に向かった女性がここに尋ねた。

「すごい、中学生?」

「高校2年生です。」

「高校生かー。原宿でバイトなんて、おしゃれでいいな。私も高校のころから、原宿に来てたら、もっとおしゃれになれたかも。ところで、お店に看板の絵で着てた服はあるの?」

と尋ねたので、まりは待つてましたとばかりに答えた。

「お客様、こちらになります。」

「すごい。私に似合うかしら。」

「もちろんです。お客様はとても、お綺麗でいらっしやいますから、ことこ、えーっと、レジの子とは違った可愛さを引き出せると思います。」

「お上手ね。あなたも高校生?」

「はい、同じ高校2年生です。当店の店長の家族が海外旅行中のため、私が店長代理を務めさせて頂いています。」

「店長代理?」

「はい、高校2年生のバイト3人でこの店を回しています。レジを担当しているのがことこです。そして、私、まりが店長代理です。ご覧になった立って看板の絵を描きましたりとか、今はあそこ

でウェブに載せる絵を書いています。」

黒い板状のタブレットを使って絵を描いたりとか、自分の名前が耳に止まったのか、小さい声で一言だけ答える。

「うん。」

ちなみに、このタブレットを液タブ（液晶タブレット、画像を見ながら直接描くことができるタブレット）に買い替えることが、りとのアルバイトの目的でもある。女性が興味津々にパソコンの画面をのぞきに来た。

「へー、これも可愛い。可愛い絵が上手なのね。」

りとは、店の様子をあまり気にしていなかったのに、突然微笑みながら絵をほめてくれる客の女性に気付いて驚いた。

「あっ、有難うございます。ホームページに載せる絵を描いています。」

お客の女性は描いている途中の絵を見て感心していた。

「まだ途中だけれど、ほんとに可愛い絵になりそうね。お店のホームページに載るのを楽しみにしているわ。」

それを聞いたまりが、しっかりとホームページの検索方法を伝える。

「はい、ホームページは原宿 PARKで検索して頂ければ、すぐに見つかると思います。」

「有難うね。さすが店長代理、高校生なのに本当にしっかりしてるわ。じゃあ、この服、頂くわ。」

「有難うございます。」

ことこの方を見て、まりが指示をする。

「私が包むから、レジお願い。」

「わかったー。」

ことが会計を始めた。客の女性が会計をしながら、ことこのを見る。

「返事も可愛いよね。」

会計を済ませると、まりと、ことが本当に嬉しそうにお礼を言う。

「お買い上げ、有難うございます。」「有難うございます。」

女性がりとの方を見ると、りとが二人をじーっと見つめながら、タブレットを使って何かを描いているのに気が付いた。女性がりとの方を見たため、りとが答えた。

「ごめんなさい。お客さん役として、明日の看板に登場させようと思って。あの、もちろん、誰だかわからないように描きます。」

「ちよっと見せて。」

と言って女性が見ると、感心して連れの男性客に話しかける。

「カッコいい。そう思わない。」

男性も感心して同意する。

「ナイス、カップルって感じだ。」

「ほんと、そんな感じ。」

女性客がりとの方を、すごいなという雰囲気で見ると

「りとさんだっけ、本当に才能あるわ。自由に描いていいわよ。でも、明日の看板に本当に載せてくれるの?」

りとがまりの方を見る。まりは、すぐに確約する。

「はい、お約束します。」

りともそれを聴いて、喜んで約束する。

「はい、明日載せます。」

そして、スケッチのための時間をお願いする。

「もしよろしければ、あと3分頂いていいですか。お店を見ていて構いません。」

「もちろん、単なる観光だから時間はたっぷりあるわ。」

女性客は、そう言いながらりとの方を見た。りとはスケッチをするのに夢中で、女性が何と言ったかわからないようだった。それで、女性客が男性客に話しかける。

「さすがね。」

男性客は、女性客の望みを先回りして言う。

「そうだね、明日も来なくちゃね。」

「そうね。」

と女性も答える。まりがすぐにお礼を言う。

「有難うございます。」

女性客が店を回っている間に5分ぐらいが経った。すると、りとが、

「スケッチ、できました。」

と言って、二人に商品を見ている仲の良さそうなカップルの絵のスケッチを見せる。女性客は、自分の姿を絵にしてもらって喜んでいた。

「すてきね。」

男性も同意する。

「明日も来るのが楽しみだな。」

「私も楽しみ。この絵で、この店にお客さんがたくさん来てくれると嬉しいけど。」

そして、続けてまりにお願いする。

「明日も来るわ。彼に似合う服を考えておいてね。」

まりは、もちろん微笑みながら引き受ける。

「かしこまりました。明日までに、とっておきのものを選んでおきます。」

りとはスケッチを見て仕上げの案を考えていた。カップルのお客は、その様子を見て、

「明日を楽しみにしているわ、将来が楽しみな絵描きさん。」

とだけ言って店を出て行った。りともそれに気が付いて、2人の背中に返事をする。

「あ、有難うございます。」

それに続いて、まりとところが感謝の挨拶をする。

「本日は、ありがとうございます。明日のご来店をお待ちしています。」

「ありがとうございますー。」

まりが、カップルの二人を見えなくなるまで見送った。やはり、店長代理として今日の初めての売り上げは嬉しかった。

「今日初めての売り上げ。この調子でいくわよ。」

ことかも、今日最初の売り上げに喜びながら、すぐにそれに答える。

「がんばろー。」

一方、りとをみるとスケッチを見ていて、聞こえないようだった。

「だから、りとは違うっていうことね。」

まりの中では、あきらめと集中力の高さに感心する気持ちが交錯していた。ことかもりとを見ながら同意する。

「そうだけど、それがりとちゃんのいいところだよ。」

「そうね。将来、大物になりそうね。」

すると、二人で顔を見合わせて微笑んだ。りとは、スケッチをじっと見たままだった。

少しして、若い女性がぶつぶつ言いながら店に入ってきた。まりとところが、いつもの通り来店店の挨拶をする。

「いらっしゃいませ」

ときどき来るお客さんと、買い物物のターゲットを決めているお客さんなので、まりは様子を見ることにした。グッズ売り場の前で止まり、商品をぶつぶつ言いながら見ていた。ぶつぶつ言いながら同じキヤラの商品2種類を2ずつ手に取って、レジに持ってきて、ぶつぶつ言った。ことこは、お礼を述べて合計金額を示す。

「ありがとうございます。」

客はぶつぶつ言いながら、ピッタリのお金を皿に置いた。それを見たことがお金を皿から取り出し、レジを操作した。

「ちょうどですね。ありがとうございます。」

まりはレジまで来ていて、商品の袋詰めを行い、レシートをレジから取って、商品とレシートを女性に渡した。女性は、レシートを見て、ぶつぶつ言いながら店を出て行った。まりとことこは、お客さんの背中に向けてお礼の挨拶をする。

「毎度、ありがとうございます。」

客が見えなくなると、2人で声を出さずに腹筋が痛くなるほど笑っていた。

しばらくして、今度は男性客が一人が入ってきた。このお客も常連さんだった。ことこが真っ先に来店店の挨拶をして、続いてまりが挨拶をする。

「いらっしやいー。」「いらっしやいませ。」

ことこの元気な声で気が付いたりとが少し後から気のない挨拶をする。

「いらっしやいませ。」

男性客はグッズ売り場で、すぐにグッズを2つ取ると、レジに向かった。

「ここちちゃん、こんにちは。表の看板のモデル、ここちちゃんだよね。すごく可愛いから感激した。ほんとすごい。」

「ありがとう。あれ、りとちゃんが描いたの。」

「あの絵が見れて、今日はPARKに来て本当に良かった。写真に撮っちゃったけどいいかな。」  
「もともと宣伝用の絵だし、いいと思うよ。」

「ところで、この2つのグッズすごい気に入ったんだけど、これ、何のアニメのグッズ？」  
「まりは大丈夫とは思っているが、念のため、レジから3メートルぐらいのところで、様子を伺うことにした。ことがすぐに答える。」

「これはビーチボールってアニメ。高校のビーチボール部の話だよ。」

「この男性キャラがカッコいいし、女性キャラに美人が多いから買おうと思って。美人といっても、ここちちゃんの可愛さにはかなわないけれどね。」

「えー、そんなことないよ。それにこのキャラ、リカって言って、美人だけど女子部の部長なの。そして、女子部ばかりじゃなくて、男子部のみんなも引張って行って、男子部を県大会優勝に導くんだよ。女子部は、残念ながら2回戦で負けるんだけど。」

「へー。」

「女子部が負けてからも、リカは男子部のために、男性選手のフォームのチェック、作戦の立案や、マネージャーのような仕事もして男子部の優勝に大きく貢献するんだー。」

「そうなんだ。面白そう。」

「このアニメ、基本的にはこの男子部部长悠斗のハーレムもので、リカも悠斗が好きなんだけれど、失恋してしまうの。それでも、精一杯やることはやったというすがすがしさが良かったんだー。」

「ちょっと切ないね。」

「そうだけど、最後に全員でビーチバレーをするシーンでのセリフが、いろんな思いが交錯していて、ほんとうに泣けるの。あー、あんまりネタばれしちゃいけないか。」

「大丈夫。面白そうだから、こんど見てみることにするよ。」

「うん、是非見てみて。」

「この2つをお願いしようかな。あと、このアニメで他にお勧めはある。」

「他のおすすめはー。私はリカが好きなんだけれど、一般的に男性に人気があるのは、恋愛の勝利者のユミかな。すごく可愛いなの。」

「へー、そうか、見てみたいな。」

「こっちに来て。」

そう言いながら、ことが男性客を案内する。

「えー、切れてる。ごめんなさい。」

「あー残念。見てみたかった。来週には入る？」

「問屋に在庫があれば、来週までには入る。」

「そうか、じゃあ来週また来る。」

「ほんと？じゃあまた来週ね。ほんとに、ごめんなさい。」

「いやー、来週の楽しみができて、良かったよ。」

「そう、すぐに問屋に発注するから待っててね。」

「喜んで待ってる。」

そう言うと、二人はレジの方に行き会計を済ませた。会計が終わった後、男性客は出口に向かい、来週のことを考えながら、ことに短く挨拶をする。

「今日は有難う。じゃあ、またね。」

まりとりとが、お礼の挨拶をする。

「有難うございました。」

そして、今回は最後にことが挨拶をする。

「有難うございました。じゃあ、来週ね。」

男性客が見えなくなっただ後、まりがりとに話しかける。

「ことこ、可愛い顔をして結構すごい。」

「ほんととすごい、アニメの話だと急に饒舌になるよね、ことこって。詳しいし、アニメが大好きって感じ。ビーチボール、ことこの推しアニメのようだし、私もそのアニメを観てみようかな。」まりがそれを聞いて「あーもうわかってよ」という感じで、りとに再度話しかける。

「そこじゃないでしょう。りと。」

「はい？」

「また、来週』とか『じゃあ、来週ね』とか。」

「入荷の時期をちゃんと確認して、ことこは親切だね。」

「あーあーあーあー。」

「えっ、ごめん、まり、私、何か変なこといった。」

「大丈夫よ。りとはぜんぜん悪くないわ。この話をりとに振った私が悪いの。」

まりはりとにわかってもらうことをあきらめて、ことこの方を少し真面目に見た。

「あのお客さん、変なことも言わないし、節度は守っているようだから何も言わないけれど、ここは大丈夫？」

「私のお気に入ると同じグッズを買ってくれるいいお客さんだよ。」

「そうね、原宿の人という感じはしないけれど、清楚な感じで悪い人ではなさそうだけど。」



「私の話をちゃんと聞いてくれていて楽しいし。」

「まあ、ここに首ったけみたいだから、話を聞くのは当たり前だろうけど。」  
りどが口を挟む。

「えっ、ここに首ったけなの？」

「わかんないの？」

「そう言われてみれば、そうか。」

「わかってくれた。うん、りとはだんだん成長してくれればいいわ。それで、ここ、ここは  
どうなの。」

「どうって。」

「付き合いたいとか？」

「えっ、そんなのまだわかんないよー。まりちゃんやりとちゃんといっしょにPARKやりたい  
し。」

「ぼやぼやしていると、他の女に取られちゃうかもしれないよ。」

りどが口を挟む。

「さすがに、取られるとか。3人がいっしょならばいいじゃない。PARKでやって行こうよ。」

まりが、答える。

「りとはね。もちろん3人はいっしょだけど、それ以外もあってもいいという話。」

りどが急に思いついたように、グッズ売り場に向かう。一方、ここはまさに本当の自分の気持ち  
を伝える。

「とりあえず、今は、今のままが一番だよー。ほんとだよ。」

「ここがそれでいいならば、それでいいけれどね。何かあったら、りどと二人で相談にのる  
ら、何でも言っただけ。」

それに答えてここが感謝の意を示す。

「有難う、まりちゃん、りどちゃん。うん、二人には絶対隠し事をしないで相談する。」

「まあ、この件に関しては、りどは話をわけのわかんない方向に持っていくさうだけれど。」

グッズ売り場の足元の引き出しを開けたりとが、ちょっと勝ち誇ったように言う。

「ここって、すごく頭がいいけれど、ちょっとだけドジなところがあって可愛い。ユミのグッ  
ズの在庫、下の引き出しにある。」

ここが、知らなかったように答える。

「あーそうか、いけない、忘れてたー。」

「ほんと。」

そう言いながら、りどとここ2人で笑った。まりは何か言おうと思ったが、それ以上踏み込ま  
ないことにした。グッズの在庫について忘れていたことが、うっかりだったのか、わざとだった  
のか、ことこしかわからないことであると思ったからである。まりが、次の指示を出す。

「さあ、仕事、仕事。りとは、そのビーチボールってアニメが人気なようならば、時間があるときに、可愛い絵のポップ(Point of Purchase advertising、キヤッチコピーや絵などを添えて商品の説明や価格を書いたもの)を描いておいてくれる。」

「了解。」

その会話にことが反応する。

「私もりちゃんが描いた絵、見てみたい。悠斗とリカと二人の絵を描くと、女の子に絶対人気が出るから。」

「了解、ことこ。アニメ、急いで観る。」

ことこの笑顔を見て、りとはやる気満々になり、グッズを見ながら、ことが喜びそうな絵の構図を考えていた。

こんな調子で、断続的にお客さんが入店し、その中の何割かのお客さんが商品を買っていった。接客は基本的にはまりが行い、レジはことこ、まりが接客中にレジにお客さんが来た時には、りとは袋詰めなどを担当して、PARKの営業時間が少しづつ過ぎていった。

昼を過ぎたころ、まりとことこが、それほどは忙しくない店の運営を続けていた。りとは、まりと相談しながら、新しく入荷した商品のポップの原案を描いていた。りとのポップは、その商品を着たり使っている人を描いた絵を中心にした、絵にこだわったポップになっている。

そんなときである、可愛い小さな女の子が入ってきた。まりとことが声をかける。

「いらっしやいませ。」

ことが、小声でまりに女の子のお客さんを見た印象を伝えた。

「わっ、かわいいー。」

まりは子供しか入って来なかったため、声をかけた。

「お客様は、おひとりでしょうか。」

「そうですね。」

まりは、迷子の観光客かもしれないと思って尋ねる。

「大丈夫、迷子になっていないならば、お姉さんが力になるわよ。」

「大丈夫ですか。」

「そうですね。」

「お店の中を見させてもらっていいですか？」

「どうぞ。」

まりは、そう返事をして、とりあえず少し様子を見ることにした。女の子は、店を回って気に入ったものがあつたのか、それを持つてことこがいるレジまでやってきた。それは、小さいアクセサリーのポップ、綺麗な草原を背景に、可愛い女の子がそのアクセサリーを付けている絵が描いてあつた。

「これが欲しいですな。千二百円ですな？」  
「ここが確認のために尋ねた。」

「この商品が欲しいの？待ってて、取ってくるから。」  
「ここが、商品を持ってきて女の子に見せた。」

「違うですな。これですな。」

女の子はりとが描いたポップを指さした。ここは、困った感じで答えるしかなかった。

「うーん、これは商品じゃないんだけどー。」

「お金と言うものならば、あるですな。地球で買い物をするのに必要ということですよ。」

女の子は、持っていた鞆から財布を出して渡した。ここが、財布の中を見ると、米ドルと1万円札がぎっしり入っていた。

「クレジットカードもあるですな。そして、これがパスポートですよ。」

そう言いながら、女の子はクレジットカードとパスポートをここに渡した。困ったことは、まりを呼んだ。

「まりちゃん、ちょっと来て。」

まりは、そばで様子を見てたので、すぐにレジにやってきた。ここがまりに、テーブルの上の財布、クレジットカード、パスポートを確認するようにお願いする。

「これを見て。」

まりが確認すると、現金は本物のようだった。クレジットカードは、カメックスのブラックカードだった。まりはパスポートを見ながら女の子に話しかけた。

「ミサ マルノちゃんというの？」

「そうですな。丸野ミサですよ。」

「アメリカから来たの？」

「えっ、あっ、そうですな。」

「今日は原宿に一人で来たの？」

「そうですな。」

「お父さん、お母さんは心配していない？」

「父上と母上が、この歳になったら一人でやらなければいけないと言うんですな。だから、一人でやってるんですな。」

「みさちゃん、申し訳ないんだけど、これは売り物ではないんですな。ちつ違った、うつっちゃった。これは売り物ではないの。あそこのお姉さんがこの商品の宣伝のために描いているの。絵を描くところを見る。」

まりは、ことごと相談する時間を稼ぐために、みさをりとに任せることにした。

「りと、絵を描くところを見せてあげて。」

状況を把握していないりとが答える。

「はい？」

「この女の子、みさちゃんに、絵を描くところを見せてあげて。」

「えっ、いいけど。」

りとの了解が得られたので、まりがみさに絵を描くところを見てくるように促す。

「あのお姉さん、りと言っただけで、みさちゃんに絵を描くところを見せてくれるというから、行って見てきてごらんさい。」

みさは絵を描くところを見ることに喜んで、まりに感謝した。

「はい、ですな。親切に有難うですな。」

そして、りの方に向かった。りとは、みさに挨拶をする。

「はじめまして、みさちゃん、私はりと言います。絵を描くのが大好きで、こうして店のポップ、商品の広告を描いています。」

「はじめましてですな。丸野みさと言っただけですな。スクー、じゃない、アメリカから来たんですな。」  
みさもりとに挨拶を返した。りとが椅子を一つ運んで隣に置いた。

「じゃあ、みさちゃん、隣に座って。みさちゃんを描くね。」

「有難うですな。嬉しいですな。」

本当に喜んでいようだったので、りとも嬉しくなった。

「背景は、何がいい。」

「うーん、このお店ですな。」

「分かった、PARKの店の中のみさちゃんを描くね。」

構図が決まると、タブレットにみさと店内のスケッチを始めた。

まりとことこは相談を始めていた。まりが言う。

「この現金、やっぱり偽物ではなさそうだよ。」

「ブラックカードも本物だよー。これ、本当のお金持ちか、大統領しか持てないカードだよー。」

「パスポートも本物みたいだし、何だろう。アメリカのお金持ちは、修行のために女の子を一人で旅させるのか？」

「危ないよねー」

「日本の方が安全と言うことで、旅をさせているのだとしても、さすがにあんな小さな女の子に、大金を持たせるのは危ないわよ。何、考えているんだろう。」

「もしかするとー、黒服の人が少し離れたところから見ているのかもしれないねー。」

「普通ならばアニメじゃないんだからーって笑うところだけど、本当にそうかもしれないわね。」

「でも、悪いことをしなければ、大丈夫だよー。」

「まあ、そうね。でも、この大金を見て、みさちゃんに悪いことをした人は、明日東京湾に浮か

んでるかもしれないわね。」

「えー。」

「大丈夫、悪いことをするつもりは全然ないし。」

まりは、りとの方に近寄った。りとは、みさをスケッチした後、色を付けているところだった。みさは、だんだんと絵になっていく様子を食い入るように見ていた。まりも、うまいものねと思いながら、レジに戻って、ことごとどうするか相談した。

「どうしようか、警察に連れて行った方がいいかな。」

「どうだろうー。迷子の自覚がないから、警察には行かなさそうだよ。」

「ほっておくわけにもいかないし。」

「黒服の人がついていれば、いいんだけど。」

りとは絵を描き終えて、印刷を始めた。印刷が終わると、みさに渡した。

「ありがとうですな。すごいですな。これ買いたいですな。おいくらですな。」

「いいよ、記念にあげる。私も楽しかった。小っちゃい可愛い女の子が描けて。みさちゃんに似た女の子を、ポップ、こういうものに、使うかもしれないけれど、いいかな。」

「もちろんですな。似た女の子でなくて、私がいいですな。」

「そのへんは考える。」

「でも、みさに似た女の子が描いてあるポップならば、欲しいですな。」

「分かった、そのときは同じものを刷ってあげるね。」

「ほんとですな。どんどん使って欲しいですな。」

りとは、おばあちゃんと2人暮らして、姉妹がいないため、年の離れた女の子と話す機会はほとんどなく、みさとの会話を本当に楽しんでいた。

また、ことがみさを呼んだ。

「みさちゃん、アロマを試してみる。」

「アロマって何ですな。」

「いろんな香り。いいにおいだよー。」

「試してみるですな。」

ことが、趣味にしているアロマをみさに嗅がせ始めた。みさは、

「いい香りですな。」「ちょっと変な香りですな。」

と楽しんでいた。その間に、まりはりとにさっきのみさに関する話をした。

「黒服の男？うーん。」

そう言うと、りとはいきなり入り口のドアと窓のカーテンを閉めた。そして、あちこちの窓で、カーテンの隙間から外を覗いた。まりは驚いて尋ねる。

「何しているの。」

りとはまったく平然として答える。

「急に、窓とカーテンを閉めたら黒服の人が慌てるから、どこにいるかわかるんじゃないかと思  
って。」

「まりは、かなり呆れていた。」

「まあ、そうだろうけど。」

「私、目はいいの。遠くまで見渡したけれど、怪しそうな人はいなかった。大丈夫みたい。」

「そうね。じゃあ、黒服の男はいないということね。」

「たぶん。でも、隣の建物のエビの天ぶらの模型がなんか動いていた。となりの建物に、そば屋  
なんてあったっけ？」

「どうだっけ。入れ替わりもあるし。」

「それにしても、生のエビの模型ならばわかるけど、エビの天ぶらは動かなくていいのに。」

「そう言いながら、ドアとカーテンを開けた。まりも、りとは指さしたエビの天ぶらの模型を確認  
する。」

「蟹のお店の模型も動くけど、あれは、生きてる蟹だしね。蟹爪フライが動いたら変だわね。  
ただ、まりはりとの行動がちょっと危険と思ったのか、注意した。」

「でも、もし黒服の人がいたらどうするの。誘拐犯と間違えて、踏み込んで来るかもしれないじ  
やない。」

「そのときは、みさちゃんを渡せばいいだけでしょ。簡単。ついでにそのとき、こんな子を  
人にするなど文句を言ってやる。」

「やっぱり、りとはりとね。度胸が据わっているわ。」

「そんなことないよ。でも、黒服の男がいないんじゃないでしょう。」

「そうね。」

「みさちゃんと相談しようか。」

「とりえあえず、そうするしかないわね。」

りとは、ことこのところに行つて、みさに話しかけた。

「アロマ面白い？」

「うん、面白いんですな。いろんな匂いがあるんですな。」

「ところで、みさちゃん、これからどうするの。どこか行く当てはあるの。今晚泊まることか。」

「明日になれば、原宿に迎えが来るんですな。」

「お父さんとお母さん？」

「違うんですな。部下たちですな。」

「部下って、みさちゃんの。」

「そうですな。」

りとはまりと話す。

「明日には、黒服の男が迎えに来るのかな。」

「黒服じゃなくて、普通のスーツかもしれないけどね。」

「じゃあ、明日までのことを考えればいいのかな。」

りとがみさに話しかける。

「明日までは、どうするつもりだったの？」

「決まってるんですな。」

「じゃあ、ここに泊まっていく？」

「ここに泊まっていいんですな？」

「うん、私たちも泊まるから。」

りとがまりとことこに話しかける。

「まり、ことこ、今日、PARKに泊まろう。」

まりが驚いて答える。

「また、急に。」

ことこは逆に積極的に答える。

「やったー、泊まろう、泊まろう。お泊りしようー。」

それを見て、まりも、まあいいかという感じになる。

「そうね、前からお泊り会しようと言ってたものね。お布団ならば確か5枚、災害用のものがあるし。この前干したばかりだし。一応、確認してくるわ。」

まりは、準備室の方に確認しに行く。そして、すぐに戻ってきた。

「お布団は大丈夫よ。」

店に泊まることができることを告げた。りとがみさに確認した。

「どうする、泊まっていく？」

「可愛いものがいっぱいいるのPARKが大好きですな。泊まっていくですな。」

「了解。じゃあ、泊まっていこう。」

「わーいですな。」

話がまとまった。3人はそれぞれ家に連絡して、宿泊の許可をとる事にした。ことこは両親に電話する。

「ごめんなさい、今日、急にお泊り会をする事になったー。」

「そうかい、大丈夫なの。」

「大丈夫、まりちゃんもりとちゃんも一緒だからー。」

「PARKに泊まるのかい？」

「うん、PARKにいるので、なんかあったら携帯かお店に電話してー。」  
まりが電話すると妹が出た。

「ママとパパが帰ってきたら、おねえちゃん、今日、りとことこPARKに泊まるって伝え

て。」

「おねえちゃん、今日帰ってこないの？大丈夫。」

「大丈夫、心配ならば電話するように言って。」

「でも、おねえちゃんだけずるい、私もお泊りしたいな！。」

「はいはい、今度ね。」

「絶対ね。」

「絶対。」

りとはおばあちゃんに電話する。

「おばあちゃん、朝の約束を破って悪いんだけど、今日、PARKに泊まることになった。」

「おやそうかい。まりちゃんのことちゃんも、いっしょかい。」

「そう。それと小っちゃな女の子のみさちゃんもいっしょ。」

「みさちゃんかい。どこの子だい？」

「アメリカから来たって。一人なの。とってもいい子だよ。」

「アメリカの子で、一人で、みさちゃんかい。そうかい。でも、まさか、そう、丸野みさちゃんじゃないだらうね？」

「そうだよ。知ってるのおばあちゃん。」

「いや、知らないよ。知らない。でも、大丈夫かい？」

「良くわからないけど、大丈夫そう。明日には迎えが来るって。」

「そうかい。迎えかい。うーん、もしかすると良い機会かもしれないね。でも、気を付けるんだよ。」

「わかった。気を付ける。じゃあ明日。」

電話を切ったりとは、会話で腑に落ちないところもあったけれど、あまり気にせず、みんなに報告した。

「おばあちゃんが、泊まっていって。」

まりがお泊り会の宣言をする。

「今日は、みんなでお泊りね。」

ことことみさが、手をつないで喜んでいた。

「お泊り。お泊り。おーとーまりー。」

まりが、みさに尋ねる。

「閉店まではどうする。」

みさが答えた。

「お店のお手伝いをするですな。」

まりがお礼を述べた。

「有難う、みさちゃん。りとより、助かるかも。」



「りとちゃんは絵が上手だから、絵を描いていればいいんですな。」

「さすが、みさちゃん。経営者の才覚があるわ。」  
りとが口を挟んだ。

「経営力はみさちゃん以下かな。しょうがないか。みさちゃん、もし社長になったら、是非雇ってね。ポップとか描くから。」

「わかったですな。りとちゃんには絵を描くすごい才能があるんですな。」

「ありがとう。」

まりが、このやり取りを聞いて、感心して言う。

「りが、もう丸め込まれている。さすが、みさちゃん。育った環境が違うのかもしれないわね。」

「まあ、そうかもね。」

りとも、仕方なさそうに返事をした。まりがとりあえずの行動を提案した。

「もう1時近くで、お腹がすいてきたから、りと、クレープを買ってきてくれる。いつものやつ。行くついでに、みさちゃんに裏原を案内するといいわ。」

「わかった、まり。そうする。ことは何のクレープがいい。」

「いつものやつでいいよ。」

「わかった。じゃあ、みさちゃん行こう。裏原を案内してあげる。」

「お散歩、嬉しんですな。」

「じゃあ、行ってくるね。」

「行ってくるんですな。」

「いってらっしゃい。ゆっくりしていいわよ。」

「いってらっしゃい。」

そんな挨拶を交わして、りととみさがPARKを出て、さゆみんがいるクレープ屋に向かった。

裏原のキャットストリートを散歩しながら、絵画などを展示・販売しているギャラリー、オリジナルで可愛い洋服を作っているお店、おもちゃやさんなどに立ち寄った。ギャラリーでは、いろいろなアートを見たみさが喜んでいた。

「面白いんですな。ユニークなんですな。」

ただ、みさはりととの絵をよほど気に入ったようだった。

「りとちゃんの絵の方が可愛くて好きなんですな。」

りとは、プロの作品の前でも自分の絵を好きと言ってくれたことが嬉しかった。その気持ちを絵でお返しすることにした。

「本当？じゃあ、後で4人そろった絵を描くね。」

「嬉しいですな。りとちゃんの絵も、こんな風に、まとめて展示して欲しいですな。」

「うん、自分の絵でこんなふう to 個展を開くのが夢なんだ。」

「わかったですな。みさが何とかするですな。」

「ほんと。」

「ほんとですな。」

もちろん、りとは家はお金持ちかもしれないが、子供の言うことなのであまり信じてはいなかったが、絵を描くモチベーションにはなったようだった。

「わかった、これからも、絵をいっぱい描きためておくね。」

「それがいいですな。みさも、りとちゃんの個展の実現に向けて頑張るんですな。」

「有難う。私も頑張る。」

そう言って、二人は約束を交わした。その他いろいろ見て回った店で、みさが一番喜んだ店は、やはりおもちやさんだった。アンティークなおもちやが置いてある店だったが、それが新鮮に感じたのかもしれない。

「これ面白いんですな。」「こう動くんですな。」「わっ、可愛いんですな。」

みさはおもちやを見てはしゃいでいた。りとが、やっぱり子供ねと思いつながら尋ねる。

「どのおもちやが好き?」

「これですな。やわらかそうで、形がとっても可愛いんですな。」

小さな子が喜びそうなデフォルメされた子猫のクッションを指して答えた。

「そう。私も好きよ、このシリーズ。」

「シリーズと言うと、いっぱいあるんですな。」

「遊園地もあるぐらい。また、日本に来ることがあったら、連れてってあげる。」

「ほんとですな。嬉しんですな。ずうっと、ここにいたいんですな。」

「どうぞ、喜んでみさちゃんを歓迎するよ。」

「嬉しいですな。父上に言って、ここにも家を作ってもらおうですな。」

「えっ、さ、さすが。わかった。そうになったら、一緒に遊ぼう。」

「有難うですな。約束ですな。」

「約束。」

「やったーですな。そのお礼に、父上に言って、個展だけじゃなく、りとちゃんが一生好きな絵を描いているだけですむようにするですな。」

「本当に? まあ、そのときは、よろしくね。」

「本当ですな。」

「わかった。その時を待っている。それじゃあ、お腹もすいたし、クレープを買いに行こうか。」

「はいですな。」

二人は、さゆみんのクレープ屋に向かった。

クレープ屋に着くと、さゆみんがクレープを店先で売っているところが見えた。

「さゆみん、こんにちは。クレープを買いに来ただけど、大丈夫? 結構、疲れていそう。」

昼を過ぎて少し疲れた表情だったさゆみんの表情が明るくなった。

「りとちゃん、こんにちは。毎度有難うございます。もちろん、今日も商売繁盛だけど大丈夫。りとちゃんからの注文ならば、Angelyが総力を上げて作るわよ。」

そして、となりの小さな女の子に気付いて尋ねる。

「りとちゃん、隣の子、りとちゃんの親戚の子？」

りとは、みさを見ながら、さゆみんに簡単に説明する。

「ううん。違うの。お店に来たお客さんで、アメリカから一人で来たんだって。親に、一人で頑張れと言われたみたい。3人でどうしようか相談したんだけど、明日には迎えが来るという話なので、みんなでPARKに泊まることにした。」

「お泊りなんですか。」

高校生だけ泊まるのはやはり不安なのか、りとに確認した。

「そうなの。大丈夫？」

りとは、しっかりと答えた。

「明日までだし、布団も5枚あるし、大丈夫。」

「りとちゃん、しっかりとしているところはしっかりとしているし、まりちゃんもいるから大丈夫かな。とっても楽しい一晩になるかもね。」

「ほんと、みんなで泊まるのすごい楽しみ。」

「そうでしょうね。」

「えーと、クレープをお願いします。3人はいつものやつでお願い。みさちゃんは、どれにする。」

メニューを見てみる。

「うーん、これですか。」

みさは、サーモン&アボガトグレープを指さした。さゆみんが注文する4つのクレープを確認した。

「サーモン&アボガト、バナナチョコチーズ、ストロベリーティラミス、ストロベリー抹茶チーズクリームクレープね。了解。」

その注文を聞いて、別の店員がクレープを作り始めた。そのとき、みさが口を挟む。

「お金は、みさが払うんですな。」

りとが、みさに言った。

「大丈夫。私たちが払うから。」

そして、りとは大人のさゆみんにも相談することにした。

「そうなの、みさちゃん、すごいお金をいっぱい持っているの。あと、クレジットカードもブラッカードとかで。それで、一人じゃ危ないんで、みんなで泊まろうかって。」

そして、みさをお願いした。

「大丈夫だから、お財布をさゆみんに見せてあげて。」

「はいですな。」

さゆみんは、財布の中身をちょっと見ると、店の中に2人を呼んだ。

「ちょっと、店の中の方がいいから、こっち来て。」

二人が店に入ると、りとに話しかける。

「ずいお金ね。」

「そうですね。」

「りとちゃんが心配するのも分かるわ。」

「うん。でも、パスポートも本物みたいだから、お金持ちの娘の修行じゃないかって。」

「それにしても、無茶ね。」

「そう。もしかすると、黒服の男がどこかで見てるんじゃないかって。」

「ほんと、いてもおかしくはなかったりするわね。」

「もう1回確認してみる。」

りとは外に出て店の外を見回した。

「黒服の男、いなさそう。急に店に引き込んだら、黒服の男は驚いて様子を見るはず。」

「わー。私、知らずに危ないことをしちゃったのかな。」

「大丈夫。私、目はいいの。怪しい人はいなかった。」

「良かった。」

さゆみんは、クレープを作るところを見ていたみさに、念のため確認する。

「みさちゃんは、パスポートによると、ミサマルノと言うの？」

「そうですね。丸野みさですな。」

「丸野みさちゃん。えっ、マルノミサ・・・」

さゆみんは少し驚いた顔をして考え込んでしまった。それで、りとが尋ねた。

「さゆみん、みさちゃんを知っているの。おばあちゃんも知っていそうだった。」

「単なる同姓同名かもしれないけど。」

気をとりなおして、安全確保について、みさに尋ねた。

「お父さんやお母さんと連絡する手段はあるの？携帯電話とか？」

「通信装置があるんですな。」

りとが何かの時のためにその通信装置を確認しようとする。

「そんなもの持っているんだ。そうか、それに気が付くさゆみん、さすが。みさちゃん、ちよつと見せてみて。」

「はいですな。」

みさは快く返事をして、携帯電話みたいなものをりとに渡した。

「私、英語が不得意だった。よく分かんない。でも、アルファベットじゃないみたい。」

しかたがないので、携帯電話みたいなものをさゆみんに渡した。さゆみんが少し驚いた顔した後、

携帯電話みたいなものをみさに戻した。そして、りとに告げた。

「少し心配だから、私も泊っていいかな。」

「えっ、さゆみんも泊ってくれるの？嬉しい。大歓迎。まりとことも大喜びだと思う。ちょっと待って、一応、2人に確認する。」

りとはスマホのSMSを使って、まりとここに確認した。そして、さゆみんに報告する。

「もちろん2人も大歓迎だって。」

「本当。有難う。えーと、夕食とか考えてあるの。」

「えっ、全然。」

「じゃあ、簡単に作れるカレーライスにしようか。材料は私が買っていく。炊飯器はある？」

「うーん、家にはあるけれど、PARKにはなさそう。」

「わかった、持っていくわ。」

「大丈夫？重くない？取りに来ようか？」

「大丈夫、これでも毎日、お店で重い材料を運んでいるのよ。それじゃあ、みんなでカレーを作って食べて、銭湯に行つて、寝ましょう。」

「すごい楽しそう、さゆみん。本当に楽しみになってきた。二人に伝えるね。」

SMSでさゆみんの提案を伝えると、すぐに返事が返ってきた。それをさゆみんに伝える。

「みんな、さゆみんのことを天才って言ってる。」

「ありがとう。私も仕事終わりの楽しみができて嬉しい。みさちゃんもいい？」

「りとちゃんが喜んでいるならば、もちろんですな。」

それを聞いて、さゆみんとりが、

「どちらが、保護者かわからないわね。」

「ほんと、すこし大人びたところがあって。普段の生活の違いかな。」

「うん、そうかもしれない。じゃあ、7時半ごろ、一式持って行くね。」

「わかった。手伝いが欲しかったら本当に連絡してね。」

「近いし、台車を使うから大丈夫。」

「わかった。じゃあ7時半にPARKで。」

「はい、それじゃね。」

「またですな。」

りとはクレープの会計を済ませて、クレープを持ってPARKに戻っていった。さゆみんは少しだけ心配そうに二人を見送りながら、小さくつぶやいた。

「お姫様の修行かな。まあ、彼らならば大丈夫かな。」

りととみさが、店に戻ってきた。いつもの通りにプラスワンした挨拶をかわす。

「ただいま。」「ただいまですな。」「おかえりなさい。」「おかえりー。」「おかえりー。」

早速、りとがクレープを配った。店にお客がいなかったため、店のテーブルで食べることにした。「いただきます。」「いただきますですな。」

4人がいただきますを言った後に、クレープを食べ始めた。まりが、さゆみんの提案に感心してりとに言った。

「それにしても、さゆみん、頼りになるわ。さすが、大人の女性ね。」

「うん、そう、頼りになる。」

ところが、りとに期待を込めて話しかける。

「今晚、さゆみんといっぱいお話ができそうで楽しみ。あんまり話したことがないから。でも、さゆみん、アニメ見てるかな。アニメの話じゃなくても、クレープの話でもいいかな。アロマの話でも。」

「アロマなら興味あるかも。」

「だったら、いっぱい話せるよー。」

「そうね。でも、もし好きだったら、さゆみん、プロ並みに詳しいかもしれないけど。」

「その時は、逆に教わるから大丈夫だよー。」  
まりも話に加わる。

「私も、ファッションの話をしたいの。どんな服を着るのか興味あるわ。美人だしスタイルも抜群だし。着飾るとすごそう。」

自信なさげなりとが、まりに話しかける。

「さゆみんもまりもスタイルいいから、最新ファッションが似合いそうで、いいよね。ここは、ここで、可愛いし。私が一番中途半端かな。まあ、仕方ないけど。」

「りと、何かトラウマでもあるの?」

「トラウマじゃないけど、小さいとき、よく男の子に間違われた。おばあちゃんには、護身術とか言って、いろんな拳法を叩き込まれていたし。」

「りと、もしかすると強いのか?」

「そんなことはないと思うけど。」

「まあね。闘争心がある感じはあまりしないわね。でも、意思はすごく強そうだわ。いいことだと思うけど。」

「有難う、慰めてくれて。」

ことも続いた。

「私も、りとちゃん、カッコいいと思うよ。」

「有難う。でも、だれも可愛いって言ってくれない。」

みさが、話に加わる。

「りとちゃんの絵は、すごく可愛いんですな。」

「絵はそうか。有難う、みさちゃん。絵、頑張るね。」

「絵だけじゃなく、りとちゃんも可愛いですな。当たり前だから言わなかっただけですな。」

「ありがとう、みさちゃん。慰めてくれて。気持ちだけでも嬉しい。」

まりがりとに話しかける。

「みさちゃん、さすがね。」

「うん、小さい子に心配されちゃった。そんなことは気にせず絵を頑張らなくっちゃ。みさが賛成する。」

「そうですな。頑張るですな。りとちゃんには、すごい才能があるですな。」

「うん、みさちゃんの言うことを信じる。ありがとう、みさちゃん。」

まりが、話をまとめる。

「りとは大丈夫よ。きつとすごい素敵な人が、りとを好きになると思う。」

ことことみさが続ける。

「そうだよー。」その通りですな。」

「有難う、みんな。今はみんながいれば、それでいい。今は、そう、仕事しようか。」

「そうね、仕事ね。」

まりが答える。お手伝いをやる気満々なみさが、まりに尋ねる。

「みさは、何をすればいいんですな。」

「まずは、いらっしやいませ。有難うございました、のご挨拶かな。あと、できればお店にどんな品物があるか、見ておいてくれる。」

「わかりましたですな。」

みさがやることを理解したところで、通常営業が1人多い状態で再開した。

少しして、女性の常連客が一人で店に入ってきた。まず、まりとことが挨拶をする。

「いらっしやいませ」

それに、続いてみさが挨拶をする。

「いらっしやいませですな。」

りとは、また絵を描き初めて、来店に気が付かないようだった。女性客がまりに尋ねる。

「あら、可愛い店員さんね。親戚の子？」

「はい、えーと、知り合いの子です。アメリカから来ています。」

次に、みさに名前を尋ねる。

「そう。それにしても可愛い子ね。お嬢さん、お名前は？」

みさは、普段通りに答える。

「丸野みさですな。よろしくお願ひしますですな。」

「こんにちは、しっかりしているのね。」

「有難うですな。」

「日本語、上手ね。どこで覚えたの？」

「cranchyrollのアニメで覚えたですな。」

それを聞いた、ことが嬉しそうに口を挟んできた。

「みさちゃん、アニメ見るの？じゃあ、今夜、アニメの話しよーよ。」

「いいですな。」

それを聞いた女性客が尋ねる。

「夜もいつしよなの？」

まりが答える。

「はい、もう一人の大人の方と5人で店で宿泊する予定です。」

「へー、楽しそうね。」

次に、りとのところに行って、描いている絵を見て、絵をほめる。

「5人の絵を描いているの？可愛いな。PARKの建物もいい。なんか、ほのぼのとした感じね。みさちゃんも、可愛く描けてる。」

いつものお客さんに気付いたりとは、仕事の絵ではなかったたので、言い訳しながら説明した。

「ごっ、ごめんなさい。仕事の絵じゃなくて。4人の絵を描くって、みさちゃんに約束ちゃったので。あっ、さゆみん、しっ、知り合いの大人の女性も加えて5人ですけど。」

「私、店長じゃないんだから、別にあやまらなくてもいいわよ。素敵なお絵ね。」

「有難うございます。」

「ちっちゃな女の子の可愛さが引き出せている。」

「有難うございます。」

「本当に温かい絵だと思う。」

「有難うございます。」

「強いて言えば、自分をもっと可愛く描いたら。」

「さつき、みんなにも言われたんですが。私、そんなに可愛くないですから。」

「そんなことはないわよ。絶対に。私、りとちゃんの大ファンだし。」

「絵のですか。それでも、すごい嬉しいです。有難うございます。」

「絵もそうだけど、自然なストリートファッションも、私の趣味なの。ストリート、私には似合わないかもしれないけど、りとちゃんには良く似合っているわ。道を切り開きそんな意思の強さがあった。」

「意思が強いですか。みんなに言われます。本当は、いつもクヨクヨしているんですけど。それでも嬉しいです。でも、やっぱり、ファッションならば、まりが一番詳しいです。勉強もしていますし、自分で服をデザインして縫製もできます。それに、スタイルも良くて、ファッションモデルもやっています。」

「そうなの。さすがね。」

「は。い。」



「じゃあ、まりちゃんに相談してみようかな。」

「はい。まりならば、きつとお似合いの服を見つけないかと思ひます。」

「有難う。5人の絵、頑張ってね。」

「はい、頑張ります。」

りとはまた絵を描き始めた。まりは、服を必死に探していた。

「お似合いの、服があるのですが、どこにあるのか見つからなくて。」

まりは、申し訳なきように、客に告げた。

「そうなの。どんな服。」

「空に雲が浮かんでいて、夏にはぴったりだと思います。」

「面白そうね。」

そのとき、みさがまりに場所を教える。

「その服ならば、海の柄の服の方で見たんすな。」

「あつ、そつちか。そうかも。ありました。ありました。これです。」

「ほんとだ。素敵な服ね。それにしても、まだ、幼いのにすごいわね。」

「本当ですな。有難う、みさちゃん。」

「どういたしましたすな。どの商品がどこにあるか、だいたい覚えてたすな。」

「ほんと？カップルがサーフィンをしているペンダントはどこにあるかわかる？」

「あの棚の上から2番目すな。」

まりが棚の方にペンダントを確認に向かい、その棚の前で止まった。

「上から2番目？そこまで覚えている？あつ、本当だ。すごい、みさちゃん。店長代理の座が危

ないかもしれない。とりあえず、私がないときは、りとおつことをお願いするわね。」

みさは、やる気満々で返事をする。

「分かつたすな。まかせてほしいすな。」

まりが、りとおつことに告げる。

「りと、ことこ、私がないときには、みさちゃんの指示に従ってね。」

りとは気が付かなかつたようである。ことこは、いくらなんでもという感じで返事をする。

「えー！ー！」

すぐに、みさがことこにお願いする。

「まりちゃんがないときには、いっしょに協力してがんばるすな。」

「わかつたー。まりちゃんがいんないときは、みさちゃんといっしょに、がんばろー。」

女性客も、そのやりとりを見て微笑んでいた。

「うーん、どつちが年上かわかんない。けれど、まりちゃん良かったね、頼もしい部下ができて。」

「まあ、預かっているのは明日までなんですけどね。でも、みさちゃん、大物になると本当に思ひます。」

「そうね。ところで、この服、合わせてみようかしら。」

「はい、いま試着室はだれも使っていませんので、どうぞ。」

「どうぞ、ですな。」

「有難う。店長代理の代理さん。」

女性客は試着室に入っていった。まりがみさに言った。

「明日までなんて、残念ね。ずうっと、居てほしかったわ。」

「みさも、ずうっと一緒にいたいんですな。まりちゃん、ことこちゃん、りとちゃんと。」

「そうね、来れるときには、いつでも遊びにおいで。」

「分かりましたですな。さつきも、りとちゃんと一緒にいれるようにすると答えたんですな。がんばるんですな。」

「なんか頼もしい返事。さすが、みさちゃん。よろしくね。」

「はいですな。」

と約束した。りととまりは、その本当の意味をまだ知らなかった。

試着室から、試着を終えた女性客が出てきた。

「それじゃ、これお願いしようかしら。」

「有難うございます。ここ、レジをお願いします。」

「わかったー。」

ここは会計処理を進めた。みさは、まりが服を畳むのを好奇心いっぱい見ていた。会計を済ますと、客はりとこのところに行き、絵を見て、再度感心しながらりと話しかける。

「絵がだんだんできていくのはいいものね。」

「有難うございます。絵はコンピュータにとっておきますので、今度ご来店の際に見てください。」

「有難う。りとちゃん。コンピュータに絵を描くといういろいろ便利よね。」

「はい、Webに載せたり、Tシャツにしたり、いろんなところで使うことができます。」

「そうね。でも絵を描くのは人間ね。絵が完成するのを楽しみにしているわ。」

「有難うございます。」

「じゃあ、また。」

女性客は店を出て行った。3人とみさは、お礼の挨拶をする。

「有難うございます。」「有難うございますですな。」

まりとみさは、女性客が見えなくなるまで、頭を下げていた。

みさは、服の畳み方をまりに教わっていた。どんとん覚えていくので、まりは感心するしかなかった。

「みさちゃん、すごいわね。」

みさは、店にある形が乱れた服を、綺麗に畳み直しはじめた。それを見て、まりがりところどころに話しかける。

「みさちゃんがいると助かるわ。二人じゃできないもんね。」

感心とあきらめの返事を返した。

「ほんと、すごい。」

「私にはできないよー。レジもすぐに覚えそう。」

お客さんが店に入ると、小さなみさが目立つたため、お客が話しかけては、みさのしっかりとした応対に驚いていた。まりとみさが接客、ことがレジ、りとがポップや案内の絵を描くという分業で、時間が過ぎて行き、店を閉める時間になった。

「さあ、お客さんも一段落したことだし、店を閉めるわよ。」

みさが、

「分かりましたすな。後片付けをするすな。」

ことが、

「わかった、レジと会計の整理をするー。後は、カレーパーティー、嬉しいな。」

りとは、

「了解。ドアの前に、閉店の札をかけるね。さっき描いた、4人でお礼をしているやつ。」と返事をして、3人にその札を見せた。3人がその感想を述べる。

「すごい、いい。閉店の感じも出ているわ。」

「みさちゃん、可愛いー。」

「1日の感謝の気持ちで詰まった可愛い絵なんすな。」

まりが感想の感想を述べる。

「みさちゃんの感想が、一番、しっかりしている。」

ことごとりと同意する。

「ほんとだよー。高校生の立場なくなっちゃうー。」

「ほんと。」

そして、4人は閉店作業を開始した。自分の後片付け作業を終えたりとが、早歩きしながらまりの方へ向かう。

「看板をしまつて、ドアの前に閉店の札をかけた。あと、まりの後片付けを手伝うね。さゆみんから、店を出発したつて連絡があったから、急がないと。」

「今日はその必要はないみたい。みさちゃんがやってくれちゃったわ。ことごと、そっちはどう？」

「もうすぐ、終わるー。いま、お金を数えて、チェックしているところ。」

「わかった。えーと、店の片付けも終わったわね。みさちゃん、有難う。」

「お安い御用ですな。」

ことが、会計の確認をまりにお願いする。

「まりちゃん、チェックをお願い。」

「はい。」

まりは、レジの記録と現金のチェックを始めた。チェックを済ませた後、現金を金庫にしまつて、今日の仕事の終了を宣言する。

「さあ、今日の仕事はおしまい。お疲れさまでした。」

「お疲れさまでした。」「お疲れさまでしたですな。」

みんなで今日の労をねぎらつた。まりがりとに、夜の準備であることを尋ねる。

「カレーパーティーの準備だけれど、何をすればいいだろう。」

「うーん、さゆみんが来てからの方がいいと思う。今は、テーブルと休息室のキッチンを片付けておこう。と言つても、テーブルの上のものは私のものだけだけれど。」

それを聞いて、まりが指示をする。

「じゃあ、テーブルはりと、あとの3人でキッチンを片付けるわよ。」

3人が同意した後、片付け作業を開始した。

片づけがほとんど終わったところ、お店の外から台車を押す音が聞こえた。それに気づいたりしたが、ドアを開けて言う。

「さゆみん、いらっしやい。重そうだけれど大丈夫。」

さゆみんが、少し驚きながら言う。

「大丈夫。ちょうどノックしようとしたときにドアが開いて、ちよつとびっくりしちゃつた。」

「ごめん、台車の音が聞こえたから。」

「そうね。あと三毛もつれてきちゃつた。すぐく一緒に行きたそうだったので、飼い主さんに電話で許可をもらつて。猫、大丈夫だった？」

「私は大丈夫だけれど、聞いてみる。まり、ことこ、みさちゃん、さゆみんが三毛、猫を連れてきたけれど大丈夫。」

まりとみさは平然と、ここは嬉しそうに答える。

「りとが毎朝連れて行っている猫ね。大丈夫よ。」

「りとちゃんが、大丈夫ならば大丈夫なんですか。」

「わー、ねこちゃん。可愛い。」

それを聞いて、さゆみんと三毛が店に入ってきた。三毛は、みさを見ていたが、ここが興味深そうに猫に近寄つて、撫で始めた。

「こんなに猫を撫でるの初めてー。わー、この猫、本当に猫背だ。」

みさも、近寄つて興味深そうに見ていた。まりが朝の話を思い出した。

「そう言えば、この猫は、私たちよりも時給が高い猫様だったわね。」

それを聞いたことが面白がって、猫と遊んでいた。

「ははー、おかゆいところはございせんか、三毛様。」

しかし、三毛は興味が無いのか、りとを確認したあと、店の隅の方へ行ってしまった。

「三毛は、おとなしいから、ひとりでも大丈夫だと思う。」

さゆみんがそう言った後、カレー作りの開始を促す。

「さあ、カレーを作りましょう。」

まりが具体的な指示を求める。

「とりあえず、私たちは何をしましょうか。」

「カレーと言っても、普通のものだから一人でもできるけど、手伝ってもらおうかな。でも包丁は私を使うわ。安全のために。じゃあ、まりちゃん。まりちゃんは、お米のとぎ方、知っている。」

「もちろん。」

「じゃあ、まりちゃんは、お米を研いでご飯を炊いてくれるかな。」

「了解。」

「少しだけ水を減らして、ちょっと硬めに炊いてね。」

「はい。」

「ここちゃんには、サラダを作ってもらおうかな。レタスとミニトマトがあるので、レタスはちぎって洗って、ミニトマトはへたを取って洗ってくれるかな。きゅうりは、私が切るから。」

「ラジャー。」

そこで、りとがさゆみに尋ねる。

「私は、何をすればいい？」

「りとちゃんはみさちゃんとコンビでお願い。誰か見ていた方がいいから。」

「了解。さすがさゆみん。」

「それで、とりあえず、みさちゃんと、玉ねぎの皮をむいてくれるかな。」

「了解。」

「ジャガイモとにんじんの皮むきは、私がやる。ピーラーでもけがをすることがあるから。うん、そして玉ねぎの皮を剥き終わったら、食器の準備をお願いね。」

「了解。みさちゃん、みさちゃん、いっしょに玉ねぎの皮むきをやろう。」

休憩室のキッチンには広くないので、4人は交代で使いながら料理を始めた。最初に、まりが米を研いだ後、さゆみんが、ジャガイモとニンジンを洗った。そして、それをわきに持って行って、ピーラーで皮を剥き始めた。

少しすると、グズグズ言っているみさの声が聞こえた。

「目が痛いんですな。涙が止まらないんですな。カレーを作るって大変なんですな。」

みさは、玉ねぎの白い皮まで1枚1枚剥いていた。それを見て、さゆみんが、りとの方を見る。

「りとちゃん、ちゃんとみさちゃんを見てないよ。」

しかし、りとも、涙を浮かべ泣くのを必死にこらえて、玉ねぎの白い皮を1枚1枚剥いていた。さゆみんが、わけがわからなくて、りとに尋ねる。

「りとちゃんは何をやっているのかな。白いところは食べるところよ。」

「知っているよ。白い皮を剥いた後、切って鍋に入れるんですよ。」

「りとちゃん、一枚一枚剥かなくても、固まりのまま切って、そのあとバラバラにした方が速いの。」

「えっ、そうなの。」

「そうなの。でも、ごめんなさい、ちゃんと言わなかった私が悪いわ。ごめんね。」  
そこに、まりが口をはさむ。

「さゆみんは、悪くないわ。みさちゃんはともかく、高校生なんだから知ってて当然。」

「まりは知ってた？」

「知ってた。」

「ここは知ってた？」

「ごめん。知ってた。」

「二人が言うんだから間違いないと思う。ごめん、さゆみん、常識なくて。」  
さゆみんが答える。

「うううん、今、覚えればいいと思う。」

まりが、話を収めようとする。

「そう、りとは、好きなことには夢中ですごいけれど、それ以外知らないことも多いから、こういうときに覚えるといいわね。」

「ありがとう、そうする。」

みさも、フオローする。

「ぐすん。りとちゃんは、絵がすごいから他のことは、多少はいいんですな。」

「ありがとう、みさちゃん。いっしょに覚えよう。」

「そうですな。」

りともみさの二人は、涙を流しながら手を取り合って約束した。さゆみんが、きちんと覚えてもらうために提案する。

「じゃあ、茶色い皮だけ剥いた玉ねぎをちょうだい。どんな風か見せてあげる。」

りとに茶色い皮だけ剥いたまねぎをもらい、それを8つに切って、ざるに取って、水洗いをした。

「まだ、くつついているのもあるけれど、炒めるときに、バラバラになるの。」

野菜を洗って切って、材料の準備ができた後、さゆみんが鍋に油をひいて肉を炒め始めた。次いで、玉ねぎと乱切りした人参を入れ、炒めた。二人が玉ねぎがバラバラになるのを確認する。

「バラバラになった。」

「バラバラになったですな。」

その後、さゆみんが、一口大に切ったジャガイモを入れた。そして、量を計った水を入れて、煮込み始めた。

「すごいね。」

「すごいねですな。」

「こうやって、カレーができるんだ。」

「こうやって、カレーができるんだですな。」

さゆみんが、あくを取りながら、15分ほど煮込んだ。火を止めた後、カレーのルーを溶かし、また弱火で煮込み始めた。カレーの香りが部屋に漂った。

「カレーだ。」

「カレーですな。」

さゆみんが注意する。

「ルーを入れた後で煮込むときは、かき混ぜていないと、すぐに焦げ付いちゃうので、忘れないこと。」

「かき混ぜるの忘れちゃいけないんだ。」

「かき混ぜるの忘れちゃいけないんですな。」

さゆみんが声をかける。

「二人とも混ぜてみる？」

「はい。」

「はいですな。」

さゆみんが混ぜ方の手本を見せたあと、二人がカレーを交代で混ぜ始めた。

「ぐるぐると。」

「ぐるぐるとですな。」

さゆみんは二人の様子を見ながら微笑んでいた。

「余った玉ねぎでお味噌汁を作るわね。だし味噌で、少し手抜きだけれど。」

さゆみんが、さやいんげんと豆腐で味噌汁を作り始めた。味噌汁ができたころ、全部の調理が終わっていた。はじめに作業が終わったまりが、キッチンの後片付けもしていたので、キッチンがだいたい綺麗な状態に戻っていた。さゆみんが4人に声をかける。

「さあ、テーブルを持って行って、食べましょう。」

りと、まり、ことこ、みさがと嬉しそうに返事をする。

「はい、料理をしたの初めて。美味しいかな。」

「カレー鍋は私が持っていくわ。」

「サラダとドレッシングを持っていくね。」

「楽しみなんですな。」

さゆみんが、食器が洗われてテーブルに置いてあるのに気が付いた。

「まりちゃん、持ってきた食器、洗ってくれたの？有難う。」

「どういたしまして、これぐらい。」

盛り付けの分担をさゆみんが決めた。

「じゃあ、ご飯は私がよそうから、りとちゃんとみさちゃんでカレーをかけて。まりちゃんはお味噌汁を、ことちゃんはサラダを取り分けて。」

「はい。」「はいですな。」

さゆみんがご飯をお皿によそいながら、炊かれたお米の硬さを確かめる。

「さすが、まりちゃん、ご飯の硬さ、ちょうどいい。」

「お褒め頂き有難うございます。家でたまに夕食を作ることがあるんです。」

りとが、さゆみんからご飯がよそってあるお皿を受け取る。

「うちは、料理はおばあちゃんがみんなやっちゃうから。その分、他にやることは言われるけど。護身術とか、おばあちゃんが作ったゲームのテストとか。」

りとが問題を感じるかのように言うと、ことが興味深そうに尋ねる。

「へー、どんなゲーム。」

りとが、ご飯にカレーをよそった皿をさゆみんに見せながら、話を続ける。

「格闘系とか、人型ロボットの操縦とか、宇宙艦隊の指揮とかかな。さゆみん、このぐらいでいい？」

「大丈夫。」

「じゃあ、次はみさちゃん、やってみて。見てるから。熱いから気を付けてね。念のため鍋は押さえているけど。」

「はいですな。」

みさがお皿にカレーをよそう。ことがゲームの話に戻す。

「じゃあー、りとちゃん、ゲーム強いんだ。」

「どうだろう。ほとんどがオリジナルゲームで、専用のインターフェイスだから。普通のゲームで強いかは保証できないよ。」

「そうなんだ。でも、今度いっしょにやろう。」

「わかった。でも、下手だったら、教えてね。」

「うん。でもりとちゃん、すごい強そうな気はする。」

みさがカレーをよそった皿をりとに見せた。

「大丈夫。次も、いってみよう。」

「はいですな。」

りとは残りの皿も、みさをお願いすることにした。りとがゲームの話に戻す。

「市販のものは、VRゲームを1度やったことがあるぐらいかな。それは簡単だったけれど。でも、ことごとくゲームするの楽しみ。」



「わかった、今度、ゲーム機持ってくるね。」  
「うん。」

5人で、カレー、サラダ、味噌汁をテーブルにセットした後、さゆみんが声をかける。

「さあ、座っていただきますをしましょう。」

「はい。」「はいですな。」

みんなが椅子に座った。さゆみんが見回して確認する。そして、声を合わせる。

「いただきます。」「いただきますですな。」

さゆみんがカレーが甘すぎないか確認する。

「みさちゃんが出たので、甘くしたけど。もう少し辛くしたかったら、ソースをかけるのが、小さな子供がいる家庭の日本の由緒正しいカレーの食べ方ってことよ。」

ことごとりと答える。

「パパはよくソースをかけてた。カレーが甘かったのかー。」

「おばあちゃんはあまりカレーを作らなかったかな。」

まりがりとの言葉に反応する。

「そうか、だから玉ねぎの剥き方をしらなかったのね。」

りとは照れ笑いするばかりだった。

さっきのゲームの話で、さゆみんが運動不足を心配してか、みんなに話しかける。

「ゲームもいいけれど、体も動かさないと。」

りどが尋ねる。

「わかるけど、何をやる？ジョギング？」

「フットサルなんてどう。」

(著者注…フットサルは、細かいルールを除いて5人でするサッカー。)

さゆみんの提案に、少し意外だったまりどが尋ねる。

「さゆみんさん、フットサルなんてするんですか。」

「さゆみんがいいって。一応キーパーだけけど。今のところ失点ゼロよ。クレープ・ザ・ハンド、ボールを包み込む感じで取るの。」

りどが感心しながら同意する。

「さゆみん、力があるそうだから。」

「力がない方ではないけれど、それほどでもないわよ。」

まりも来た時の荷物を思い出して、同意する。

「炊飯器、材料、食器まで。ほんと、気は優しくして、力持ちって感じ。」

「まりちゃん、ごめんね、やっぱり、それほめられた気がしない。」

「ごめんなさい。でも、そういう大人の女性は素敵だと思う。」

りどが、フットサルをしている理由を尋ねる。

「でも、なんでフットサルをはじめたの。カッコいいから？」

「うーん、彼氏に誘われてね。えへへへ。」

みんなが驚く。

「えー……。」

りどが確認のため、尋ねる。

「さゆみん、恋人さんがいらっしやったんですか。知りませんでした。」

「今の彼は、ちょっと前からだけど。」

まりも遠慮がちに尋ねる。

「何をされていらっしやるんですか。彼氏さん。」

「帝都工業大学で学生をしているわ。大学院生。」

大学名を聞いて、ことが関心を持つ。

「すごい。私も帝都工業大学に入りたいと思っているの。科学技術の最新の研究をするならば、帝工大か、帝都大だよな。」

感心することこに、まりが聞いた噂について話す。

「でも、オタクばかりという話だよな。」

さゆみんも少し困ったように同意する。

「まあ、そうかな。あははは。」

みさが、恋人について純粋に尋ねる。

「りとちゃん、まりちゃん、ことこちゃんには、恋人さんがいるんですな？」

3人が顔を見合わせて、まりが答える。

「そういうのはね。高校生にはまだ早いの。さゆみんみたいな大人になってからなの、日本ではアメリカと違って。」

「そうなんですな。日本の高校生には、恋人さんがいないんですな。わかったですな。りどが純真なみさに嘘を教えるといけないと思って、説明する。」

「本当は、高校生でも、いる人はいるし、いない人はいない。私たちがいないだけ。」

「そうなんですな。何でいないんですな。」

「やりたいことが、いっぱいあって、時間がないの。絵もいっぱい描きたいし、PARKの仕事もちゃんとやらなくてはいけない。」

まりも同意して、みさに言い訳する。

「そうよ、みさちゃん。私たちには、PARKがあるから、恋人を作っている時間がないの。ね、ことこ。」

「えっ、えっ、そうかな。」

「そうなんですな。PARKは面白いけど大変ということ、みさにもわかるですな。みなさんに、恋人ができるよう、みさがお店を手伝いたいですな。」

「ありがとう、みさちゃん。でも、みさちゃんも、自分がしたいことをした方がいいよ。」

「みさは、みんなと一緒がいいんですな。」

ところが、帝都工業大学の最近の話題について話し出す。

「そういえば、帝都工業大学って、卒業生が殺人VRゲームを作ったことで有名だったよねー。あーもちろん、さゆみんさんの彼氏はそういう人じゃないと思うけど。私も入りたい大学だし。」

ことは、さゆみんに気を使ってフォローしながら自分が興味のある話を切り出した。さゆみんが答える。

「ソード・バトル・オンラインのこと？」

詳しく知っていることが、その名前で話し出す。

「そうそう、SBO。」

さゆみんがその話題で、彼氏から聞いた話を説明する。

「あれは、情報とか制御の卒業生がやったみたい。学生のころから、ずうっと構想を練っていたんだって。本当に画期的なシステムで、彼もすごいと言っていた。私の彼も集中するタイプだけれど、ちよつと違うかな。専門も全然違って原子物理学だし。でも、大学名を出すと、最近はどこでもその話になるみたい。」

「ごめんなさい。さゆみんの彼氏だから、すごくいい人だと思うよ。間違いない。」

「有難う、ことこちゃん。いい人というより、普通の人かな。でも、自分のやりたいことに一生懸命で素敵な人よ。」

それを聞いて、まりが話をねだる。

「ごちそうさまです。カレーは美味しくてお腹いっぱいだけれど、そっちの話はまだ聞きたいかな。」

さゆみんは、みさを気にして、後にしようとする。

「また、今度ね。みさちゃんもいるし。」

当然、みさは話して欲しいので、不満げである。

「大丈夫ですな。話して欲しいですな。」

さゆみんは、みさを説得する。

「みさちゃんも、高校生になったら、話してあげるね。」

それを聞いた、りとが不安そうに尋ねる。

「さゆみん、ど、ど、どういう話。私が聞いても大丈夫？」

すると、さゆみんは大人の余裕を自慢しているかのように笑った。

「へへへへへへ」

まりが、その話をする時間について提案した。

「じゃあ、みさちゃんが寝たら、その話を聞こうかな。」

もちろん、みさはさらに不満そうにする。

「えーですな。」

まりが、みさを納得させようとする。

「頑張っただけで起きていたら、さゆみんの話聞けるんじゃない。寝たふりをしてるといいわよ。」

「分かったですな。そうするですな。」

さゆみんは、みさのために早く寝るように説得する。

「みさちゃんが大きくなったら、また絶対に話をするから、みさちゃんは早く寝ましょう。そのときは、りとちゃん、まりちゃん、ことちゃんからも話が聞けるよ。」

みさは、素直に返事をする。

「はいですな。りとちゃんたちの話を楽しみにするですな。」

「いい子。」

話がまとまったようであるが、まりが冗談ほく、言い出す。

「さゆみんさんって、すごくいい人と思っていただけけど、いま、私たちをいじめなかった。自分は彼氏持ちだと思って。」

さゆみんが弁解する。

「そんなことないよ。3人は私よりもずっとずっと魅力的だし、すごい素敵な彼氏ができると、本当に思う。」

りととまりが顔を見合わせて、りとがフォローする。

「たぶん、さゆみんは、本当にそう思っているんだと思う。」

まりも、あきらめ気味で同意する。

「そうよね。それが、さゆみんと私たちの違いか。」

まりは、ことこを見て言う。

「でも、ことこは、さゆみん側かもしれない。」

りとも同意する。

「よくわからないけど、今日の話？ことこ可愛いから、そうかもね。」

そして、二人で力なく笑った。ことこは仲間外れにしないで欲しそうで、二人に話かける。

「良くわかんないけど、ことこは、りとちゃんとまりちゃんとずうっと一緒だよ。」

りとも同意する。

「そうね。いっしょにしよう。」

ただ、まりは悲劇のヒロインのように、言うてことこをからかう。

「でも、幸せになれそうなときは、私たちを置いて先に行つていいわ。」

ことこは首を振りながら、真面目な顔で答える。

「先に行かない。いっしょに行く。」

それを見た、りと、まり、さゆみんは、ことこの真剣な顔がすこしおかしくて笑った。さゆみんがフォローする。

「先に行っても、また、みんなでパーティーをすれば、いっしょにいられるから。ところが、半分納得して尋ねる。」

「そういうもののかな？」

さゆみんが自信を持たせるかのように、優しく答える。

「そういうもん。次は、ハンバーグパーティーをしようか。みんなで、ひき肉コネコネね。」それを聞いたまりが、さゆみんの提案の感想を述べる。

「さゆみんさん、天才。だけど、また差を感じてしまったわ。」

「そんなことないって。大丈夫だって。今の3人は、好きなことに取り組むのがいいと思うわ。」

「それしかないですしね。そうします。ありがとうございます。さゆみんさん。」

「さゆみんでいいって。」

「ありがとう。さゆみん。」

「どういたしまして。」

そういうと、みんなで笑った。

この話が一段落したところで、まりが、一言断って、SBOに話を戻した。

「原子物理学が専門のさゆみん彼とは関係ないけれど、SBOって、VRギアに殺人装置が組み込まれていたんだっけ。」

ところが情報が追加する。

「そう、脳に対して仮想現実の情報を伝える電磁波が強すぎて、ゲームのサーバーからVRギアを付けている人の脳を破壊できるようになっていたの。誰も死ななかったから良かったけれど。」そのことについて、まりがネットで見た情報を話す。

「20分で120層のモンスターを全部倒しちゃった人がいるんでしょう。」

ところがどけて言う。

「ぜ、全滅。120機のモンスターが全滅、20分も経たずにか。みたいな感じ。」

さゆみんが、ことごとくを見て少し笑ったあと、ここに確認する。

「ことごちゃん、もしかして、ことごちゃんもオタクなの？」

「まあ、少し、そうかなー。でも、最近、アニメとゲームが大好きな女子高生は多いよー。それに、SBOに参加していた友達もいたんだ。でも、犯人が参加者に『ここでの死は、現実の死につながる。』なんてことを延々と説明しているうちに、全モンスターが倒されちゃったみたいで、何もなくて良かったよ。」

さゆみんがその話を聞いて安心する。

「よかったね、その友達に何もなくて。」

「間が抜けているみたいなお話だけど、でもそのおかげで、逮捕された犯人が素直に何でも自供したという話ー。何年も自分のすべてをかけて準備してきて、クリアに10年近くかかると思っていたゲームを、たった20分でクリアされたことがショックで。」

「すごいねー、その人。どんな人なんだろう。」  
まりがプレイヤーについて話し出す。

「でも、その人誰だか分かっていないんでしょう。犯人が手軽に参加できるように、無料で本名登録を不要にしていたという話だし。」  
さゆみんが、また感心する。

「へー。」  
りとが切り出す。

「あの、信じなくてもいいんだけど。」  
まりが聞き返す。

「なに、りと？」  
りとが少し恥ずかしそうに答える。

「それ私なの。」  
全員が驚く。

「えー。」  
りたとまりが話し出す。

「おばあちゃんが、SBOはVRとしては良くできているから、護身術の訓練のためにやれて、だから、やってみたの。」

「そうなんだ。」  
「私、そのとき、早く終えて絵を描きたかったから、話を聞く前に始めちゃって。」

「りとは、説明書を読まないで、使い始めるタイプね。」  
「そんなゲームとは知らなかったから、負けてもいいやと思って、どんどん進めちゃった。」

「移動だけでも、もっと時間がかかりそうだけど。」  
「いろいろリアルに作ったのか、ジャンプして天井を蹴破れたの。それでどんどん進んでいった。」

「モンスターの動きも弱点もなんとなくわかったし。」  
「ここがオタクらしく言う。」

「ニュータイプか、りとちゃんは。」  
「最終モンスター以外は、一刺しや一蹴りで終わった。」

「一蹴り。」  
まりが冗談っぽく言う。それに、ことが応える。

「SBOで、蹴ってモンスターを倒すんかい。そんじゃ、KBOだわ。」  
「キック・バトル・オンライン」

全員で楽しそうに笑う。  
「あはははは」

「第120層の最終モンスターだけ他のモンスターと比べて強かったけれど、何とか倒した。」

さゆみんが心配そうに言う。

「でも本当に危うく死ぬところだったんだね。良かった無事で。おばあちゃんも、死ぬようなゲームと知って、驚いたんじゃない。」

「ううん。それは違って、私が使う前にVRギヤを分解して、電磁波の最大出力が大きすぎて、ゲームソフトのバグで脳を損傷する可能性があるからって、VRギヤにパワーリミッターを組み込んでいたの。だから、私はいずれにしろ死ななかったの。」

まりが感心して言う。

「りとおばあちゃん、噂通りのスーパーおばあちゃんね。」

さゆみんも賛同する。

「そうね。」

夕食を一通り食べ終わって、皆で、ごちそうさまをする。

「ごちそうさまでした。」「ごちそうさまですな。」

まりがさゆみんにお礼を言う。

「さゆみん、料理するのが楽しかったし、カレーも味噌汁も美味しかった。」koko

「ほんと、有難う。まあ、単なる家庭の味だけれどもね。まりちゃんのご飯も完璧。」

「ありがとう。」

りとも同意する。

「さゆみん、ありがとう。美味しかった。あと、料理、勉強になりました。」

「ありがとう。気に入ってもらって嬉しい。料理は好きならばやればいいと思う。ハンバーグも玉ねぎ使うから、つぎはしっかりね。」

「了解。」

ことこも感謝する。

「さゆみーん。おいしかったよー。」

「ありがとう。ことこちゃんのサラダもなかなかよ。」

「洗ってちぎっただけだけど、ありがとう。ドレッシングに、隠し味を入れたけどわかった。」

「えっ、わからなかった。何を入れたの？大丈夫？」

「へへへへへー、これ。」

と言いながら見せたのは、バルサミコ酢だった。

「あー、バルサミコ酢。だから、サラダからイタリアを感じたのね。」

「ほんとー？」

「うーん、ホントは埼玉の神社の味かな。」

「さゆみん、さすがー。」

ことこは、嬉しそうに答えながら、りとに話しかける。

「りとちゃん、ちょっと、バルサミコ酢って言ってみて。」

「えっ、バルサミコ酢。」

「なんか面白いよね。バルサミコ酢って名前。」

「そう？バルサミコ酢？ところがそう思うならば、そうかも。日本の名前じゃないよね、バルサミコ酢。バルサミコ酢。うーん、面白いのかな。」

真剣に悩むりだった。みさもさゆみんにお礼を言う。

「カレー、初めて食べたですな。とっても、美味しかったですな。さすがですな。」

「有難う。みさちゃん。今度来たら、またみんなでいっしょに食べようね。」

「嬉しいですな。そうしたいですな。それまでに地球の料理を勉強しておくですな。」  
それを聞いたまりが、りとに話しかける。

「次は、りとがみさちゃんに教わることになるかもしれないわよ。」

「本当にそうかも。みさちゃん、頭がいいから。」

「大丈夫ですな。りとちゃんはすごい絵が描けるから、大丈夫ですな。」

「ありがとう、みさちゃん。」

ひと段落ついたところで、さゆみんがみんなに声をかける。

「さあ、お風呂に行きましょう。道具は大丈夫？石鹸とシャンプー、トリートメントならば大丈夫だけど。」

まりが答える。

「大丈夫です。持っているものや、お店の余り物でなんとか準備しました。」

「それじゃー、5分後に出発ね。」

という呼びかけに、4人が答える。

「了解。」「了解ですな。」

まりがPARKの扉の鍵をしめて、5人が銭湯に出発した。みさがりとに尋ねる。

「銭湯って何するところですか。」

「みんなで、お風呂に入るところだよ。」

「お風呂って、何ですか。」

「体を洗って、お湯につかって、一日の疲れをとるところかな。」  
まりが口をはさむ。

「りと、それ、オヤジの答えみたいだわ。みさちゃん、お風呂はね、女の子が、可愛く、綺麗になるところよ。」

「可愛くなるところですか？」

「そうよ。お肌をすべすべ、髪をつやつやにして。」

「楽しみなんですな。」



りともその意見に賛成する。

「そう、みさちゃん、まりの説明の方がいいと思う。私、オヤジ力高すぎか。」

そんなおしゃべりをしているうちに、銭湯に到着した。番台で料金を支払って、脱衣所へ。さゆみんが、みさちゃんに話かける。

「みさちゃん、髪を洗ってあげるね。」

「ありがとうですな。洗ったことがないので、どう洗っていいか分からなかったですな。」

「みんな、お風呂に入るのはじめてだね。二人の背中洗うよ。」

「ほんと、でも楽しみよね。」

「こんど、温泉とかもいつてみようよ。」

みさが話に加わる。

「みさも、りとちゃんの背中を洗うんですな。」

「わかった、お願いするね。」

脱衣場からお風呂の扉を開けて、風呂場に入っていった。みさが湯煙に驚く。

「真っ白なんですな。」

ところが、丁寧应答える。

「これは、湯煙と言って、お湯から出た水蒸気が少し冷えて、小さな水の粒になって、空中を漂っているものだよ。」

まりとみさが、ここに感心する。

「湯気は蒸気じゃなくて水なのね。ここは物知りね。」

「これは水なんですな。すごいんですな。でも、良く見えないんですな。」  
(著者注・よく見えないのは大人の事情で、円盤では湯煙が薄くなり、ある程度見えるようになることもある。)

さゆみんは、髪の洗い方を知らないみさが、急にお湯をかけられてパニックにならないよう、髪の洗い方を説明する。

「さいしょに、髪の毛にお湯をかけて、シャンプーをつけて髪を洗って、お湯でシャンプーを流した後、トリートメントをするの。」

「わかったですな。でも、大変なんですな。」

「シャンプーが目に入ると、痛いから気を付けてね。特に、シャンプーを流すときは、下を向いて目を閉じているように。」

「はい、ですな。」

説明が終わると、さゆみんがみさの髪を丁寧に洗い始めた。みさは、髪がシャボンにでいっぱいになりながら、興味深そうに言った。

「こうやって、髪の毛を洗うんですな。」

次に、お湯で石鹸を流して、みさは、少し驚いていたが、気の強さで取り乱すことはなかった。「うわわわ、でも、目をつむっていれば平気ですな。」

そして、トリートメントをして、お湯で流した後、石鹸を泡立てたスポンジを渡して、体を洗うように言った。

「体が泡だらけで面白いんですな。」

髪を洗ったさゆみんがさっきの話を思い出して、みさやみんなに言った。

「背中を洗いっこしよう。」

お客が少ないので、5人がさゆみん、りと、みさ、ことこ、まり、そして、さゆみんに戻る順番で輪になって背中を洗った。

(著者注…そんなことはないことは分かっていますが、絵的に面白いかなと思ひまして。)

みさは、熱心にりとの背中を洗っていた。まりがみんなに話しかける。

「人の背中を洗いながら、洗われているのは、なんか妙ね。」

りととことこは、楽しそうに答える。

「でも、なんだか面白い。」

「みさちゃんの背中、ちっちゃくて可愛いー。」

さゆみんが言う。

「私も、人に背中を洗ってもらったことがないから、なんか変な感じ。」

それを聞いたまりが疑問を持った。

「彼氏さんにも、洗ってもらったことがないんですか？」

「そういう話は後で。」

りとが驚いて聞いた。

「後で？」

「そう、後で。」

まりが興味深そうに言う。

「夜が楽しみになってきた。」

さゆみんが余裕で微笑んだ。

「ふふふふ。」

背中を洗い終わって、浴槽の上の方を見ていたみさがりとに尋ねた。

「りとちゃん、あの絵はなんですか。」

「富士山という山の絵。生きていると、いろんな問題が起きて悩んで悔やんで、心がどんどん小さくなっていくから、あの雄大な感じが、心を大きくして癒してくれる。小さいことを気にしてばかりいても仕方がないって。」

「そうですね。気持ちが大きくなるですな。りとちゃんにも悩みがあるですな？」

「えっ、もちろんないことはないよ。」

「どんな悩みですな。みさが何とかしたいんですな。」

「うーん、人には言いにくいなやみかな。」

「そうですな。でも話して欲しいですな。」

「解決不可能な悩みだから。大丈夫、何とかする。」

「わかったですな。」

次に、まりちゃんに尋ねる。

「人間はなんで服を着るんですな？」

「服を着た方が、自分を飾れて綺麗でしょう。もともとは、温度を調整するためかもしれないけれど。」

「そうですね。まりちゃんの服は、フリルとかとっても可愛いですな。」

「ありがとうございます。人を可愛くする服をいつも考えているの。みさちゃんが、もっと可愛くなるための服を考えているから。りとにデザイン画を描いてもらおうと思っているの。」

りとは、すぐに引き受ける。

「お安い御用。みさちゃん、もっと可愛くしたい。リトルプリンセスという感じがする。」

みさは、ちよつと違うと言う。

「本当のプリンセスには、毅然とした意思の強さが必要なんですな。みさには、りとちゃんは、もっと可愛くてすごいプリンセスという感じなんですな。」

「ほんと？ありがとうございます。みさちゃんに言われると嬉しい。」

まりがりとに感心して言う。

「りと、みさちゃんに気に入られたみたいね。」

「みさちゃんの期待を裏切らないために頑張らなくっちゃね。とりあえず、みさちゃんの服のデザインのスケッチ。」

「そうね。」

みんな体を洗い終わって、さゆみんが浴槽のお湯の温度を確認してから、みさに浴槽に入るように誘う。

「みさちゃん、お湯につかろう。」

「わかったですな。」

そうして、みんな湯船につかった。みさは悪気なく不思議に思ったことを、さゆみんに聞く。

「さゆみん、もしかすると、りとちゃん、ことこちゃんと、まりちゃん、さゆみんは、人間でも違う種族なんですな？」

「えっ、どういうこと？」

「体の形状が違うんですな。特に、お腹の上あたりですな。」

「そっ、それは。とりあえず、同じ種族よ。あとは、なんて言ったらいいか。まりちゃん説明してよ。お願い。」

「お願いですな。」

「分かったわ。人間でも背が高い人と低い人がいるでしょう。同じ人間でも人それぞれなの。」  
「なるほどですな。個性ですな？」

りとがみさを見つめて言う。

「そう、個性なの。」

「りとちゃん、何か怖いんですな。」

「そんなことはないよ。でも、女の子同士だから正直に言うけど、スタイルはさっき言った悩みの一つかな。」

さゆみんが聞く。

「なんで？男の子にもてたいから？」

「そういうわけではないんだけど。なんとなく。」

「大丈夫、りとちゃんはもてるって。宇宙一もてるようになるかも知れないわ。それに、ことこちゃんも。本当のことを言うと、ことこちゃんには彼を会わしたくないなと思っているの。」  
「ことが不満そうに言う。」

「さゆみんひどい、なんで。」

「ことこちゃん可愛いし、彼と趣味も合いそうだからかな。」  
「まりがフォローする。」

「それだけ真剣ということよ。ことこも、さゆみにライバル視されているんだから、光栄と思いなさいよ。」

「そうだねー。さゆみん、光栄です。」

さゆみんが、結論を出そうとする。

「まあ、そのあたりのスタイルの違いが恋愛での決定的戦力差にはならないということ。」  
「ことがちよっと笑う。まりも説明を追加する。」

「確かに、ファッションモデルも、ダンサーも、女優さんもそうだしね。目は引いても恋愛の決定的戦力にはならないということね。」

さゆみんが同意する。

「そうそう。やっぱり、普段から自分を磨いて輝かさなくちゃね。りとちゃんは、すごく輝きそうという感じがするの。そうよね、まりちゃん。」

「そうね、私も感じるわ。」

「だから、今を頑張ればいいと思う。」

りとも、みんなの思いに感謝する。

「ありがとう、みんな。私が一番中途半端だけれど、できることを頑張るね。」  
さゆみんが励ます。

「私の中では、りとちゃん最強なんだけれどな。私も頑張らなくっちゃ。でも、もうそろそろ、

お風呂、出ましようか。みさちゃんのぼせちゃう。」

「そうね。」

「まりも同意する。」

「いい湯だった。PARKに帰って、トランプをしようか。そして寝よう。」

「さゆみんが同意する。」

「トランプいいわね。さすが、まりちゃん。」

「ここが喜んで言う。」

「みんなで、トランプ楽しみー。いつも一人でゲームだから。じゃあ帰るかー。」

「帰るんですな。」

「りとも同意して、脱衣場に向かう。」

「じゃあ、PARKに戻ろう。」

「りどが風呂場を出た後、まりがみさに言う。」

「りどにスタイルの話をするのは、なしでお願い。」

「何でですか。」

「分からなかった？」

「なんとなく、分かったですか。」

「さすが、みさちゃん。」

「はいですか。りどちゃんに、スタイルの話をしないですな。」

5人は、PARKやクレープのお店のお客さんの話をしながら、お菓子屋でアイスクリームを買う寄り道をした後、PARKに帰っていった。

PARKに到着すると、まりがトランプを運びながら尋ねた。

「テレビをつけようか。」

「さゆみんが答える。」

「そうね、ニュースとかも見たいし。」

「今日、いいことあったかな？」

「まりは確認がとれたので、テレビを付けた。テレビではニュースをやっていた。」

「あれ、この時間、バラエティー番組の時間なのに。臨時ニュースみたい。」

テレビでは日本時間の夕方から、世界のあちこちで未確認生命体が来襲して、様々なものが消えていることを伝えていた。まりが笑いながら言う。

「何これ、新卒のバラエティー番組？」

「さゆみんとみさは黙ってテレビを見ていた。ここが考えながら言う。」

「でも、映っているのニュースの人だよねえ。」

「りとも同意する。」

「海外の映像もホントみたいだし。」

テレビニュースでは、未確認生命体が国連にメッセージを送ってきていること伝えていた。そのメッセージの内容は以下の通りである。

「我々は、この天の川銀河を支配するスクーパーズである。この10年来、アンドロメダ銀河を支配しているデストロイヤーズと交戦を繰り返している。現在は休戦中であるが、いつ戦闘が再開するかわからない。この戦に勝利するために、多様性の中から新たな進歩の可能性を探るべく、天の川銀河の生命体の文明・文化を採取している。抵抗しなければ、あなた方、地球の知的生命体に対して攻撃はしない。地球のみなさんと我々との戦力の差は圧倒的であり、抵抗しても地球のみなさんに犠牲が出るだけである。また、我々がデストロイヤーズとの戦に敗れば、地球のみなさんも無事ではいられない。地球のみなさんの未来のためにも、我々に抵抗しないことを望む。」

それを聞いた、まりがりとに話かける。

「ずいぶん、勝手な言い分ね。」

「努力して創造してきたのに、それを奪うなんて。」

ことは、楽観的だった。

「でも、宇宙人さん、スクーパーズさんと話してみたい。抵抗しなければ、攻撃されないんですよ。」

それを聞いたまりがあきれて言う。

「ここ、相手が言うことを何でも信じちゃだめよ。」

「まりちゃんの言うことも分かるけど。PARKに来てくれば、何でも教えてあげるのに。」

「そうね、宇宙人が教えてって言えば、私も喜んで教えてあげるわ。」

りとも同意する。

「私も。教えてっていうならば、いくらでも教える。けど、思い出やみんなの想いが詰まったものを、奪うっていうなら許さない。」

ニュースでは、各地の被害について伝えていた。

「各国とも防衛軍が中心にスクーパーズに対して攻撃をしかけていますが、地球の武器は通用していません。また、スクーパーズによる採取の影響や、多数の都市に飛行機やミサイルなどが墜落しており、多数の犠牲者が出ています。DNNによると、北米で1万人以上の死者が出てると報道しています。中国・南アジアの各国の報道を集計すると、アジアでは数百人規模の死者が出ているようです。BBDのニュースによりますと、アフリカ・ヨーロッパでは、スクーパーズがゆっくりとしたペースで採取を行っており、犠牲者は数名にとどまっていると報道しています。」

みさがつぶやいた。

「ギンシアは何をやっているんですな。ガーチューンは堅実ですな。モーガンはこの調子だと集

結時間に間に合わないですな。でも、モーガンらしいですな。」

りと、まり、ここはマナーモードにしていた携帯をチェックし始めた。

「おばあちゃんが、心配ならば、みんなを連れて家に来なさいって。」

「夕方から何回もメッセージと電話が入っているわ。早く帰ってきなさいって。」

「うちもだよー。早く帰ってきなさいって。」

りとが尋ねる。

「どうする。」

2人は考えこんでしまう。さゆみんが堅実な意見を言う。

「直接は攻撃しないようだから、今は動いた方が危ないかもしれない。」

みさも留まるように言う。

「直接は攻撃しないんですな。ここが一番安全なんですな。」

りとはみさが一人になるのが怖いのかと思って安心させようとする。

「みさちゃん、大丈夫。絶対にみさちゃんを見捨てたりしないから。なんなら家で預かる。家は原宿にあるのでみさちゃんでも歩いて行ける。」

「ありがとうございますな。でも、本当にみんなここにるのが一番安全ですな。」

さゆみんも言う。

「うん、ここが一番安全と思う。」

まりが尋ねる。

「さゆみん、何ですか。」

さゆみんは、答えに詰まって一言だけ言った。

「お姉さんの勘かな。」

さゆみんを信用しているりとが同意した。

「私も動く方が危険だと思う。今日はここにみんなで泊まろう。移動するなら、明るくなってからの方が安全だと思う。」

まりとことこも同意した。

「そうね。暗い中で動くのは危ないかもしれないわね。」

「私も、みんなと一緒にの方が安心。もし死んでも、みんなと一緒にの方があきらめがつくよー。」

「いやーね。縁起でもないこと言わないでよ。でも、その気持ち、ちょっとわかる。」

りとが真剣に言う。

「私の命に代えてでも、みんなは守るから。」

まりがりとに注意する。

「頼もしいけれど、りとは本当にそういうことしそうだから。絶対に無理はしないでね。」

「わかった、無理はしない。でも、絶対に誰も見捨てたりしない。」

「とりあえず、地球人を全滅させに来たんじゃなくて助かったわ。」

「うん、とりあえず、なるべくおとなしくしてようか。」  
さゆみんも同意する。

「それが一番いいと思う。」

ここは、スクーパーズの声明を思い出して興味深そうに言う。

「でも、この銀河系、アンドロメダ銀河と戦争をしているんだー。負けたら大変だよね。」  
みさが強い調子で言う。

「絶対に負けないんですな。」

「わー。」

その時突然、まりが叫んだ。さゆみんが少し大きな声で尋ねる。

「どうしたの。大丈夫？」

首を横に振りながら、まりが答える。

「大丈夫じゃない。アイスクリームが溶けそう。」

さゆみんが安心して言う。

「このニュースだから驚いちゃったじゃない。」

「さゆみん。ごめん。」

「アイスクリーム、食べようか。」

「それがいいわね。」

まりが、それぞれのアイスクリームを配った。少しドロドロになったアイスクリームをみんなが食べた。ちなみに、食べたアイスは、りとがオレンジシャーベット、まりがストロベリー、ことがチョコレート、みさがガリガリ君、さゆみんはクレープアイスである。

りとがさゆみんに尋ねる。

「アイスもクレープ？」

「気になっちゃって。でもクレープの皮がまだまだね。それとも、全体を冷やすから難しいのかな。こんど作ってみよう。」

「どんなときでも、クレープを忘れていない。すごい。」

「職業病かな。そういうりとちゃんも、シャーベットをスケッチしているじゃない。」

「シャーベットとアイスをどう描き分けるんだろうって考えて。」

「うふふ、同類ね。」

「はい。」

テレビでは、スクーパーズの被害について、各地の被害の状況を映像と共に伝えていた。5人はニュースを気にしながらも、PARKでの品ぞろえの話、売り上げを伸ばすための方法の他、絵やイラスト、ファッション、アニメ、新作クレープの話をした。ここは、さゆみんが彼氏の影響や今のクレープ店の系列の別の店で人手不足の時に手伝っていることもあって、意外にアニメに詳しくて、楽しそうに話していた。さゆみんの新作クレープをみんなが試食することにも



なった。また、みんなが「ですな。」を付けて話したりして、時間が過ぎて行った。時計を見たさゆみんが、早めに寝るように提案する。

「大丈夫だとは思うけど、宇宙人も来ていることだし、早めに寝ましょうか。」  
りとも同意する。

「そうだね。明日、何があるか分からないし。それがいいと思う。」  
まりとさゆみんが、まずは洗い物をしようとする。

「じゃあ、まず洗い物しちゃうわ。」

「私も手伝うわ。いつもやっているから。」

「さゆみん、ありがとう。それでは、あとの3人は部屋を片付けておいてくれる。」  
3人が返事をする。

「わかった。」

「了解ー。」

「部屋を片付けるんですな。」

洗い物を始めたまりが、さゆみんに尋ねる。

「あの3人、ちゃんと部屋をかたづけられるかな？」

「みさちゃんがいるから、大丈夫かな。」

「そうか。そうだわ。あはは。」

「うふふふ。」

さゆみんの予想通り、部屋ではみさの陣頭指揮で部屋がテキパキと片付けられていった。

「まず、テーブルを拭くんですな。拭き終わったら、あつちに運びますな。」「この荷物は、隣の部屋に運びますな。」「あつ、このさゆみんのバッグは大切そうだから、テーブルの上に置いておくんですな。よいしょつと、ですな。」「みんなで、床を綺麗にするんですな。」

部屋の片付けがおわったころ、まりとさゆみんも戻ってきた。さゆみんがみんまでお布団を運ぶように提案する。

「お布団、みんな運ぼうか。みさちゃんの分は、私が運ぶから、待っててね。」

「私も、運びますな。」

「うーん、じゃあ、枕を運んでもらおうかな。」

「わかったですな。みさは枕を運びますな。」

「ありがとう。」

布団を敷き終わって、みんなが床に就いた。真ん中がみさ、両側にまりとさゆみん。まりの横がことこ、さゆみんの横がりである。みさがまりに今日の感想を言う。

「まりちゃん、今日は、楽しかったですな。」

まりが答える。

「私も楽しかった。本当にいつでも遊びに来てね。」

さゆみんも同意する。

「私も。ほんとに楽しかった。こんなに楽しいのは久しぶり。まりが少しからかう。」

「ほんとですか？彼氏といるより？」

「それは、それ。これは、これ。なんなら惚気話してもいいけど・・・」

「聞きたいような。聞きたくないような。やっぱり聞きたい。」

「何時間かかるか分からないから、次も、お泊り会混ぜてね。」

「喜んで。ねー、りと。」

「もちろん、お泊り会は来てほしいけれど。話、大丈夫かな。さゆみんだから大丈夫か。」

「さあ、どうでしょう。私は大人。子供とは違うわよ。」

りとは、さゆみんは何でも真面目に物事をこなす素晴らしい人と思っていた。でも、こんなに嬉しそうなさゆみんを見たことはなかった。それで、りとは答えた。

「分かった、さゆみんの話ならどんな話でも聞く。」

「覚悟しておきなさいよ。」

「はい。」

それを見ていた、みさは羨ましそうに言った。

「みさも聞きたいですな。」

りとは答える。

「また、みさちゃんもいらっしやい。そしたら、みんなでお泊りしよう。」

「ずうっと、一緒がいいですな。」

「わかった。一緒にいられるようになったら、一緒にいよう。」

みさは、それぞれの方を向きながら、お願いをする。

「さゆみん、ことこちゃん、まりちゃんも、ずうっと一緒ですな。」

りとはさゆみんは優しく答える。

「うん、一緒だよ。」「はい。」

まりは少し強く、ことこは当たり前のこととして答える。

「離さないわよ。」

「もちろんだよー。」

みさは、もう一度確認するように尋ねる。

「宇宙に行っても一緒ですな。」

ことが少しうれしそうに驚いて言う。

「宇宙！でも、宇宙人が来るぐらいだから、そういうこともあるかもー。」  
まりが言う。

「さすがアメリカ人、スケールが違うわね。」

りとは短く、同意する。

「いいよ。一緒だよ。」

さゆみんは少し答えに戸惑っているようだった。それに気付いたまりがフォローする。

「さゆみんは、彼氏を置いて行けないから、仲良くするのは地球限定ね。」

りとは、大切な人がいることを素直に少し羨ましいように言う。

「さゆみんには宇宙は無理か。いいな。」

ことは、オタクらしく言う。

「私は、宇宙でも、並行世界でも、異世界でも、どこでも一緒。」

まりとりとがここに同意する。

「そうね。」「私もそう。どこでも一緒だよ。」

みさがまとめる。

「じゃあ、彼氏のいない人は、宇宙でもみさといっしょということですか。」

まりが、隣の布団にいたみさをぎゅっと抱きしめながら、ふざけるように言う。

「けんかうっているのかー。」

「違うんですな。違うんですな。」

りとが、みさをフォローする。

「まり、みさちゃんは正直に言っただけだよ。」

「そうですな。そうですな。」

まりが、答える。

「わかっているわ。でも、正直だからこそ傷つくときもあるわ。」

「ごめんなさいですな。ごめんなさいですな。」

「わかった、許すわ。」

ことも、みさに安心するように言う。

「大丈夫、みさちゃん。まりちゃんの冗談だから。」

りとが、いっしょでいることを確認する。

「そう、まりの冗談。3人は宇宙でも、みさちゃんと一緒だよ。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

みさの表情が明るくなった。さゆみんは3人の安全が気になって、みさの隣に行って、小声で確認する。

「みさちゃん、もし宇宙に行っても、3人を絶対に大切にしてくね。」

「みさの家の名誉にかけて全力で守るですな。天の川銀河の中ならば絶対に大丈夫ですな。」

「そう。そうよね。」

安心したさゆみんが言う。

「じゃあ、地球では私とも仲良くしてね。」

「わかったですな。よろしくお願ひしますですな。」

「はい。わかりました。」

さつき、まりがみさを抱きしめるところを見たりとが、みさを抱きしめる。

「約束の印に私も、ぎゅー。」

みさも答える。

「暖かいですな。」

りとが抱きしめながら再度約束を確かめた。

「ずうっと一緒だよ。」

「はいですな。」

みさも嬉しそうにしていた。ここが言う。

「あ、りとちゃんずるい。」

そして、ここもみさを抱きしめながら言う。

「この銀河系を出て、大マゼラン銀河に行っても一緒だよ。」

「大マゼラン星雲ですな。行ったことはないですな。でも一緒ですな。」

これを聞いたまりが、みさに冗談を言う。

「アメリカ人と言っても大マゼラン星雲に行つたことがないとは、まだまだね。私なんかアンドロメダ銀河だつて行つちやうから。」

さゆみんが少し驚いていた。みさが正直に答える。

「アンドロメダ銀河は、親から行つちやいけないと言われてるんですな。」  
それを聞いたことが提案する。

「じゃあ、天の川銀河では、4人一緒ということにしよう。」

りととみさが同意する。

「そうね。それがいいかもね。」

「それが安全と思うですな。」

みさが、続けて、さゆみんにも抱っこをねだる。

「さゆみんさんにも、ぎゅっとして欲しいですな。」

「いいわよ。」

さゆみんもみさを抱きしめたあと、慣れない土地にいるみさを気遣う。

「地球で困つたことがあつたら言つてね。一応、大人だし、地球のことは詳しいから。」

「有難うですな。」

みさが余計なことを付け加える。

「でもやつぱり、さゆみんさんが、一番柔らかくて、気持ちがいいですな。その次は……」  
まりが言葉を遮る。

「みさちゃん、その先は言わない方がいいわよ。」

みさは、はっとしてりとの方を見る。

「あ、り、りとちゃん、目が怖いすな。」

「そんなことは、ないわよ。」

「でも、手が震えているすな。」

「少し、寒いのかも。」

「お布団であったかいすな。りとちゃん、ごめんなさいすな。」

まりが、りとがさっき言った言葉をりとそのままを言って、みさをフォローする。

「りと、みさちゃんは正直に言っただけだよ。」

りととみさを除く、3人が笑った。りともみさに冗談を言う。

「そうね。分かったわ。みさちゃん、仲よくしよう。」

「はい、すな。」

「ただし、次にその話をしたら・・・」

「しないですな。しないですな。」

さゆみんがとりなす。

「りとちゃん、みさちゃんをいじめちゃだめよ。」

「ごめんなさい。反応が可愛くて。みさちゃん、大丈夫。全然怒ってないから。これからも、仲よくしよう。」

(著者注…このとき、りとが本当に怒っていたか怒っていないかは、男性である筆者には永遠にわからないです。ごめんなさい。) みさも答える。

「はいすな。」

時計を見たまりが、本当に寝ることを促す。

「寝るのは惜しい気もするけど、状況が状況だけに電気を消すわよ。」

りとが応じる。

「そうね。」

全員で、お休みの挨拶をした。

「おやすみなさい。」「おやすみなさいすな。」

りとが電気を消して、部屋が暗くなった。三毛がごろっとしながら、5人を見ていた。みさを除く4人は、みさが寝てから話をするのを忘れて寝付いてしまった。一人起きているみさが窓の外を見ると、隣の建物の屋根にエビの天ぶらの置物のようなものがこちらを見ているようだった。りとが見たときよりは動きは少なかったが、あたかも生きているようだった。みさは、そのエビの天ぶらの置物に、目くばせをした。エビの天ぶらの置物の顔がどんどん曇っていった。

「この星で、あの作戦を実行するのでございますか。」  
そう悲しく思っているようだった。

## 第2章 スクーパーズ来襲

話は少しさかのぼる。スクーパーズの宇宙強襲揚陸艦3隻、全体の指揮をとるスクーパーズの王女(王様の長女)を乗せた宇宙戦艦1隻、宇宙駆逐艦数隻からなる地球スクープ部隊が、月の裏の宇宙空間に集結していた。3隻の宇宙強襲揚陸艦には、スクーパーズの降下部隊である宇宙遠征軍所属の第3、第8、第11連隊がそれぞれ乗艦していた。その中の1つ、第8連隊を乗せた宇宙強襲揚陸艦では、地球降下のための準備の最終段階を迎えていた。艦全体にテレパシーによるアナウンスが流れた。

「地球降下部隊第8連隊の兵員は、艦中央の第1ブリーフィングルームに集合して下さい。繰り返します。第8連隊の兵員は、第1ブリーフィングルームに集合して下さい。」  
アナウンスが続く。

「揚陸艦乗員の整備班は、第1〜第16番降下用エアロックの最終チェックを行って下さい。」  
連隊組織は、およそスクーパーズ14体からなる分隊、分隊が3つ集まった45体の小隊、小隊が5つ集まった約240体の中隊、中隊が4つ集まった約千体で構成されている。また、連隊には連隊付き作戦参謀、技術参謀が連隊運営を補助している。第8連隊の中の第111(いちいちいち)分隊は、連隊の中で最強の分隊として、作戦ではいつも重要な役割を果たしていた。その分隊長であるガジメはたつき上げの歴戦の勇者である。アナウンスを聞いて、ガジメが船室の分隊の隊員に移動するように促す。

「さあ、行こう。また、いろんな未知のものを見ることができそうぞ。」  
分隊で2番目の階級で狙撃手のゾロモ軍曹が賛同する。

「はい、行きましょう。私、新しいものから刺激を受けるのが大好きです。」  
ガジメが部下を勇気づけるためにゾロモの発言をほめる。

「さすがだな、ゾロモ。今回は、デストロイヤーズとの戦争ではない。地球と言う星から文化を採取することが目的である。予備調査の結果、科学技術はかなり劣っているので、今回の作戦ではあまり心配をする必要はない。」

そうやって、ガジメは不安そうにしているザトム一等兵と新兵のイワタ二等兵を勇気づけた。ザトムが昔の経験を話す。

「少しだけ、いやな予感がするんだ。2年前の採取作戦もそうだった。大した科学技術力を持っていないので、安心して採取していたんだけど、みで王子様が捕らわれたという報告があって、救出作戦の間に2つの連隊の4分の3ぐらいの兵員が戦死してしまったんだ。」  
ガジメが聞いていることで説明した。

「ああ、話には聞いている。国民には全く秘密になっていて、俺の階級では詳細がわからない事案だ。特に第6連隊は千体のうち、生き残ったのは12名だったとか。酷い作戦だったな。ザトムはその生き残りなんだったな。」

ザトムが当時の状況を説明する。

「何が何だかわからないうちに、友達がみんな死んでしまった。作戦が終わったら、いっしょにライブに行く予定だったのに。」

バンクス一等兵が最後までどうなったのか聞いた。

「その敵は倒したのか。」

ザトムが答える。

「わからない、連隊がほぼ全滅しかけたとき、相手が逃げる理由もないのに攻撃が止んで、急になくなってしまった。」

ゼクルル上等兵が王子様について聞く。

「王子様は助かったんだよな。今でも健在でいらっしやるし。」

「王子や侍従は敵から解放されたのか、無事に出てきました。しかし、そこにはもう敵はいなかったでした。何もわからないまま、作戦が終了してしまいました。」

ガジメがこの件は外部に話さないように注意した。

「この件は秘密になっている。遺族にはデストロイヤーとの戦闘で死亡したと伝えられている。だから、絶対に他言はするな。」

「はい。」

全員が返事をした。そして、カジメは気を引き締めなくてはいけないことを確認する。

「ザトムの言う通りだな。戦場では何が起るかわからない。油断は禁物だ。」

ジャモチャ一等兵とリコ二等兵は、この作戦が終わったら結婚する予定になっていた。2体はとても小さなペアのアクセサリを付けていた。リコがジャモチャに少し心配しながら話しかける。

「そうね気を付けようね。」

「君は絶対僕が守る。」

「でも、一人にはなりたくない。死ぬときは一緒。」

「わかったよ。」

それでも、ジャモチャはリコを守るつもりでいた。

第8連隊最強で、みさ王女様を深く敬愛しているゼクルル一等兵がみんなを励ます。

「いやだなー、みんな。暗い話ばかりで。大丈夫だよ。今回の作戦指揮はみさ王女様がとられるんだよ。あの宇宙一素晴らしい王女様が。」

パド上等兵が少しからかう。

「お前、みさ王女が大好きだもんな。」

「そういうんじゃないよ。王女様は国民を思って、毅然としていて、まだ幼いながらも立派で、本当に尊敬しているんだ。ジャモチャじゃないけれど、王女様のためならば、この命を捧げられる。」

「へー。」

「僕をバカにするのは構わないが、王女様をバカにすると許さないからな。」

「はいはい、わかりました。」

次に、パドは心配そうにしている新兵のイワタに、からかうように尋ねた。

「おい、新兵、お前は大丈夫か。」

「はい、立派になって、父上に活躍した話を持ち帰りたいです。」

「ファザコンか、お前。少しはダイエツトしないと、降下ゲートから出られないんじゃないか。あれは、そんなに広くないぞ。」

「訓練で、何度もやっていますから大丈夫です。」

イワタは、困ったように答えた。ガジメがパドを諭す。

「パド、イワタをからかうのはそれぐらいにしろ。イワタは兵員訓練所を次席で卒業したんだ。それに、優秀でなければこの分隊にいきなり入ることはできない。」

「はい、わかりました。」

そして、ガジメは移動を促す。

「よし、ブリーフィングルームへ向かうぞ。」

「はい。」

隊員全員がそう答え、移動を開始した。どんな場合でも、未知の地に降りるのは高揚するものである。

第1ブリーフィングルームには、第8連隊の約千体のスクーパーズが集まってきた。全員が集まるのを待っていた第8連隊ガチューン連隊長は、整列の指示を出した。ガチューン連隊長は、慎重で確実な作戦を取り、無用な犠牲を出さないことで有名だった。部下からの信頼も厚く、国民からはスクーパーズ最強連隊の第7連隊に次ぐ信頼を得ていた。

第8連隊ガチューン連隊長がブリーフィングを開始するために、点呼を指示した。

「それでは、今回の作戦の説明を始める。各部隊ごとに点呼を取れ。」

各小隊ごとに点呼が取られ、その結果が中隊に集計され、連隊長に伝達された。

点呼が終わるころに、エビふりヤー侍従長が部屋に入ってきた。エビふりヤー侍従長は、いわゆるエビの天ぶらのような外見をしている。普通のスクーパーズにはできないことであるが、優れたスクーパーズは、擬態、つまり、精神情報によって自らの体を変えることが可能なのである。

ガチューン連隊長が、侍従長の準備を確認した後、連隊全体に向けて話し始めた。

「作戦のブリーフィングを始める前に、エビふりヤー侍従長様からのお言葉を頂きます。侍従長様、よろしく願います。」

第8連隊千体の前で、エビふりヤーが訓示を始めた。

「侍従長のエビふりヤーです。みなさんもご存知のように、ここ十年と少し、スクーパーズはアンドロメダ銀河を支配するデストロイヤーズと戦争状態にあります。現在は休戦中ですが、戦闘



が再開し、彼らに負けることがあれば、この天の川銀河の惑星は破壊しつくされ、そこに住む生命は絶滅を余儀なくされるでしょう。我々は、この戦いに絶対に負けるわけにはいかないのです。残念ながら我々スクーパーズは、数百年前に、新しいものを作り出したり、新しい発想を生み出すことができなくなってしまうました。だからこそ、デストロイヤーズとの戦争に勝つために、様々な進歩の可能性、文明や文化を多数の惑星から採取することが必要なのです。皆さんの活躍によってのみ、スクーパーズのみならず、この銀河系の生物の生存が可能になるのです。その意味では、この星からの収集はこの星の生物のためにもなるのですが、今までの経験からそれを理解してもらうことは非常に難しいことが現実です。そのため、強制的に採取することになります。衝突も避けられないでしょう。ただ、この星の生命になるべく危害を与えないということが、姫様の強い希望であります。」

「さすがは、我が王女様。」

強くそして優しいみさ王女が好きなのゼクールは、それを聞いて喜んだ。エビふりヤーが続ける。「それは、スクーパーズの誇りでもありますし、この星の生物が新たな発展を生み出す可能性を消さないためでもあります。もちろん、自分の命を守るために攻撃することはやむを得ないですが、不必要な攻撃は避けて頂きたいと思います。危険を伴う任務ではありますが、慎重に、そして、強い意志で作戦を完遂することを期待します。」

みんながビーム発射口を回して、えびふりヤーの演説を支持した。

「私も姫様と一緒に地球に降ります。予備調査の結果、日本という国の原宿に最新でユニークな文化が集まっていることがわかり、調査のため原宿に降りることを姫様が決めました。作戦終了時の集結地点は原宿です。この星の文明・文化の採取後、原宿に集まって来て下さい。皆様共々、皆さんと原宿でお会いできることを楽しみにしています。」

ブリーフィングルーム全体に。歓声が沸き起こった。

「王女様に会える。」

ゼクールはみさ王女に会えることに、心が踊った。

ガーチューンが閲兵の開始を指示する。

「これから、侍従長様が閲兵される。整列。」

兵が整列をした。第111分隊は最前列にいらんでいた。連隊長と共に侍従長が閲兵をしていると、ガチューン連隊長がジャモチャとリコの前で、強い調子で尋ねた。

「それは何だ。」

ガーチューンは、ジャモチャが星の、リコが三日月のとても小さいアクセサリを付けているのに気が付いた。2つはペアになっていて、切れ目を合わせるができるようになっていた。その可愛さから、とてもスクーパーズ星のものとは思えなかった。ジャモチャは少し慌てて弁解する。

「オリオン星団の作戦のときに、道に落ちていたものを拾ったものです。ペアになっていたため、

この作戦後に結婚するリコと一緒に付けることにしました。」  
ガーチューンはガジメに詰問した。

「カジメ、貴様は気が付かなかったのか。」

ガジメがアクセサリーを見て、とても恐縮しながら答える。

「大変申し訳ありません。たった今、気が付きました。」

ガーチューンが確認する。

「他の星のものは、少なくとも1度は王族、オリオン星団作戦の場合はみで王子様に提出しなくてはいけない。それを勝手に所持すると重罪になるということは知っているだろう。」

ジャモチャ、リコ、カジメが同時に謝罪する。

「大変申し訳ありません。」

ジャモチャが事情を説明する。

「捨てられたものと思い、つい拾ってしまいました。リコには私から渡しました。ですので、すべての責任は私にあります。私はどんな罰も受けるつもりです。」

ガジメが、ガーチューンに寛大な処置を求めた。

「両名の所持に気が付かなかったことは、私の失態でもあります。ただ、彼らの活躍は目覚ましいものがあります。今回のことは、私からきつく言っておきますので、王子様への提出が遅れたということにして頂けないでしょうか。」

だが、ガーチューンは首を縦に振らない。それを見た、エビふりヤーが場を収めようとする。

「ガーチューン、まあ良いではないですか。王子様も収集したたくさんさんの文明を持て余し気味です。お二人は、この作戦が終わったら結婚するという話ではないですか。おめでたいことです。これはどう見ても体についてしまった単なるゴミです。兵士たるもの、もっと体を清潔にしなければなりませんよ。これからは、お気を付けなさい。」

「えびふりヤー様が、そう言われるならば、今回は不問に帰しますが。」

エビふりヤーが連隊運営についてガーチューンを諭す。

「厳しいだけが連隊運営ではないんですよ、ガチューン。この連隊最強の第111分隊分隊長がああ言っているんです。完璧なスクーパーズなんていません。どのくらい悪意があるのか、改善が可能が見極めて、伸びる芽をつぶさないことも重要です。」

「第7連隊をスクーパーズ陸軍の中で圧倒的な最強連隊に育て上げた、エビふりヤー様のお言葉、感服しました。」

「次は、あなたが第8連隊を最強連隊にする、それが連隊長であるあなたの務めです。」  
ガーチューン連隊長が尊敬の眼差しで答える。

「分かりました。」

ジャモチャ、リコがエビふりヤーに心から感謝する。

「本当に、ありがとうございます。」

カジメも感謝と決意を伝える。

「侍従長様、大変有難うございます。命をかけて、この任務を成功させ、これからも王族とスクーパーズのために尽くそうと思います。」

「その決意はみごとです。活躍を期待しています。でも、あなたも分隊とは言え、長が付く身分です。無理をして部下の命を無駄にはしないようにして下さいね。」

「はい、肝に命じて。」

「それでは、第111分隊のみなさん、活躍を期待しています。」

そう言うと、エビふりヤーは閲兵を続けた。その後姿を見ながら、第111分隊全員で返事をした。

「はい。全力で任務を遂行します。」

ゼクルルは感銘を受けながら思った。

「あれが、王女様を守るエビふりヤー様か。本当に偉大な方だ。スクーパーズの大きさが違う。私もエビふりヤー様に仕えることができる兵士にならなくては。」

閲兵を終え、エビふりヤーは去っていった。だが、エビふりヤーの表情は明るくなかった。なんかいやな予感がしていた。ぽつとひとり言をいった。

「みんな、若くていいスクーパーズばかりです。姫様が、あの作戦を実行することを決断しなければ良いのですが。」

連隊のブリーフィングで、作戦全体の概要が説明された。ギンシア率いる第3連隊が南北アメリカ大陸、第8連隊がアジア・オセニア、モーガン率いる第11連隊がヨーロッパ・ロシア・アフリカを担当すること。また、人間に関する説明もあった。

「地球の知的生命体である人間の外見は、デストロイヤーズとかなり近い。これは多くの惑星でよくあることではあるが、この星の生命体とデストロイヤーズとの類似度は極めて高い。また、成人女性の体格はほぼ同じであるが、成人男性の体格はデストロイヤーズより少し大きい。デストロイヤーズ成人男性の体格は、この星の14〜16歳の男性の体格に相当する。ただし、体力、科学技術力ははるかに劣り、デストロイビームも出すことができないため、あまり心配することはない。核兵器を所有しており、生身で受けるとスクーパーズと言えども自身のサイコバリアーだけでは防ぎきれないが、運搬段階で対処可能であるし、われわれは地球の生命体が多いところしか行かないため、相手も使用するとは考えられない。」

連隊全体ブリーフィングの後、各分隊の部屋に戻り、分隊単位のブリーフィングが行われた。分隊のブリーフィングで、カジメが閲兵を思い出していた。

「侍従長、本当に本場に立派な方だった。」

みんながうなずいた。カジメがエビふりヤーに関して隊員に説明する。

「侍従長は、性格が丸く、おとなしく感じるけれど、あれでスクーパーズ最強の兵士だったんだよ。デストロイヤーズ戦で大活躍で、擬態した体が黄色く細長くて彗星に似ていることから、黄

色い彗星と呼ばれていたんだよ。」

ゾロモが説明を加える。

「デストロイヤーズとの戦いでは、1人で1連隊を超える戦力だったとか。あの黄色い外皮は、デストロイヤーズのデストロイビームに耐えるし、赤い尻尾は、デストロイヤーズの最も強固なシールドを切り裂くことができるということよ。」

ガジメが捕捉する。

「そして、第7連隊連隊長になり、第7連隊を最強連隊に育て上げた。現在は、蟹爪ふりや連隊長が指揮を執っているが、第7連隊の各隊員の俊敏性、スクープビームやサイコバリヤーの強度や忍耐力は、他の連隊の隊員と比較にならないと言われている。」

「すごい。」

ゼクールから感嘆の言葉が漏れた。カジメも言う。

「私も、第7連隊に所属して、その最強分隊、第111分隊の分隊長になることが夢なんだ。」  
パドがいつもの調子で言う。

「何で分隊長のままなんですか。もっと、上の位には行かないんですか。」

「ああ、分隊長の方が、私にはあっているさ。さて、そろそろ作戦のブリーフィングを始めよう。」  
ガジメを尊敬しているカジメのお付きのギデは、残念そうだった。

「本当は出世してもらった方が、スクーパーズのためなんだけど。でも、欲がないのも隊長の良いところかな。」

ガジメが作戦の説明を開始する。第111分隊の降下地点は中国の西安。降下時刻は日本時間で、17時15分ごろ。翌朝、福岡に向かい採取した後、渋谷で連隊が集合する。そして、連隊ごとに原宿へ行進し、みさ王女様の閲兵を受けて、王女が指示する原宿の文明・文化の採取を行い、今回の作戦は終了する。分隊が文明・文化を採取するときの役割分担は通常の通りである。パド上等兵、ザトム一等兵、ゴモ一等兵、ジャモチャ一等兵が、文明・文化をスクープビームで採りし小型化する。バンクス一等兵、リコ二等兵、ガビー二等兵、イワタ二等兵が小型化したものの運搬担当である。ワクチュン一等兵が無線担当で本体と連絡をとる。採取班の指揮はパド上等兵が、運搬班の指揮はバンクス一等兵が担当する。そして、細く強力なスクープビームが出せるゾロモ軍曹は狙撃手で、遠距離支援攻撃を担当する。デツホ二等兵がゾロモ軍曹の補助をする。ゼクール上等兵は作戦遂行に問題があるときに先行して隊を先導し、撤退するときには最後尾につけ隊を守るといふ、最も危険な任務を担っている。ギデ二等兵が分隊長の補佐で、分隊の全体指揮をガジメ曹長が担当する。

一通り説明が終わり、今回採取する対象物や採取する順番と経路のデータをパドに渡した後、ガジメが質問を受け付けた。

「何か質問はあるか。」

ゼクールが質問をする。

「明日の原宿への行進は何時ごろになりますか。」

「昼頃になると思うが、他の部隊の作戦遂行状況によると思う。」

「わかりました。」

「ほかに質問はないか。」

「ありません。」

「それでは出発時間の30分前、16時45分に各自の装備を装着して集合。それまでは待機だ。休んでいていいぞ。」

ガジメの指示に従い、全員が休憩をとった。

16時45分、揚陸艦は既に地球大気圏への突入を済まし、大気圏内を飛行していた。すでに予定した場所で降下していった分隊もあった。第111分隊の全員がそろった。ガジメが各自の装備のチェックを指示する。そして、隣の隊員と相互にチェックするように指示する。運搬担当隊員が身に着けている大きな荷物は、運搬用の採取物格納装置だ。ワクチンは少し大型の重力波通信装置を持っている。重力波は遮蔽されることがないため、例えば密閉された地下でも、連隊と通信することができる。スクーパーズは、自身が出すことができるスクープビームが強力な武器になり、サイコバリヤーを張ることができるので、特に武器は所持しない。また、テレパシーが使えるため、通信装置も持っていない。通常の隊員が所持するのは、携行食料飲料と装着型観測機器である。

カジメが降下15分前になって、降下エアロロックへの移動を指示する。スクーパーズは、真空中や様々な大気圏内で行動可能であるが、船内への不要な大気の流れを防ぐために、エアロロックが設置されている。

「2つのエアロロックを使う。分隊を2つに分ける。私とワクチン、ギデと採取班は第1エアロックを、ゾロモ、ゼクル、デツホと運搬班は第2エアロックを使う。ゾロモ、第2エアロックでの指揮を頼む。」

「わかりました。」

やはり知らない土地である。ゾロモが少し緊張して答える。第1、第2エアロックの内側扉が開き、それぞれのグループがエアロック内に入って行った。そして、内側扉が閉鎖された。パドがエアロックの外側扉の大きさを見てつぶやく。

「これなら、イワタでも通れるか。」

揚陸艦兵員から、降下10分前の指示が出された。ガジメから最終的な指示が飛ぶ。

「降下地点を地図で確認しておけ。それから、採取する順番もだ。」

「いいか、揚陸艦の速度は、我々の大気中の移動速度より速い。扉から出た後、揚陸艦や他の隊員にぶつからないように、通常の移動速度に落ちるまで、まっすぐ飛はなくてははいけない。」

「西安では、我々の分隊を含めて第11小隊の4つの分隊が採取を担当する。もめ事を起こすな

よ。」

第1エアロックの全員が、短く返事をする。

「はい。」

第2エアロックでは、ゾロモが同様の指示をしていた。降下3分前の指示が出され、外側扉が開いた。全ての隊員が外を見つめていた。目の前には森が広がっていた。降下1分前、扉から市街地が見え始めた。降下30秒前の指示が出された。カジメが掛け声をかけ、他の隊員がそれに答える。

「第111分隊、いくぞ。」

「おー。」

「いくぞ。」

「おー。」

「安全ベルトを外せ。」

揚陸艦隊員が目標を確認する。

「目標地点CS1123を確認。降下後進路確認。クリア！」

そして、降下開始の指示が出される。

「進路クリア！第111分隊は降下を開始して下さい。」

カジメは隊員に短く指示をする。

「出発だ。」

その合図と共に、約0.5秒間隔で第111分隊隊員が、第1、第2の2つのゲートから飛び出していく。他の隊員が飛び出し終わると同時に、カジメはエアロック内を手早く確認し、揚陸艦兵員に短く挨拶をする。

「お世話になりました。」

そして、第1ゲートから飛び出していった。

大気中での高速飛行のため少しふらついたが、減速すると共に飛行が安定した。カジメは、採取の開始を指示する。

「採取隊形を組む。採取班は採取可能高度まで降下せよ。採取に関しては、パドが指揮を取れ。運搬班はその上。ゾロモとデツホはその少し上で警戒につけ。私とワクチュン、ギデはさらにその上で警戒する。ゼクルルは自由に動いていい。異常があったらすぐに報告しろ。」

パドの指揮のもと、西安の文明・文化財の収集が順調に行われた。地上からの攻撃があったが、スクーパーズのサイコシールドを突破することは全くできず、跳ね返されてしまった。Su-27ジェット戦闘機6機が向かってきた。カジメは面倒になる前に、ゾロモに攻撃を命じた。ゾロモは、細く強力なスクープビームで戦闘機の一部を壊し、3機の戦闘機が墜落していった。パイロットは脱出したが、地上に落ちた戦闘機で被害が出ているようだった。3機の戦闘機は逃げることかと思っただが、再度向かってきて、ミサイルを発射した。3機はゼクルルが撃墜した。飛んでき

たミサイルも、サイコバリヤーに到達する前に、ゾロモが撃ち落とした。ミサイルで、スクーパーズが被害を被ることはないが、採取作業の邪魔になるため、ガジメが撃墜を命令したのである。ガジメがゾロモを褒める。

「1発も外さず、さすがだな、ゾロモ。」

「有難うございます。ゼクルもすぐに適切な位置に動いて、的確な攻撃でした。」

「そうだな。二人ともさすがだな。これで人間の抵抗はなくなるんじゃないかな。」

ガジメの言った通り、その後大きな抵抗はなくなった。パドの案内の元、採取は順調に進み、計画したものの採取を完了した。ガジメは、小隊長に連絡した後、採取の終了を宣言する。

「他の分隊も順調なようだ。我々は、小隊の集合地点に向かい野営する。」

野営地は、中国の沿岸部の森の中に設定された。3時間弱の飛行の後、野営地に到着すると、辺りはすでに暗くなっていた。小隊の野営担当の第115分隊がすでに野営地の整備を終えていて、分隊ごとのテントや周辺には警戒用のセンサーや柵が設置されていた。ガジメが、

「明日は、海を渡って福岡へ飛び採取を行う。その後は、朝にも言った通り、渋谷に連隊が集結原宿に行進する。原宿では、王女様の調査に従って採取を行う。それで、今回の作戦は終了だ。明日の飛行距離は長く、朝も早いため、食事をとったら、早めに寝るように。」と指示すると、

「はい、分かりました。」

と、全員が返事をした。ガジメは、第115分隊の分隊長に挨拶に向かった。隊員は、野外で明かりを中心にして、スクープビームを使って小型化した携行食料・飲料を元に戻して、食べ始めた。パドがあいかわらず、後輩をからかう。

「さすがイワタ、安定した飛行だ。運搬にはもってこいだ。」

「ジャモチャ、テントはリコと別だからな。今日は、おとなしく寝るんだな。」

「バンクス、いつまでも子供の写真を見るんじゃないよ。フラグ立つぞ。」

ゴモは風景を見ていた。スクーパーズも昔は絵が描けて、古代の絵が残されていたが、今は絵を描けなくなってしまうていた。ゴモは採取作戦の先で、その生命体が描いた絵を見るのが好きだった。

「星空はスクーパーズ星とおなじだ。星座がちがうけど。山並みが綺麗だな。写真に撮っておこう。この星の人間は絵を描けるのかな。描けるならば見てみたい。」

優しく大人しそうに見えるゴモであるが、俊敏な動きで、ゼクル、ガジメについて、分隊では3番目の強さを持っている。

「もし僕が絵を描けるなら、この星空と山を描いてみたい。写真だと、印象が残せない。」

ゴモ自身は、戦闘よりも絵を描くことを夢見ていた。食事が終わって、明日の準備をした後、家族にメールを送ったり、家族からのメールを見るもの、ゲームに興じるものなどがいた。作戦中は警戒のため動き回るゼクルは早めに寝ることにして、テントの床についた。そして、子供の

ころ、王女と初めて会った場面を思い返していた。

スクーパーズの子供たちが、海岸の公園で遊んでいた。子供のゼクールが、海に落ちていく滑り台で遊ぶために、列に並んでいた。そこで、近所の3人組が横入りしようとした。

「ゼクール、邪魔。」「ゼクール、はやく下がらな。」「ゼクールは、のろまだな。」

ゼクールは下がりがりたくはなかったが、3人が怖くて、何も言わずに後ろに下がろうとした。そのときである。

「横入りは、いけないでしゅな。」

3人が振り向くとそこには、小さなスクーパーズの女の子が立っていた。

「ちゃんと、並ばなくてはいけないでしゅな。」

「生意気な。あっちへ行け。」

リーダ格の少年が、小さな女の子を押し飛ばした。女の子は地面に落ちて、砂で汚れたが、すぐに浮き上がる。

「いけないでしゅな。」

そう言っただけで引かない構えである。ゼクールは女の子を助けたかったが、見ることもできなかった。

「何を。」

リーダ格の男の子がそう叫んで、もう一度強く当たろうとしたが、他の少年と少女が止める。

「小さな女の子にケガさせたらヤバイよ。」

「捕まっちゃうかもしれない。」

それを聞いて、少年はぶつかるのを止めた。

「ちえっ、つまんね。行こう。」

捨て台詞を吐いて、別の遊び場に行こうとした。

「こんな女の子に助けられて、みっともねーの。」「ゼクール、弱虫ね。」

他の2人もゼクールをからかってから、少年の後について行き去って行った。砂だらけの女の子が、ゼクールに話しかける。

「大丈夫でしゅな？」

ゼクールははっとして答える。

「君こそ、大丈夫？怪我はないかい。ごめん、僕がしっかりしていないばかりに。」

「大丈夫でしゅな。みんなのためになることをするのが好きなんでしゅな。」

「君はすごいね。それに比べたら、ぼくなんか。」

「そんなことはないんでしゅな。逃げずに、ずうっといてくれたでしゅな。」

「ありがとう。こんな僕のことを思って、そんなことを言ってくれて。君は、どこから来たんだろ。」



「あっちでしゅな。」

「あっち？家には帰れるの。」

「うーん、トラックの荷台に乗ってきたから、わからないでしゅな。」

「大胆なことをするんだね。わかった、僕が帰り路を探してあげる。」

「ほんとうでしゅな。ありがとうでしゅな。」

2人はそう言って、町の方へ歩き出した。

「ぼくは、ゼクール。君は何て言うの？」

「私は、みさでしゅな。ヘクール、よろしくですな。」

ゼクールはヘクールと聞こえるのかと思いつつも、気を取り直して答えた。

「みさちゃんか、いい名前だな。それにしても砂だらけだね。ぼくが払って上げるよ。」

そう言って持ってたハンカチで、みさの砂を払った。ゼクールがお菓子屋を見つけて言う。

「みさちゃん、あそこにお菓子屋さんがあるけれど、ガリガリ君食べる。僕、大好きなんだ。」

「ガリガリ君。なんでしゅな、それ。でもヘクールが好きならば、食べてみたいでしゅな。」

「わかった、さっきのお札に買ってあげる。」

ゼクールはお札ができることが嬉しかった。

「これが、ガリガリ君だよ。」

みさが袋のまま食べようとしていた。ゼクールは慌てて止める。

「袋のまま食べちゃだめだよ。袋から、こう出して、食べてごらん。」

そう言いながら、袋から取り出して、みさに渡した。一口食べたみさが言った。

「美味しんですな。甘くて、中がガリガリでしゅな。」

「このガリガリがいいんだよ。」

「だから、ガリガリ君というんでしゅな。」

「そうだよ。」

「覚えやすい名前でしゅな。」

「そうだね。見てごらん、夕日で空が赤くて綺麗だよ。」

海に落ちそうな、夕日がまわりの雲を赤くしていた。

「そうですな。綺麗でしゅな。」

「少しすると暗くなるから、街へ急ごう。アイスの棒を貸してごらん。」

アイスの棒をもらって、残念そうに言う。

「当たりじゃないね。残念。ごみは持って帰って家で捨てるよ。」

「ごみを持って帰るって、偉いでしゅな。」

「有難う。さあ、行こう。」

広い道に出たところで、兵隊さんが飛んできた。そして、ゼクールに言う。

「貴様、みさ王女様に何をした。」

「えっ。」

「王女が、こんなに汚れているではないか。」

みさがとりなす。

「何もしてないんでしゅな。転んだところを、助けてもらったでしゅな。道に迷っているところをここまで連れてきてくれたんでしゅな。」

「本当か、少年。」

ゼクールが驚いて返事ができないでいると、無線機でみさ王女を無事発見したことを連絡していた隊長らしき人が、後ろから出てきた。

「姫様が言うのだから、そうなのだろう。お前は姫様の言うことを疑うのですか。」

「メザグ中将、めっそももございません。」

「この少年も悪いことをしそうな感じではありません。みさ王女とわかって驚いているだけだと思えますよ。」

少年はただ様子を見ているだけだった。

「姫様、勝手にお城を抜け出してはいけません。城中大騒ぎです。」

「ごめんなさいでしゅな。でも、お外を一人で散歩してみたかったでしゅな。」

「わかりました。その話は侍従長から言って頂きます。今はお城に帰りましょう。」

「分かったでしゅな。お城にかえるでしゅな。」

ゼクールの方を向いて言う。

「ヘクール、ごめんなさいでしゅな。」

「そんなことはありません。」

「今日は、楽しかったでしゅな。」

「僕も、楽しかったです。」

「ガリガリ君をありがとうでしゅな。」

「また会ったら、喜んで差し上げます。」

「ありがとうでしゅな。また会えるといいでしゅな。」

「そのときまでに、もっと強い男になって、今度はぼくがみさ様をお守りします。」

「そうですな。でも、みさは優しいゼクールが好きでしゅな。」

「分かりました。優しく強い男になって見せます。」

「がんばるんでしゅな。」

「はい。」

隊長が、声をかける。

「姫様、行きましょう。」

みさがお別れを言う。

「ヘクール、バイバイでしゅな。」

「はい。バイバイです。また、お会いしましょう。」

「はい、でしゅな。」

そう言って、みさは隊長に連れられて行った。道を曲る前に、一度だけゼクルを見て、そして見えなくなってしまった。その後で、ゼクルは思う。

「みさ王女様は、みんなのために、危険なことでも、しなくてはいけないことをする立派な王女様だ。」

そして、固く決意する。

「僕は、みんなのためでなく、王女様のためになりたい。それができるスクーパーズになるんだ。」

「そして、今度は名前をちゃんと覚えてもらおう。」

その時から、ゼクルは自分を磨くべく、勉強と運動に熱心に取り組むようになった。陸軍兵学校を首席で卒業し「王女様たちを守る近衛連隊に入る。」という強い意思のもと、現在も鍛錬を怠らないでいた。

昔を思い出しているうちに、ゼクルは寝付いてしまった。その他の隊員も、あまり無理せず30分ほどすると、テントの中に入って寝ていた。外では、野営地の設営担当の第115分隊が警備をしていた。夜明け前、朝5時に起床の号令がかかった。全員30分ほどで身支度して、分隊ごとに集合した。ガジメが命令する。

「30分後に出発する。まず、海を越えて福岡に向かう。福岡では、福岡工業大学とトヨタ自動車九州の採取にあたる。それで福岡の採取は終了だ。その後は、東京の渋谷上空で第8連隊が集合する。そして、原宿へ行進し、王女様の閲兵を受ける。第8連隊がもっとも早く着きそうなので、王女様ご自身が集めた情報のもと、原宿の採取を担当する。」

ゼクルは、王女様がどんなものを選ぶか興味があった。ただ、採取班ではないので、採取はない。その代わり、

「エビふりヤー様がいらっしゃるから何があっても大丈夫だけど、僕の役割は、危険がエビふりヤー様に到達する前に対処すること。姫さまを危険から少しでも遠ざけることだ。」

と、自分の役割を言い聞かせながら、少しは王女様を守る役割を果たすことができることを楽しみにしていた。ガジメが分隊の隊員たちに質問を求めた。パドが作戦全体の状況について質問した。ガジメが答える。

「第8連隊は、順調に進んでいる。ガーチューン連隊長の綿密な計画の賜物だと思う。第3連隊は、ギンシア連隊長が強引に進めている。アメリカ中南部の砂漠を飛行している小隊に対して、人間による核兵器を積んだミサイルの使用が確認されたが、第3連隊第1中隊のドービス上等兵らが途中で撃ち落としたので被害は出ていない。ただ、多数のミサイルの対処で時間がかかっている。第11連隊のモーガン連隊長は、双方の犠牲が少なくなるように慎重にやっている。戦闘機が来てすぐには撃墜せず、サイコバリアーで守りつつ、郊外まで引き連れてきてから攻撃

しているし、人がいる建物を採取するときに、我々第8連隊は採取リストを渡したただけだが、第11連隊は人が付近にいないことを確認してから採取をしている。また、ユーラシア大陸北方でも、かなりの数のミサイルが発射されているようで、その対処にも時間がかかっている。我々が、これから向かう日本の上空には、王女様の戦艦が待機していて、ミサイルは戦艦の方で撃ち落とすと思うので、あまり心配はない。」

と説明した。パドが納得して答える。

「わかりました。」

ガジメがゾロモとゼクールに言った。

「昨日は人間にとって奇襲だったので、計画的な迎撃はなかったが、今日は2日目だ。人間も何かしてくるかも知れない。戦艦がいるので大丈夫だとは思いますが、戦艦が撃ち漏らしたときには、二人が頼りだ。そのときは、しっかり頼むぞ。」

「はい。」

返事の後、ゾロモ、デツボとゼクールが話し合った。

「ゼクール、いつもの通りにね。私は分隊の傍にいて、遠くから狙い撃つわ。ゼクールは、相手に接近して叩いてね。」

「了解です。昨日はゆっくり寝ましたし、元気いっぱいです。分隊が危ないときは、動いて動いて動きまわります。」

「お願いね。」

「はい、まかせて下さい。」

「デツボも、周りをよく見て、脅威を発見したら早めに教えてね。」

「分かりました。目だけはいいいので、全力で見渡します。」

「目がいいのはわかっているわ。でも、そんなに私を見つめなくてもいいのよ。」

「申し訳ありません。ただ、ゾロモ軍曹を見ていると目が休まりますので。」

「あら、ありがとう。でも、上官をからかうものではないわよ、デツボ。」

「からかうなんてことはありませんが、失礼しました。」

それを聞いて、ゼクールがゾロモに言う。

「仲がいいですね。」

「姉と弟みたいなものね。」

それを聞いた、デツボがゾロモに言う。

「姉と弟ですか・・・。」

「我が弟よ、しっかり頼むわよ。」

「はい、了解しました、お姉さま。少しでも早く敵を発見します。」

「よろしい。」

3体で笑った。

分隊の出発時間が来た。福岡に向けて出発した。中国大陸の上を飛び、少ししたら海に出た。ゴモがつぶやく。

「地球の海だ。綺麗だな。」

2時間ぐらいして福岡に到着した。福岡での採取活動は特に障害なく進んだ。抵抗は被害を大きくするだけと悟ったのか抵抗は全くなかった。人は、山の中に隠れているようで、市街地に人はほとんどいなかった。採取を終わって、ガジメが命令した。

「さあ、渋谷へ向かおう。」

第8連隊の他の隊も、抵抗を受けることなく、渋谷に集まってきた。F-15J戦闘機が上がってきたが、様子を見ているだけで近づいてくることはなかった。スクーパーズは、日本時間で今日の朝3時ごろ、国連に向けて、その日の採取計画とスクーパーズは渋谷で集結して原宿に向かうこと、原宿から宇宙へ帰ること、その後は自由にしてよいことを通告してあった。そのため、採取予定物の近くにいる人は、山や採取対象になっていない小学校の体育館などに避難していた。原宿には、採取するものを現地で決めるという通告のため、採取の影響で被害が出ることを恐れて、完全に全員が避難して人がいなくなっていた。そのはずだった。

昼過ぎに、第8連隊が渋谷上空に集結した。渋谷で12列縦隊になり明治通り上空を原宿まで行進して王女のところへ向かう予定であった。第8連隊は、点呼で全員そろっていることを確認した。ガーチューンはそれを知って安心した。

「一体も欠けていない。良かった。」

そして、命令する。

「行進隊形に並びなおせ。原宿まで行進だ。そこで、みさ王女様の閲兵を受ける。原宿で採取するものは、その後で王女様がお決めになる。私がエビふりャー様に採取するものを伺いに行くので、その間全員原宿上空で待っていてくれ。」

音楽がかかった。その曲はどこかの星で採取したものだ。それに合わせて行進が開始された。ゼクルルは、王女様に会えることを喜びながら行進した。

「あの時のことは、もう覚えてはいらっしやらないだろうな。」

そう思いながらも、期待と嬉しきでいっぱいだった。

明治通り上空を原宿まで行進した。ガーチューン連隊長は、王女がどこかで見ているものと思っただが、どこにも見当たらなかった。そのとき、ゼクルルが王女に気が付いて叫んだ。「10時方向約500メートル先に王女様がいらっしやいます。でも、人間に拉致されているようです。」ガーチューンがその声に気が付いて、その方向を見ると、人間の姿に擬態している王女が、人間に抱きかかえられ連れ去られているのが見えた。

「何が起きている。エビふりャー様は？」

王女様の周辺を見ると、王女様を連れてくる人間の20メートルぐらい後方を、エビふりャーが

追走しているのが見えた。状況は分からなかったが、ガーチューンは連隊を行進隊形から戦闘隊形へ変換することを命じ、エビふりヤーからの連絡を待つことにした。連隊が3次元的に広がった。ただ、通常の戦闘隊形では、連隊長はほぼ隊形中央にいるのであるが、ガーチューンと連隊付き参謀たちは様子を見るために前方に出た。また、連隊長の護衛に、第111分隊をあてた。しかし、人間と王女の姿が、そしてエビふりヤーの姿が見えなくなった。

ゼクルルがたまらず、連隊長に呼びかける。

「王女様を救出に行きましょう。」

一兵卒が連隊長に呼びかけることは軍規違反であるが、そんなことを言っている場合ではなかった。しかし、慎重なガーチューンは、待機を指示する。

「いや、1個連隊に匹敵するエビふりヤー様がいらっしやるんだ。連絡があるまで、第1級戦闘陣形で待機だ。」

ゼクルルはいても立ってもいられなかったが、方が一下手に動いて王女様を傷つけたら、取り返しつかないことになることも理解しているため、じっと耐えた。そのまま、2分3分と時間が経った。とても長く感じる時間であった。

少しして、原宿を光が覆った。それは強力というわけではないが、あたかも宇宙を覆いつくすかのような広がりをもった光だった。そして、光はすぐに収まった。ガーチューンが尋ねた。

「なんだ。今の光は。」

連隊付技術参謀のアルドアが答えた。

「わかりません。分析を急がせますが、光の正体、発せられた場所が手持ちの機器ではつかめていません。」

「そうか。わからないことが続くな。とりあえず、もう少し待機した方がいいな。」

それから5分ぐらいしたとき、王女が消えた方向から、王女をさらった人間がボードに乗って上がって来た。全員が緊張した。人間は連隊の50メートルぐらい手前で停止した。これまでの実戦経験から、どのような場合でも、周辺警備を怠らないガジメ分隊長は、人間が出てきた方向に、こちらに大きな銃のようなものを向けている人間を見つけていた。空中の人間は持っている棒のようなものを振り回し、何か言っていた。その言葉は直ちに翻訳機にかけられた。

「原宿から出ていけ。原宿のものを奪うな。教えを乞へ。」

そう言っているようだった。連隊付作戦参謀長が翻訳機を使い、勧告を行う。

「おとなしく降参して、王女を引き渡せ。」

人間はその言葉を理解していないようだった。人間は同じような内容の言葉を繰り返していた。ガーチューンは制限時間を設けて、人間に再度降伏を勧告した。しかし、その時間が過ぎても相手は動かなかった。

エビふりヤーからの連絡がない中、ガーチューンは判断を迷ったが、エビふりヤーも、王女様が高質に取られていて動けないのではないかと思ひ。第8連隊での解決を決意した。第8連隊最

強の第111分隊のところに行って指示を出した。スナイパーのゾロモに向かって尋ねる。

「あの人間を撃てるか。」

ゾロモは答える。

「はい、止まっていますし、簡単です。」

続いて下を見ながら尋ねる。

「続いて、敵のスナイパーのような人間を撃つことはできるか。」

「はい、少し遠いですが、できます。」

「わかった。ありがとう。」

ガーチューンは作戦を決め、各中隊長と第111分隊長カジメを集めた。

「では命令を伝える。第111小隊は、王女救出のための重要な役割を果たしてもらおう。お前たちが、この連隊では一番速い。空中の人間、地上の人間を狙撃後、その成否にかかわらず、第111分隊は急降下、地上近くから王女が見えなくなった場所の周辺を搜索。エビふりヤー様を呼びかける。テレパシーだけでも50メートルぐらいは通じる。この広さならばすぐに通じるはずだ。採取して運搬してきたものは、第411分隊に預ける。」

「第4中隊はこの場所待機。残りの中隊は空中から急がず接近する。ここで核兵器を使うとは考えられないので大丈夫とは思いますが、おとりとなる。」

各中隊長とカジメは隊員に連隊長の命令を伝えた。そして、カジメはゼクルルに命令した。

「お前が、この分隊、いやこの連隊で最速で最強だ。この手の作戦は時間との戦いになる。なんとしても、お前が真っ先に王女様にたどり着け。」

「はい。」

「これは命令ではないが。」

カジメは前置きを述べてから命令する。

「王女様のところにたどりつき、相手を倒すことが難しいと判断したら、お前は王女様の盾になる。」

ゼクルルはカジメの言っている意味をすぐに理解した。

「はい、命に代えても、王女様をお守りします。」

「頼む。」

ゼクルルの決意に、カジメはそう短く答えた。ゼクルルは昔出会った王女をまた思い浮かべながらつぶやく。

「王女様の命と引き換えならば喜んで。」

急な展開で戸惑いもあったが、心は不思議に清々しかった。

連隊に全体に指示が伝わったことを確かめた後、ガーチューンは周りの様子を確認し、作戦開始の命令を発した。

「作戦開始。」

カジメはゾロモに指示をする。

「撃て。」

ゾロモが放ったスクープビームが、空中の人間にまっすぐ飛んで行った。命中すると誰もが思った。しかし、そのビームは棒のようなものではじかれてしまった。

「スクープビームをはじくなんて。」

ゾロモは驚いた。しかし、カジメは作戦計画に従い指示をする。

「下の人間を撃て。」

ゾロモが下の人間に狙いを付けようとすると、空中の人間が棒を振りかざし、ゾロモ目掛けて飛び込んできた。2射目が間に合わないかもしれないと判断したゾロモを補助するデツホは、ゾロモの前に出た。同様に、この状態での狙撃は無理と判断したカジメは、空中の人間は連隊に任せることにした。

「射撃中止。急降下して王女様のもとへ向かう。」

第111分隊は、最高速で急降下、王女様が見えなくなった地点に向かった。ゼクルルは本当に最高速を出した。分隊を引き離す形で進んだ。空中の人間も追ってきた。そのときである。地上の人間から、散弾のようなものが連隊に向けて放たれた。40体以上のスクープパーズに命中した。弾が真正面に命中したスクープパーズは、落ちていく途中で消えていった。文字通り完全に消滅した。中には軽傷でふらふら飛んでいるもの。消えずに推進力が落ちてゆっくりと落ちていくものもあった。1度に十数体のスクープパーズが消えてしまった。その後、第2射が来た。やはり、十数体のスクープパーズが消えた。

ガーチューンは予想外の事態に驚いていたが、冷静に作戦の継続は無理と判断して命じる。

「作戦は中止だ。下降してすぐに渋谷まで撤退しろ。救護班は落ちた隊員を救出して渋谷まで撤退しろ。技術参謀は、敵の武器を至急分析しろ。」

第111分隊はテレパシーが伝わる範囲を超えていたので、無線装置で撤退を伝達した。

第111分隊の連隊との通信担当ワクチューンに連絡が届いた、ワクチューンはカジメにそれを伝える。

「撤退命令です。本隊では、数十体規模の犠牲が出ているそうです。」

後ろから追ってきた人間がすごい速さで追いついてきて横に並んだが、ちらりと見て、そのまま先に行ってしまった。先頭のゼクルルに目標を定めているようだった。カジメはテレパシーと携帯通信装置でゼクルルに通信を試みたが、少し距離があるのと、エビふりヤーを呼び出すのに懸命で気が付かないようだった。そこで、最良と思う指示をした。

「みんなは渋谷に撤退してくれ。私はゼクルルに撤退を伝達してから撤退する。」

だが、撤退するものはいなかった。いつもは部下をからかってばかりいる、パドが分隊長に進言する。

「スクープビームが棒ではじかれるならば、多方向から同時にビームを撃つしかないですね。」



「そうか。そうだな。いくぞ、みんな。」

少し進んだところにT字路があり、どちらに進んで良いか迷ったゼクールは一度停止した。追いついた人間はそのまま少し追い越して止まった。そして、棒を構えて、ゼクルの前に対峙した。すぐに分隊が追いついた。よく見ると棒からは、細いホースが付いていて、ホースの先にはタンクのようなものが付いていた。

「包囲しろ。」

ガジメが命じた。人間を分隊が取り囲んだ。真上にはゾロモとデツホが、少し高いところに、ガジメとギデ、ゼクール、ゴモが、それ以外の隊員が人間とほぼ同じ高さで人間を囲んだ。人間と同じ高さの隊員が撃つと同士討ちになる可能性があるため、ゾロモ、ガジメ、ゼクール、ゴモの4人で同時攻撃をしかけるつもりだ。ガジメは、人間と同じ高さにいる隊員に指示をする。

「もし、人間が自分の方に飛び込んできたら、上昇して避ける。可能ならばそのときに攻撃しろ。」  
ゴモは人間の周りを確認する途中で、人間を囲んでいるガビーの後ろの壁に目が止まった。

「絵だ。」

心の中で叫んだ。

「大小数人の人間が描かれていて、家族の絵かな。」

ゴモは絵を見てそんなことを考えたが、今は攻撃に集中することにした。ガジメが攻撃命令を出す。

「撃て。」

4人が同時にスクープビームを放った。ビームを放つ直前、人間は上昇しながら、ガジメの方に向けて加速した。ガジメが隊長と分かっているようだった。ガジメのビームは棒ではじかれた。ゾロモ、ゼクール、ゴモのビームは背中の後ろを通って地面に当たった。ガジメはすぐに第2射を放ったがそれはじかれた。ガジメは回避しようとした。そして、ガジメのすぐ下にいたバンクスが、

「させるかよ。」

といいながら、人間に下から体当たりして動きを止めようとしたが、人間の足の高さになったときに、人間に蹴られガジメの方に飛ばされて、ガジメと衝突してしまう。そのため、ガジメがバランスを崩した。人間は棒を前に突き出し、ガジメに向かって進んでくる。隊員は、人間の棒がガジメに突き刺さるかと思いきや息を飲んだ。

「危ない。」

そのとき、ギデがガジメをかばうように前に出た。人間の棒がギデに突き刺さった。人間はそのまま進んで、振り返りながらギデを切り裂いた。そして、また分隊と対峙した。ガジメが叫ぶ。

「ギデー！」

ギデは答えることなく、霧になるように消えてしまった。消えるとき、ギデは隊長が無事だったので、少し安心して見えているようにも見えた。ゼクールが叫ぶ。

「ギデが。」

しかし、ガジメは即座に苦渋の選択をした。

「撤退だ。低空を飛んで渋谷まで撤退だ。上を飛ぶと別の人間にやられる可能性がある。」  
ゼクルールは食い下がる。

「しかし、王女様は。」

「連隊長から撤退命令が出ている。相手の武器も分からない。下手に動くと、王女様がかえって危ない。一度、体制を立て直す。撤退だ。」

ガジメはそう言うと、人間の方を向いたまま、ゆっくり人間から離れて行った。分隊がそれに続いた。イワタは初めてスクーパーズが死ぬのを間近で見て、言い表すことができない恐怖を抱いた。パドはデストロイヤーズとの戦闘で戦死者は見てきたが、ギデが完全に消滅してしまったことに驚いてつぶやく。

「何なんだ。あの武器は。」

ゴモはギデが死んだことを悲しんでいたが、後退しながら、また壁の絵を見て思う。

「温かな絵。戦場にはふさわしくない絵。どんな人間が描いたんだろう。」

分隊のしんがりを務めるため、分隊の最後尾に付けているゼクルールが悔しそうに言う。

「くそー、人間め。絶対に王女様を助け出す。そして、ギデの仇を討ってやる。」

人間は棒を構えながらも追ってこなかった。分隊が曲がり角を曲がると、人間は見えなくなった。

また時間もどおり、スクーパーズ来襲日の17時ごろ、日本の国家安全保障委員会が、緊急に招集されていた。まず、響（ひびき）首相が招集した理由を説明する。

「お忙しいところを、お集まりいただき、大変ありがとうございます。本日、緊急にお集まり頂いた理由はお判りと思いますが、スクーパーズと名乗る宇宙人が、地球の文明・文化を採取するためにやってきていることです。採取とのことですが、強制的に行われるため、ここでは奪取という言葉を使いたいと思います。日本にはまだ到来していませんが、やがては日本にもやってくるものと考えられます。それにどう対処するか、方針を決定することが、この委員会の目的になります。詳しい状況については、外務省、防衛省などからの情報を、内閣調査室に集約していますので、内閣調査室長からご説明致します。また、文明・文化財が奪取の対象とのことで、文部科学大臣にもご列席頂いています。」

「内閣調査室長の上杉です。世界各国の起きている状況を説明したいと思います。スクーパーズと名乗る宇宙人の集団が、日本時間13時ごろ、国連や各国に対して、文明・文化財を採取すること、その理由、採取の内容を50あまりの言語で通告してきました。そして、3時間後の16時ごろから世界各国で採取、すみません、奪取を開始しています。我が国に関する通告は、現在のところ確認されていません。アメリカ、EU諸国、中国、ロシアに関しては通告があり、奪取が始まっています。韓国に関する通告はまだないとの情報を得ています。奪取のペースから考えて、我が国の奪取は明日以降になるのではないかと考えられます。」

「人間への直接攻撃や誘拐は本当にはないのですか。」  
「はい総理。人間への直接攻撃や誘拐は確認されていません。アメリカ軍が激しく抵抗しているようで、その状況を見守る必要はあるとは思いますが。」

「理由は、アンドロメダ銀河との戦争に勝つためとのことですが。」

「はい、総理。スクーパーズはそのように主張しています。ただ、地球の科学力ではその事が事実かどうかさえ分からないのが現状です。」

「確かに、分からないことだらけです。すぐに決めなくてはいけないことは、国民の避難計画、文化財の退避の是非、自衛隊による反撃の是非です。国民の生命・財産を守ることが政府の務めですが、文化財の避難や反撃は人的犠牲を大きくするという問題をはらんでいます。」  
防衛大臣が意見を述べる。

「首相のおっしゃる通りです。勝てない争いをして犠牲が大きくなるだけです。それは先の大戦で我が国が経験したことです。相手は個体が飛行できるので、陸自、海自は、基本的には国民の避難を優先して準備を進めたいと思います。」

文部科学大臣が発言する。

「しかし、我が国には、二千年以上の貴重な文化財が多数あります。それをみすみすスクーパー

ズに渡すのでしょうか。」

防衛大臣が答える。

「アメリカ軍が交戦中とのことですので、防衛可能かどうかは、その結果を判断してからではないかがですか。」

首相が尋ねる。

「法務大臣、宇宙人が現れたときに適用できる法律はありますか。」

「そもそも論でいえば、憲法も法律も宇宙人の来襲を想定したものではありません。ですので、拡大して解釈するしかないと思われます。宇宙人の文化財などの暴力的な収奪を、我が国への武力攻撃と見なせば、自衛隊法で防衛措置が可能です。国民の避難支援ならば、自治体の要請により災害対策として出動することも可能です。」

「総理！」

「防衛大臣、何でしょうか。何か情報がありますか。」

「いえ、今はありません。アメリカからの情報を待ちたいと思います。ただ、いずれにしろ人が必要になると思います。時間があまり残されていませんので、緊急に予備自衛官を招集したいと思いますが、よろしいでしょうか。」

「その通りですね。人手は多いほど良いです。至急お願いします。」

「はい、わかりました。」

すぐに、防衛大臣が防衛省に連絡をした。首相は今できることが限られていると感じ、次の命令を発した。

「総務大臣。スクーパーズが日本に来るまで、まだ少し時間があると思われる。各自治体に、避難所を確認するように連絡してください。そして、奪取のリストが送られてきたときに、そこに近い避難所を避難先から外せるように整理することと、どのくらいの自衛隊の救援が必要かを連絡するように、伝えて来て下さい。」

「分かりました。すぐに実行します。」

「スクーパーズが去るまで、すべての省庁職員は原則スクーパーズ対策に集中するように指示して下さい。」

「総理！」

「なんですか。文部科学大臣。」

「文明・文化財の避難に自衛隊の協力を得ることはできないでしょうか。」

「国民の避難が第一優先ですが、余裕があれば検討する必要がありますね。特に、国宝は避難を考えておく必要があります。」

「わかりました、国、自治体、個人所有のものに関して、所在を確認しておきます。文科省の担当ではありませんが、三種の神器についてはどうされるおつもりですか。」

「それがありましたね。日本統合の象徴の象徴です。宮内庁に問い合わせましょう。しかし、隠

すとなつたらどこがいいでしょうか。」

「経済産業省としては、鉱山やその跡地、深い地下鉄の駅などが考えられると思います。」

「そうですね。他にないですか。」

「防衛省としては、すでに奪取が終わったところにオスプレイで運搬して、隠すということができるとは思います。」

「わかりました。検討しましょう。あと、この会議を補佐する専門家が必要です。この事態の対応のために、科学技術に関する専門委員会と文化財に関する専門委員会を構成しようと思います。文部科学省には両方の会議の人選を、経産省には科学技術専門委員会の人選の補助をお願いしますか。」

経産省大臣が答える。

「わかりました。科学技術専門委員会の委員は、文科省さんとうちから、5名ずつぐらいでいかがですか。また、文明・文化財に関してもうちからも委員を出したいと思います。」

「いえ、科学と技術の先端部分は文科省が担っていますからうちから8名、経産省から応用面で2名ぐらいが妥当です。と言うより、今回は応用面はあまり重要でないので、経産省さんはあまり関係がないのではないですか。」

「うちにも、産総研を初めとして先端の科学技術の研究をしています。また、日本で文明と云えば、産業は外せません。」

「経産省は科学は扱っていないでしょう。経産省さんのプロジェクトベースで、科学技術と言っても、純粋な科学はほとんどないはずです。」

首相が話に割り込む。

「二人とも、ここでつまらない喧嘩は不要です。両委員会とも、文科省から7名、経産省から3名選んで委員会を作って下さい。防衛省からも必要ならば人を出して欲しい。ただ、防衛関係の人を学者さんが受け入れるかは心配です。できるだけ、防衛庁からの人を受け入れるような人を選んで下さい。委員長は文科省から推薦して下さい。」

「わかりました。」

3大臣がそのように返事をし、総理が続ける。

「とりあえず、話を打ち切りますが、すぐにこの会議室に集まることのできる場所について下さい。緊急の会合が必要かもしれません。では、休憩に入ります。」

会議は休憩に入った。各大臣や官僚は各省との連絡を開始した。会議室では、各国のニュースが流れ、首相はそれを見ていた。

koko

夜9時ごろ2回目の会議が招集され、会議が始まった。

「お集り頂きありがとうございます。内閣調査室長から最新の情報をお伝え頂きたいと思いません。」

「はい、総理。各国からの情報を集約しますと、地球で活動しているスクーパーズは約3、000体程度と考えられます。そして、採取や警備など役割分担があるようです。」

「調査室長、採取でなく、奪取という言葉を使ってください。」

「総理、失礼しました。奪取などの役割分担があるようです。通告があったものを、手際よく奪取しています。米軍は全軍をあげて激しく抵抗しているようですが、残念ながらバリヤーみたいなものに阻まれ、攻撃の効果は確認されていません。スクーパーズから民間人を目標にした攻撃はないようですが、飛行機やミサイルが撃墜されたり、陸軍への反撃の巻き添えのために、兵員ばかりでなく、民間人の犠牲者も万人の単位で出ているようです。スクーパーズの行動パターンが地域によって異なり、ヨーロッパのスクーパーズは、戦闘を住宅があまりないところまで誘導してから行ったり、文化財の奪取も人がいないことを偵察で確認してから行うなど、犠牲者を極力減らそうとしているように見えるとのことです。アメリカのスクーパーズは積極的に反撃をしているようで、そのために生じる地球側の犠牲は考慮してないように見えるとのことです。中国、ロシアのスクーパーズはその中間という感じですが、また、ヨーロッパのスクーパーズは夜でも活動していますが、中国、ロシアのスクーパーズは、夜になって活動をやめたとのことです。」

「どういうことですか。」

「はい、今回の作戦では、指揮官が異なる別々の3つの隊で構成されているのではないかと考えられます。それは、兵員を運んできた宇宙船が3隻確認されていることから推測されます。」

「宇宙船が確認されているのですか。」

「はい、大きな宇宙戦艦が1隻、兵員を運んできたと思われる揚陸艦が3隻、護衛艦と思われる少し小ぶりの船が6隻程度、地球から500キロメートルぐらいの宇宙空間にいます。軌道速度でなく、地球の自転に合わせて浮かんでいる感じです。ですので、スクーパーズの宇宙船は重力を制御できるのではないかと考えられます。揚陸艦と護衛艦1隻づつは、アメリカ、ヨーロッパ、中国上空にいますが、戦艦と護衛艦3隻は日本上空にいます。」

「またなぜ日本の上空に。」

「理由は分かりません。基点にしているのか、なにか守るべきものがあるのか。」

「戦艦が日本上空にいるとすると、うかつなことではできないですね。スクーパーズのある円盤みたいな形は、あれが乗り物なのか、それとも、スクーパーズの生き物本体なのか。」

「現在まで確認は取れていません。時速数百キロメートル程度で移動できること、ビームを出して、兵器を迎撃したり、文化財を奪取することが可能なようです。奪取したものは、小型化して蓄えているようです。」

「わかりました。米軍で歯が立たないようでしたら、自衛隊による抵抗は犠牲を増やすだけのようです。避難を優先で考えましょう。総務大臣、避難所の確認の方はどうなっていますか。」

「はい、各地方自治体が進めております。現在までに半分は終わりました。」

「自治体からの、自衛隊の要請は。」

「交通などは順調に動いているので、特にはないようです。ただ、どの自治体もヘリコプタをお願いしたいことはあるかもしれないことです。」

「防衛大臣、少しでも多数のヘリが運用できるように、準備をお願いします。」

「分かりました。陸海空の自衛隊で1台でも多くのヘリを飛ばせるようにしておきます。」

「お願いします。文部科学大臣、国宝の確認などは済んでいますか。」

「はい、国、自治体所有のものは確認を終わりました。個人所有のものは70%ほど終了しています。」

「引き続き、続けて下さい。厚生労働大臣。避難で一番問題になるのは、病院や老人ホームだと思われれます。すでにスクーパーズが来た国で、そういう場所にあるものが、彼らの奪取の対象になった例はありますか。」

「現在のところ、奪取されたものについては、情報が混乱しています、はっきりしません。引き続き調査します。」

「まだスクーパーズが地球に到来してから8時間ぐらいですから無理もないですね。日本の全病院、老人ホームから人を避難させることは、ほぼ不可能だと思います。先に対象となるところが推定できれば、そこを優先して避難を開始したいと思います。調査と避難すべき病院と老人ホームの推定をできるだけ早くお願いします。ところで、宮内庁から、三種の神器について何か言っていますか。」

「内閣官房です。陛下に上申しましたところ、皇居から動かさないようにとの意向のようです。また、このような和歌を渡されたとのこと。」

首相が和歌を読む。(筆者は和歌が読めませんので、和歌自体はなしです。)そして、和歌の説明を行う。

「意味は、波風が立った後、さらに、はらからに、仲良くなったが、失われた命がとても残念である、ということですね。昭和天皇が太平洋戦争の御前会議で引用された明治天皇の『よもの海みなはらからと思ふ世になど波風のたちさわぐらむ』を引き継いだものと思います。国民の生命を第一にしるこのことでしょう。皇居から動かさないようにおっしゃっていらっしゃるのも、二次被害を恐れるのことに思います。陛下のご意向に沿いたいと思います。宮内庁には、皇居内で隠し場所を探すように連絡して下さい。」

「かしこまりました。ニュースが騒いでいますので、国民への説明も必要とは思いますが。」

「10時から記者会見を開きましょう。私が出ます。状況説明と、政府は抵抗はしないこと、国民も抵抗を試みずに、自治体の指示に従い生命を大切にして避難すること、国も全力で避難を支援することを伝えます。それでは、次の集合をかけるまで、各省庁、必要な作業を進めてください。」

会議が休会に入った。席を離れながら、総理大臣が独り言を言った。

「地球の文明・文化の源と言えば人間のはずなのに、人間の誘拐がないのはなぜでしょうか。ま

あいいです。よくわかりませんが、こちらにとつては、嬉しいことです。」

その後も、定期的に会議が開催され、海外の様子や避難所の整備状況などについて、情報が交換された。そして夜中の3時すぎに、緊急に会議が招集された。内閣調査室長が説明を開始する。「国連に、日本を含めたまだ奪取していないもののリストが届いたそうです。その中から、日本に関係するものを抽出してリストにしました。日本だけでも数千もの文明・文化財がリストに上がっています。また、残念ながら、三種の神器はリストの中ありませんでした。このことについては、すでに宮内庁に連絡済みです。」

「調査室長から説明があった通りです。そのリストを、こちらの国宝のリストと付き合わせています。スクーパーズのリストにも、ご丁寧に所在地の緯度経度の他に地名まで記されているのですが、それを確認しています。現在まで確認した範囲では、所在地はすべて正しいようです。スクーパーズはかなり正確に地球のことがわかっているようです。現在は、スクーパーズのリストの所在地から近い避難所を避難所リストから外して避難計画、どの地区が、いつどこに避難するかですが、その計画を策定しています。避難は朝6時ごろから開始する予定です。避難の距離は対象物からどれくらいとれば良いですか。」

「外務省や防衛省から頂いた情報を合わせても、それほど距離はとる必要はなさそうです。対象物のすぐ隣にいても問題なかったとの話です。」

「そうですか。百メートルぐらい取れば良いでしょうか。」

「はい、その程度十分と思います。」

「防衛大臣はどう思いますか。」

「高いビルにある場合、奪取の際に落下物が生じると危険です。二百メートルぐらいがよろしいかと。」

「了解しました、二百メートルとしましょう。次に、調査室長、原宿に関する情報を説明して下さい。」

「スクーパーズからの通告によると、原宿に関しては現在調査中で、採取する物品、すみませんスクーパーズからの連絡がそうなっていましたので、奪取する物品は特定できないとのことですが、また今後スクーパーズは原宿に集結し、地球を離れ宇宙に帰るとのことです。最初に原宿に到着するのは、日本時間で今日の昼過ぎになるとのことです。」

「原宿と言っても、どこを指すんでしょう。」

「スクーパーズから送られてきた説明の図によると、ラフォーレ原宿から半径500メートルぐらいのところが示唆されています。」

「総理！」

「なんですか。防衛大臣。」

「先ほど、日本上空に宇宙戦艦がいると言いましたが、正確には、原宿のラフォーレ原宿上空に



います。」

「なるほど。原宿になにかあるのでしょいか。でも今は分からないですね。ラフォーレ原宿から半径1キロメートル以内の住民をすべて避難させましょう。東京都だけでできないようでしたら、自衛隊を要請するように都知事に伝えてください。すでにスクーパーズが来たところでも、抵抗しなかったところは人的被害がないようです。今回は、人的被害を最小限にすることを努めましょう。」

「しかし、総理大臣。現在原宿を調査中とのことですから、原宿には調査のためのスクーパーズが来ていると考えられます。どのように対処しましょうか。」

「人を攻撃してこないようならば、自由にさせる他はありません。原宿の避難時もスクーパーズを刺激しないように、穏やかに避難を実行する必要がありますね。」

「調査といっても、あの円盤のような形では、すぐに分かってしまいます。人間や動物に擬態しているのかもしれませんが。」

「そうですね、Tot ti Candy Factoryの綿あめになっっているかもしれないですね。」

(笑い声)

「総理もお若いですね。」

「子供と行ったことがあるぐらいです。スクーパーズが擬態しているとすると、人間も動物も避難を強制したりしないことが必要でしょうね。もし、それがスクーパーズだったら、面倒なことになります。」

「分かりました。自治体、自衛隊員には事情を説明して、避難を強制しないようにしたいと思います。」

「テレビ・ラジオやインターネットを使って、避難が必要なことを広報して下さい。また、スクーパーズがいなくなったら、すぐに戻れるということも分かってもらうことも重要です。スクーパーズの到着が昼過ぎとのことで、まだ時間はあります。よろしく願います。」

「分かりました。」

「調査室長、他になにかありますか。」

「はい、奪取対象物から半径200メートル、ラフォーレ原宿から半径1キロメートルの鉄道、道路、電気、ガス、水道などを止める必要があると思われれます。」

「わかりました。国交省、地方自治体や企業と協力して、6時ごろから止めるように、調整を急いで下さい。」

「了解しました。ただ道路を止めると、避難が困難になります。」

「そうですね。ガスはともかく、他のものは避難のための必要がなくなってからでしょうね。とすると、地方自治体の対策本部に任せるしかなさそうですね。では、地方自治体の対策本部の指示に従うように、企業などに通知して下さい。」

「わかりました。」

「他に何かありますか。」

「総理！避難時に所持したものがリストに入っていると、避難している人が危険になる可能性があります。」

「その通りですね。重要なことです。避難の際にはものを持ち出さないことを広報することも必要ですが、避難所に入る際にチェックするようにしましょう。もし、所持した場合は、もちこもうとした物を車で200メートル以上離して置くようにして下さい。」

「わかりました。」

「他に何かありますか。ないようでしたら休会したいと思います。緊急な要件がありましたらお呼びします。それまでは各省庁ともスクーパーズ対策にあたってください。」

朝4時前、PARKの控室では、りと、まり、ことこ、みさ、さゆみんが気持良さそうに寝ていた。残念ながら、その眠りは広報車による避難の呼びかけで中断される。

「原宿にお住いの皆さん、スクーパーズと呼ばれる宇宙人から、昼過ぎに原宿に集結し、文明・文化財の奪取を行うとの通告がありました。まだ朝早いですが、原宿のみなさんは避難をする準備を開始して下さい。ただし、文明・文化財は奪取の対象になることがあり、それを所持していると周辺の人にも被害を及ぼす可能性があります。荷物は持たずに、避難して下さい。地区ごとに避難先が決まっています。詳細な避難先はテレビ、インターネットで確認して下さい。原宿の各所に連絡所を設けます。避難に手助けが必要な方は、早めに連絡所に連絡して下さい。」

まりが広報車の音に気が付いて目を覚ました。そして、広報車が言っていることに耳を澄ました。内容をだいたい理解したところで、みんなを起こした。

「みんな起きて。」

「ことこが起きて、おはようの挨拶をする。」

「まりちゃん、おはよう。まだ眠いよー。あれ、外で何か言っている。」

「そうなの、避難の準備の呼びかけみたい。」

さゆみんも目を覚ます。

「おはよう。外が騒がしいわね。何だろう。」

「さゆみん、おはよう。避難の準備の呼びかけみたいです。昼過ぎにスクーパーズが原宿に集合するという話しみたいです。」

「ことこはまだ眠そうに言う。」

「なんだ来るのは昼過ぎか。まだ寝てよう。」

さゆみんがテレビをつけて詳しい情報を得ようとする。まりはことこに諭すように言う。

「避難は早い方がいいわ。後の2人を起こそう。ことこは、みさちゃんをお願い。りと、起きて。りと。」

ことこも、みさの方に行つて、起こそうとする。

「みさちゃん、もう朝だよー。朝じゃないけど。スクーパーズが来るから起きなくっちゃ。」  
りとが起きる。

「ふあー、おはよう、まり。まだ暗いね。ラジオ体操でも行くの?」

「違う。スクーパーズが来るみたいで、避難の指示が出されているみたい。」

「原宿にも来るの。」

「全てのスクーパーズが原宿に集まってくるみたい。」

「原宿が好きなのかな。」

「そんなこと言ってる場合じゃないわよ。逃げる準備をしなくちゃ。」

「逃げるの?」

「アメリカ軍でもかなわないみたいだし。とりあえず、起きて。」

りとは起きて、周りを見てからさゆみんに朝の挨拶をする。

「さゆみん、おはよう。テレビ、さすが。何か言ってますか?」

「私も、今付けたばかりだけれど、スクーパーズが原宿に集まってくるみたい。そして、宇宙に帰って行くって。」

「そうなんだ。」

「でも、多分、大丈夫。」

「なんで。」

「えーと、抵抗しなければ、昨日も大丈夫だったし。」

「それでも、原宿の文化が取られるのはいやだな。もの心がついてからずうっと住んでいた街で、思い出もいっぱいあるし。いい思い出は少ないけど、取られるのはいや。」

まりが口を挟む。

「りと、戦おうとしちゃダメよ。りとはそういうことをしそうで心配だわ。さゆみんもりに何か言つて下さい。」

「りとちゃん、みんなに心配をかけちゃだめよ。少ししたらスクーパーズはいなくなるみたいだから。」

りとが考え込んだ。みさが起きる。

「ことこちゃん、おはようですな。りとちゃん、まりちゃん、さゆみん、おはようですな。まりが、みさに説明する。」

「おはよう、みさちゃん。眠くない?でも、スクーパーズが原宿に来るので、我慢して起きて。逃げる準備をするわよ。でも、来るのは昼過ぎということだから、あわてなくていいわ。」

「逃げるんですな。」

「そうよ。」

「人は攻撃しないので、逃げなくても大丈夫なんですな。」

「そうかもしれないけど、安全のため。」

さゆみんがやはり逃げるように言うが。

「逃げなくても大丈夫な気もするけど、まりちゃんたちは、とりあえず逃げた方が安全だと思う。みさちゃんが残りたかったら、1人で残るのが安全よ。」

りとが少し憤然として言う。

「さゆみん、みさちゃんを見捨てて一人になんてできないよ。」

まりがりと言おう。

「さゆみんは、安全にかかわることなんで、みさちゃんを叱っているだけだと思う。」

「そうね、そうよね。ごめんなさい、さゆみん。みさちゃん、嫌がっても絶対に連れて行くから。」

「ちよっと違うんだけど。わかった、私がみさちゃんと一緒にいる。それが一番いいと思う。」

まりがこれからの行動をさゆみんに相談する。

「さゆみん、これからどうする。」

さゆみんが提案する。

「私は、一度店に戻って、猫ちゃんたちを少し遠くの猫カフェにあずかってもらう。それから戻ってくる。みんなは、まずはご両親に逃げることを連絡して。心配していると思うから。それから朝食を食べて、逃げる準備を言っている。と言っても、ものを持ち出してはいけないようだから、そんなに準備はできないけど。」

まりが言う。

「私は、店の現金が心配だから、銀行に預けてくる。そして、記帳をしてくるわ。」

「さすが、まりちゃん、しっかりしている。それ、私もしなくちゃ。」

りとが尋ねる。

「私は何をしようか。」

まりが答える。

「スクーパーズの絵でも描いていて。何かに使えるかもしれない。」

「わかった。」

さゆみんが注意する。

「その絵は逃げるときに持って行っちゃだめよ。逃げるときに、絵が狙われて巻き込まれる恐れがあるの。彼らは絵が描けないから。」

まりが尋ねる。

「何で、絵が描けないって思うんですか。」

「えっ、あっ。新しいものを生み出せなくて、文化を奪いに来るぐらいだから。自分たちの絵があつたら欲しがるかもしれないと思ったの。」

「そうね、りと、絵はPARKに置いていって。取られたら仕方がないと思いましょ。」

「わかった、みんなを危険にするわけにはいかないから。それに、データはバックアップもでき

るし。本体は置いていくけど。」

さゆみんがここに言う。

「朝食だけれど、冷蔵庫にハムと野菜があるから、パンを焼いて、ハムサンドを食べて。各自、パンにマスタードをぬって、ハムと野菜を挟んで。トマトのサラダもできると思う。」

「大丈夫ー。」

「ごめんね。一度店に戻らなくちゃいけないから、作っている時間がなくて。あと、飲み物は、ミルクティーの材料もあるよ。」

「ありがとう。ミルクティー大好きー。」

りとが、金庫を開けて預ける金額を確認してるまりに話しかける。

「さゆみん、私には言ってくれない。」

「まあ、昨日の玉ねぎの一件を見ていれば。りとは、ここに聞いて、手伝うことがあれば、手伝ってあげて。」

「そうする。」

「じゃあ、私はお金を預けてくる。」

さゆみんが、まりに言う。

「一応、小さなお金じゃないから私も付いていくわ。」

「さゆみん有難う。それじゃ、はじめにさゆみんのお店に寄って、二人で預けに行きましょう。3人は先に食べて。私は戻ってから食べるから。じゃあ行ってくるね。」

「行ってきます。」

そう言い残して、まりとさゆみんが店を出て行った。

りとがここに尋ねる。

「私は何をすればいい？皿を出す？」

「大丈夫、簡単だから私だけで、りとちゃんは、スクーパーズの絵を描いていて。少し落ち込んだりして、みさが話しかける。」

「みさは、りとが描いたスクーパーズの絵をすっごくく見たいんですな。」

「わかった。じゃあ、描くところを見て。えーっと、まず、テレビで昨日の画像を探そう。」  
テレビでは昨日の西安上空の様子を超望遠レンズのカメラで撮影した様子を流していた。りとは、その中で一つのスクーパーズに目を凝らして、ペインタブを使ってスケッチを始めた。そして、色を付けて、西安の空を背景に悠々と飛ぶスクーパーズの絵ができあがった。みさがそれを欲しがった。

「すごいですな。可愛いスクーパーズの絵なんですな。りとちゃんはやっぱり天才なんですな。」

「有難う。ハムサンドも作らせてもらえないけど。印刷するね。」

「いいんですな。ハムサンドは、みさが作り方を覚えて、りとちゃんに作ってあげるんですな。」

「ありがとう。」

りとは、少し自嘲気味にお礼を言ったあと、気を取り直してみさをお願いする。

「その時には、お願いするね。」

「お安い御用ですな。」

「じゃあ、印刷するよ。」

りとは印刷をしてみさに渡した。みさは、それを熱心に見ていた。ことこの準備が終わって、2人を呼ぶ。

「りとちゃん、みさちゃん、朝食の準備ができたよー。」

「じゃあ、みさちゃん朝食を食べようか。」

「はいですな。」

席について、ことが話しかける。

「作り方、わかるかな？いっしょにやろう。」

「はい、ですな。」

「まず、焼けたパンにマスタードをこう縫って。あつ、みさちゃん、マスタードは辛いけど大丈夫かな。」

「大丈夫ですな。」

「じゃあ、少な目に塗ってみて。」

「はいですな。次はりとちゃんですな。」

「えっ、うん。」

りとはテレビのスクーパーズを凝視しながら、マスタードをパンに塗る。

「次に、ハムを載せて、輪切りのトマトを載せて、レタスを載せて、もう一枚のパンで挟んで出上がり。」

「簡単なんですな。」

3人の準備が終わると、いただきますをした。

「いただきます。」「いただきますですな。」

一口、二口食べたみさが言った。

「フレッシュで美味しんですな。マスタードも美味しんですな。もう少し付けると、もっと美味しくなるんですな。」

「辛い物が大丈夫なんだ。ハムも野菜もまだあるから、おかわりが必要だったら、パンを焼くよ。」

「有難うですな。とっても美味しいんですな。」

「ほんと、有難う。」

テレビの方を見て、少しずつ黙々と食べていたりとみさが話しかける。

「りとちゃん、大丈夫ですな？涙を流しているんですな。何かあったんですな。」

「えっ、りとちゃん、大丈夫。」

ことこも心配して、りとちゃんの方をじっと見る。

「大丈夫、テレビを見ながらマスタードを塗ったら、多すぎたみたい。」

「パン交換する？」

「大丈夫。食べる。」

「無理はしない方が。」

「大丈夫。」

そう言っ、りとは、また黙々とパンを食べ始めた。食べ終わった後、お皿を片付けた。そして、片付けも終わった後、りとはおばあちゃんに、ここは両親に連絡した。

「あっ、おばあちゃん。原宿は避難しなくてはいけないみたいだから、もう少ししたら、みんなで避難する。おばあちゃんは大丈夫。」

「りと、何言っているんだい。おばあちゃんが本気になったら、あんなスクーパーズなんて瞬殺だよ。」

「あはっ、そうかもね。」

「それより、みさちゃんをどうするかだね。」

「みさちゃんは、さゆみんが面倒を見てくれるから大丈夫だと思う。みんなも手伝う。」

「さゆみんとみさちゃんかい。それは面白い組み合わせだね。でも、さゆみんならば大丈夫だね。」

「うん、そう思う。」

「それじゃ、避難したらまた連絡してくれるかい。」

「わかった、じゃあ、また。」

ことこの両親はここに家に戻るように言うが、ことこはみんなと一緒にいることを伝えた。

まりが、出発から1時間ぐらいして銀行から帰ってきた。銀行は混んではいたが、まだ朝早かったので、20分ほどで預け入れと記帳が終わった。まりがここに尋ねる。

「何か変わったことはなかった。」

「りとちゃんが、パンにマスタードを付けすぎて、涙を流していたぐらい。」

「あははは。青春に涙はつきものね。」

「みさは今度は、流さなかったんですな。」

「さすが、みさちゃん。同じ間違いはしないわね。あと、準備をここに任せた、さゆみんはさすがだね。」

「もう、いい。まり。」

「そうですな。りとちゃんは、すごく可愛いスクーパーズの絵を完成させたんですな。」

「ほんとね。りとが描くとスクーパーズまで可愛くなるのね。この絵はスクーパーズに狙われるかも。」

ことこがさらに朝食の話をする。

「まりちゃん、パン焼くね。あとは、そろっているよ。先に、ミルクティーでも飲んでいて。」  
「ここ有難う。さゆみんは、猫さんたちを預けなくてはいけなから、まだ時間がかかりそう。  
って、そういえば、ここにも三毛が。三毛はどうしてる。」  
「ここが答える。」

「まだ、寝てるんじゃない。」

「まあ一匹だし、最後一緒に行けばいいか。」

りとがまりに言う。

「そういえば、キャットフードとお皿もあるから、三毛が起きたらそれをあげよう。」

「そうね。缶詰を開けるときはよそ見しちゃだめよ。」

「もう。」

パンが焼き上がり、まりが朝食を取り始める。テレビで、西安の様子を見ていたりとが呟く。

「あんなふうに、原宿のものがなくなっていくのはいやだな。」

それを聞いた、まりが論ず。

「だめよ、戦おうと考えるのは。たくさんの人が死んでいるようだし。それに手段がないわ。  
みさがまりに尋ねる。」

「原宿のものが取られるのが、いやじゃないんですな。」

「それは嫌だけど。やっぱり、安全の方が大事。」

「みさならば、戦うんですな。」

「危ない子供がここにもいたわ。みさちゃんはアメリカ人だから、不正に対して戦おうと考える  
のはわかるけど、そのアメリカで一番たくさんの人が死んでいるみたいだし。宇宙人相手じゃ、  
戦う方法がないわ。」

「戦う方法ですな。」

その時である。入口の扉がノックされた。まりが様子を見に行く。

「誰だろう。さゆみんにしてはまだ早いし。避難の呼びかけかな。」

まりは考えながら扉を開いた。前には誰もいなかった。

「あれ、誰もいない。」

その時、下の方から声が出た。

「ここでごぎいます。」

まりが下を見ると、エビの天ぶらの置物が落ちていた。

「あれ、昨日隣の屋根にあった置物が落ちてきたのかな。風は強くないのに。届けないといけな  
いかな。でも、今は避難優先で、戻ってからにしよう。それにしても、声はこれから出ているの  
かな。」

「ここでごぎいます。」

「あつ、またしゃべった。お店の案内をするためかな。」



そわいなながら、扉を閉めようとしたとき、エビの天ぶらの置物がまたしゃべる。

「待ってください。私はエビふりヤーと申します。お話があります。」

「またしゃべった。会話ができるのかな。」

「まりはとりあえず話しかけてみることにした。」

「何でしょうか、エビフライさん。」

「りとも扉までやってきた。」

「エビフライではありませんで、エビふりヤーと申します。」

「りとも見たままを言う。」

「エビふりヤーというより、エビの天ぶらよね。何かPARKにご用でしょうか、エビ天さん。」

「エビ天さん！？どんだん離れていってしまうようでございますね。エビふりヤーでございます。」

「エビ天なのに、エビふりヤーと名乗るの？」

「私の名前は、もともとエビふりヤーでございます。」

「でも、この衣だとエビ天よ。パン粉が入っていないさそうだし。虚偽広告で捕まっちゃうよ。名前をエビ天に変えよう。エビ天さん。」

「エビふりヤーがまりの方を見て話しかける。」

「この方は、何なんぞございましょうか。」

「ごめんなさいね、頑固で。」

「りとも話しかける。」

「りと、本人がエビふりヤーと言っているんだから、それで話を進めましょう。」

「良くないよ。これをエビフライと認めてしまったら、フライと天ぶらの境界がなくなってしまうよ。アジの天ぶらとかたべたいの？」

「それは食べてみないとわからないけれど、固有名詞みたいだし。ゴルフクラブに金属ウッドとかカーボンアイアンとか矛盾したものはいっぱいあるでしょう。とりあえず、話を進めましょう。エビふりヤーさん、ご用件は何でしょうか。」

「大変申し訳ないのですが、助けて頂きたいのです。」

「何からですか。」

「スクーパーズからです。スクーパーズから追われているのです。中に入れて頂くわけにはいきませんでしょうか。」

「りとも簡単に返事をする。」

「いいわよ。」

「まりが驚いて話しかける。」

「ちよっとりと、何だか分からないものを。」

「人工知能ロボットかな。困っていると喋っているし、話を聞いてみようよ。」

「りとは、相変わらず無鉄砲なんだから。あまり危険がありそうには見えないけど。」

そう言って、二人はエビの天ぶらの置物を部屋に招き入れた。エビふりゃーは跳ねながら、部屋に入ってきた。ところが喜んで言った。

「すごい。跳ねて動けるんだ、このロボット。」

そして、近くでまじまじとエビの天ぶらの置物を見始めた。

「そんなに、見つめられると恥ずかしいでございます。」

「すごい、しゃべった。中、どんなふうになっているんだろう。」

まりが、エビふりゃーに話しかける。

「それで、エビふりゃーさん、お話ってなんですか。」

「はい、まず、私はエビフライ星から来たエビふりゃーと申すものでございます。」

3人も自己紹介する。

「私は、まりといます。」「私は、りと。近くで見てもエビの天ぶらだけど。」「私は、銀河系オリオン腕太陽系第3惑星地球のことです。」

「2年前まで、エビフライ星は平和な惑星だったのですが、スクーパーズがやって来て、文明を採取するときに、一緒に捕まってしまうました。宇宙船が地球に着いたときに隙を見て抜け出して来ました。」

ところが興味深そうに言う。

「宇宙人なの？」

「はい、地球の言葉で言えばそういうことになると思うでございます。」  
まりが質問する。

「普通ならば、宇宙人なんて信じないけれど、スクーパーズが来ている以上、信じないわけにはいかないわね。でも、スクーパーズは、その星に住んでいる人に危害を与えないと言っているけど。」

「はい。ほとんど危害は与えないのですが、各星から2〜3人程度連れて行っているのでございます。そのくらいの数ならば、連れていかれても分からないと思うでございますよ。」

「そうね、たくさんの方が死んでいるし。そのぐらいの人数だと、行方不明と言うことで分からないかもね。」

りどが質問する。

「でも、それじゃ、地球人も2〜3人連れていかれるかもしれないということ。」

「はい、そうでございます。最終集結地点の原宿から連れていかれる可能性が高いでございます。もしかすると、あなた様方も知れないでございます。」

ところが驚いて言う。

「えー、宇宙に連れて行かれちゃうの。でもちょっと面白そう。」

まりが、ここを諭す。

「宇宙に連れていかれたら、地球には戻れなくなるのよ。面白いなんて言っちゃだめ。原宿にはすごい人がいっぱいいるので、私たちである可能性は低いけど、安全のために、遠くに逃げた方がいいかしら。」

「狙われたら逃げても無駄でございます。」

「それもそうね。でも私たちなんかより、もっと才能がある人を連れて行きそう。」  
りとは違った反応を示す。

「ものばかりでなく、人をさらっていくなんて、絶対許せない。原宿には知ってる人も多いし。」

「でも、逃げる以外にどうしろって言うの。アメリカ軍でも敵わないのに。」

「それでも、人をさらっていくのは、絶対に許せない。」

「警察の人に言ってみるのはいいけれど。あまり役立ちそうもないし。」

そこで、エビふりヤーがある提案を行う。

「戦う方法ならばあるでございます。ここに、アマツマラがあるでございます。」

そう言って、箱の中の可愛い石がついている、2つのブレスレット、ペンダント、指輪を見せる。それを見たまりが訝しげに言う。

「アマツマラ？なんか怪しそうな感じね。」

りとは質問する。

「それは何をするものなの。どうやって使うの。」

「はい、アマツマラは、考えたことを情報化・コード列化してアマツマラ内部に取り込みます。アマツマラでは、コード列の各々のコードに対して、物理空間への単純な作用が決まっています。コードの集まりであるコード列を作用させることによって、物理空間に複雑な変化を及ぼすことを可能にするものがございます。」

「うーん、難しいな。」

ことが分かったように言う。

「それ、おばあちゃんの小説にあった、サイコロ3次元プリンタと同じ原理みたい。簡単に言うと、想像を現実のものに変えてくれる装置かな。」

まりが感心して言う。

「さすが、ことこね。」

エビふりヤーも同意する。

「その通りでございます。そのおばあちゃんとやらは、すごい人のようでございますね。」

「おばあちゃんと言っても、りとおばあちゃんだけね。」

「そうでございますか。り様のおばあちゃんは大変聡明な方なのでございましょう。このアマツマラがあれば、想像力だけで自分を変えたり、武器を作ったりすることができるでございませう。想像力、精神力しだいどのような敵でも撃退が可能です。」「  
りとは早速使ってみようとする。」

「じゃあ、ちょっと使ってみるね。イメージは、そう、ゲームで作ったキャラかな。まりが止める。」

「りと、やめなさいよ。そんなわけのわかんないの。」

りとはそれを無視して、使おうとする。

「どうやって使えばいいの。」

「アマツマラを持って、イメージするのでございます。そして、そのイメージを具現化するきっかけになるような言葉を言って下さいでございます。そうすれば、考えをコード化したものがアマツマラに伝わり、アマツマラが起動するでございます。」

りとは、箱のブレスレットのアマツマラの1つを取り出して、左腕にはめて言う。

「わかった。強くイメージする。そして、起動の言葉ね。」

りとは自分の姿を想像した後、次の呪文を唱える。

「Our Creation! Changed by PARK.」

アマツマラが光り輝き、りとはそのシルエットが見えるだけになった。エビふりヤーが独り言を言う。

「おー、りと様、すごいです。すごいです。アマツマラ起動時の光がけた違いでございます。創造に向けた心の強さが段違いなのでございましょう。りと様は、私たちが探し求めていた方かもしれないでございます……それを一度で見つけるとは、さすがは姫様なのでございましょうか。」

まりは心配して、声をかける。

「りとー!りと!大丈夫?りと!」

ことこは、ただ見ているだけだった。輝きがおさまった。りとは、腕に先のとがった棒のようなものを持っていた。棒の根元には細いホースが付いていて、ホースの先にはタンクのようなものがついていた。片眼は情報を表示できるメガネ(モノアイディスプレイ)に覆われ、ボードの上に乗って空中に浮かんでいた。そして、服装も変わっていた。まりがもう一度尋ねる。

「りと、大丈夫?」

「うん、大丈夫。すごい、飛ぶことができる。」

そう言って、りとはPARKの部屋の中を浮かんでゆっくりと動いていた。それを見て、ことこが驚く。

「すごい、飛べるんだ。」

ことこも、ペンダントのアマツマラを首から下げる。まりはやはりここを止める。

「やめなさいよ、ことこも。」

「まりちゃん大丈夫。ちょっと、やってみる。Our Otaku! Changed by PARK.」

アマツマラが光りだし、ことこもシルエットだけになった。エビふりヤーは、嬉しさと悲しさが

入り混じった声でつぶやく。

「ここ様は、高い知性を感じる光でございます。さすがです。姫様は素晴らしい方たちを見つけてしまったんでございますね。」

「ここも、空中に浮いていた。片眼は、りとと同じモノアイディスプレイで覆われていた。そして、手にはタブレットを持っていた。情報収集、解析、表示が可能で、こここの判断の助けることができるものだった。そして、その情報はりとと共有することもできる。そればかりでなく、ここがアマツマラで生み出したものを、このタブレットから操作することもできる。護身用の武器としては大きくない弓を背負っていた。(著者注：弓はオリジナル設定です。やはり魔法少女は弓です。)ここは喜びながらなりに話しかける。

「すごい、飛べるよ。面白い。まりちゃんもやってみようよ。」

「私はいいわよ。それより、りと、店の中で、あんまり飛び回るんじゃないわよ。ぶつかったら危ないわ。」

「平気。それより、だいぶ慣れてきた。外で飛んでみようか。」

「やめなさいよ。宇宙人と思われるわよ。」

「それもそうか。残念。」

まりがエビふりヤーに尋ねる。

「でも、なんでエビふりヤーさんは、アマツマラを使わないの。」

「はい、我々も使いたいのですが、我々ではアマツマラが起動しないでございます。アマツマラを起動するためには、高度なオリジナルの創造力と強い精神力が必要となるのでございます。」

「そうなの。」

「りと様の精神力と創造性は類まれなものでございます。それはあの白い強力な光からもわかるでございます。ここ様の知性から生み出される創造性もなかなかのものでございます。アマツマラがあっさりとして強力に起動してしまいましたでございます。」

静かにしていた、みさが言う。

「りとちゃんの、創造力と意思の強さは、宇宙一かもしれないですな。みさはそう思ったんですな。」

「さすがはみさ様でございます。まり様もお試しになってみてはいかがでございますか。」

「私はいいわ。それより、避難の準備をしましょう。りと、ここ、降りてきて。」

「了解。」

「わかった。」

そう言いながら2人が降りてきた。りとが原宿を守ることを提案する。

「これがあつたら、原宿を守るかも。」

「りと、何を言っているの。ゲームじゃないんだから。もう、何万人も死んでいるのよ。ばかなことはやめなさい。エビふりヤーさん、変身はどうやったら解除できるの?」

「何か言葉を叫んで、変身解除を願えば解除されるでございます。」

「エビふりやーさん、ありがとう。」

「エビふりやーで構いません。」

「そう、ありがとう、エビふりやー。2人とも、なんて唱える。」

りどが答える。

「なんて唱えようか。普通の格好にもどるとすると、さあ仕事仕事。かな。」

「なにそれ、私のPARKでの口癖みたい、でも、それがいいかも。じゃあ、2人で唱えて。」

「さあ、仕事仕事。」

二人が唱えると、また光と共に変身が解除されて、もとの姿に戻った。自分を確認したことが感想を述べる。

「もどったー。面白かったー。」

エビふりやーが3人に話しかける。

「どうです、これで原宿を守ることができでございます。」

りどは原宿を守ることを本気で考えているようだった。

「そうね、原宿は守りたい。原宿の人が連れて行かれるのは許せない。とりあえず、これを持っていい？」

「はい、ご自由にお使いくださいでございます。」

まりは、再度やめるように注意する。

「りと、命が一番大切だから、危ないことは止めてね。」

「大丈夫、原宿を守るとしても、私だけでやる。みんなには迷惑をかけない。でも今は、みさちゃんもいるし、避難の準備をしよう。」

「そうよね、みさちゃんは避難させないと。ことかも、避難の準備するわよ。」

「うん。」

ことかも、ぼんやりと、りどが戦うならば、一緒の方が良いと考えていた。3人は、着替えと普通の食べ物と飲み物をバックに入れた。りどはコンピュータに保存した絵のデータを、ネットとUSBメモリーにコピーした。そのUSBメモリーと、いつも使っているペンを持っていくことにした。まりは一番のお気に入りのお服を着て避難することにした。ことこは、タブレットを持って行くかどうか迷っていた。まりが、ここに聞いた。

「避難場所の指示が出ている？」

ことこがタブレットを使って調べる。

「あった、六本木の東京ミッドタウンみたい。どうやって行く？  
まりが移動手段を考える。

「無料のバスも往復しているらしいけれど、歩いて行こうか。」  
りども賛成する。

「そうだね。じゃあ、さゆみんがもどってきたら、避難することにしよう。」

「それまで、待機ね。」

時間を持って余したまりが、箱から指輪のアマツマラを取り出して、指にはめてみる。

「ピッタリ。それにしても、ユニークなデザインね。指輪としては気に入ったわ。」

まりもアマツマラに興味がないわけではなかった。そして、りとがどんなに止めても原宿に残りスクーパーズと戦うならば、自分も原宿に残って戦うしかないかと考えていた。ただ、今は、みさとことを避難させないといけないと考えた。そして、エビふりやりの移動を心配した。

「エビふりやりはどうする。私たちと逃げる？」

「私は、みさ様と一緒にいようと思いますでございます。」

「何！ 幼女趣味なの？ 困った宇宙人だこと。」

「そうではありません。みさ様をお守りしようかと思うのでございます。」

「そうなんだ。宇宙人でもそう考えるのね。」

「はい、その通りでございます。」

「ここがエビふりやりに尋ねる。」

「エビふりやーさん、移動はどうしようか。そのまま動いて、見つかったら、解剖されちゃうかもしれないよー。」

「まりが、ここを少しからかう。」

「ここが解剖したいんじゃない。」

「さすがに、会話できる宇宙人を解剖はできないよー。」

驚いた顔をしていたエビふりやーが安心して言う。

「それは安心でございます。移動ならば心配ございません。」

「そういって、みさの首に巻きついた。」

「これで、みさ様をお守りすることができますでございます。」

「ここがみさに尋ねる。」

「みさちゃんは、大丈夫？ 重くない？」

「大丈夫ですな。襟巻と同じですな。」

りとは、スクーパーズの絵をまた1枚描き終わって印刷した。

「はい、みさちゃん、またスクーパーズの絵。今度は、西安の空を隊列を組んで飛んでいるスクーパーズ。」

「わっ、また可愛いんですな。」

「ここも感心し感想を述べる。」

「そうね、飛んでるだけなら可愛いかも。」

エビふりやーも感心しながら言う。

「すごいです。スクーパーズの分隊らしさが伝わってくるでございます。」

「ほんと？二人とも有難う。じゃあ、次は二人の絵も描くね。すこしポーズを付けてみて。」  
「はいでございます。」

そう言っつて、少しすました顔をしするエビふりやーに対して、みさは相手としては不満そうだった。

「エビふりやーといっしょは少し悲しいですな。」

「みさ様、ご無体な。」

「でも、りとちゃんの絵には期待できるんですな。」

それでも、りとの絵は楽しみにしているようだった。

そうこうしているうちに、さゆみんが戻ってきた。まりが声をかける。

「おかえりなさい、さゆみん。」

「まりちゃん、ただいま。」

他のみんなも、さゆみんを迎え、さゆみんもそれに答える。さゆみんが避難を開始することを促す。

「避難場所は、六本木なんだつて。少し遠いけれど歩いて行くわよ。三毛も連れて行かなくっちゃいけないけど、私が持っていくわ。」

まりもみんなに声をかける。

「それじゃあ、出発するわよ。準備はいい。大きな荷物は持っていけないから、大した準備もなかったけれど。」

りとが答える。

「データはバックアップしたし、準備完了。置いてくコンピュータにもデータが入っているから大丈夫だと思う。ペンタブも置いていく。スクーパーズが去って、戻ったら液タブになつてると、ないか。」

「スクーパーズさん、手がないようだし、ないんじゃない。」

「そうか、残念。ことも準備大丈夫？」

「うん。タブレット、置いて行った方がいいのかな。すぐく持っていききたいけど。」

「分かるけど。やっぱり置いていきましよう。」

「ことごと取られたら、大変。」

「わかった。」

さゆみんが笑いながら言う。

「まりちゃん、2人の保護者みたいね。」

「そういうわけじゃないんだけど。それぞれの役割みたいな個性かな。」

「そうよね。」

少し笑っていたが、次に真面目な顔をして、みさとエビふりやーの方を見ながら言う。



「みさちゃんは、エビふりヤーさんがいるから安心よね。」

「はい、お任せあれでございます。」

そして、さゆみんは、3人に向けて自分の安全を最優先するように言う。

「みさちゃんにはエビふりヤーさんが付いているので、みさちゃんのこと考えずに、自分達の安全を考えてね。」

りとが不安そうに言う。

「でも、エビふりヤーで大丈夫かな。」

「なんですと。全然大丈夫です。このエビふりヤー、例え全人類がかかって来たって跳ね返してご覧にいきます。」

「すごい自信。」

「はい。」

でも、みさはエビふりヤーに目配せしながら別のことを言う。

「でも、エビふりヤーだけじゃ心配ですな。りとちゃんの方が安心ですな。」

「なんですと。」

エビふりヤーは不満げだったが、りとは普通に答える。

「だったら、私が守ってあげるね。」

「本当ですな、ありがとうございます。」

さゆみんは、なんとなくいい予感がしなかったが、とりあえず避難することにした。

「それじゃ、出発。」

みんながOKの返事をして、出発した。まりは、さゆみんがエビふりヤーのことを知っているのを少し不思議に思ったが、ことが話したのかなと思ってあまり気にしなかった。そして、鍵の話をする。

「鍵はかけちゃいけないですよね。」

さゆみんが答える。

「そう。うちのお店も鍵をかけてないわ。今ならクレープ食べ放題。自分で焼かなくてはいけません。」

5人と1尾と1匹が出発した。道は六本木に向かう人で少し混んでいたが、休日の原宿に比べれば大したことはなかった。避難の途中、まりとさゆみんがクレープについて話す。

「クレープの皮は薄いから、上手に焼くのが難しそうですね。」

「まりちゃんならばすぐにコツをつかむわよ。よかったら教えてあげる。」

「有難うございます。ことごと一緒に習おうかな。でも、ことこのスイーツも独創的だから、普通のクレープは作らなそうだけれど。まあ、りとよりは安心かな。」

「そうなの。でも、独創的なのは楽しみよ。新しいクレープのヒントになるかもしれないし。」

「さゆみんも、ポジティブですね。」

「ラフォーレ原宿のランウェイを歩くまりちゃんも、ネガティブではないわよ。」

「そうですね。好きなことには、ポジティブかも。」

まりが、ことこの方を向く。

「ここ、さゆみんがクレープの皮の焼き方、教えてくれるって。」

「ほんと？、うれしい。新しいスイーツの材料になりそう。和風でまとめようかな。」

さゆみんが感心して尋ねる。

「和風？どんな感じなの。」

「餡とか、蜜とか、葛とか、きな粉とかと合わせる感じ？まだ、わかんない。作ってみないと。」

「へー、面白そうね。和風のクレープの発想はなかったわ。私にも手伝わせてね。」

「もちろんだよー。楽しみ。」

みさと原宿の道の両側の建物について話していたり話が話に加わる。

「さゆみん、私にもクレープの皮の焼き方教えてくれる。頑張るから。」

「えっ、うーん、そうね、やってみようか。」

まりが口を挟む。

「さゆみん、無理そうという顔をしている。」

「してないわよ。簡単なことから始めた方がいいかな、と思っただけ。パンケーキとか。」

「やっぱり、クレープは無理と思っている。」

「パンケーキを焼けるようになったら、次にはクレープに進むわよ。」

りどが答える。

「パンケーキでも嬉しい。パンケーキに絵を描いて焼こうと思っている。」

「あー、あるある。パンケーキの焼けたところが絵になるやつね。そうか、それは面白そう。クレープでできたら、本当に面白いかも。」

「だよね。とりあえず、パンケーキで頑張る。」

「そうね。スクーパーズが帰って行ったら、さっそくやりましょう。また楽しみができた。ありがとうね。」

「そうね。スクーパーズが帰って行ったら、さっそくやりましょう。また楽しみができた。ありがとうね。」

がとうね。」

「分かった、がんばる。」

まりが言う。

「こっちが教えてもらうんだから、お礼を言うのはこちらです。ありがとうございます。」

「そうでした。さゆみん、ありがとう。」

「さゆみん、ありがとー。」

「どういたしまして。みんなで、独創的なクレープやパンケーキを作ろうね。」

「はい。」

みさが、興味を持ってお願いする。

「みさもお手伝いするすな。」

りと答える。

「ありがとう、みさちゃん。そのときはお願いするね。」

「わかったですな。」

六本木につくと、名前などで所在などを登録するところが用意されていた。日本人は住所、氏名、生年月日で、海外の人は、パスポート番号、氏名、生年月日で登録を行った。係の人が説明する。

「再度、移動することもありますので、情報には注意してください。六本木から離れるときは、必ずこちらに連絡して下さい。ただ、現在一般の交通は止まっていますので、動かない方が良いと思います。外国の例から考えて、今日の午後にはスクーパーズの活動が原宿を除いて終わると思いますので、夜には原宿周辺以外の交通機関が動き出すと思います。」

まりとさゆみんが熱心に聞いていた。りとが係の人に尋ねる。

「原宿の他の人が来ているか確認できますか。おばあちゃんなんですが。」

「住所と名前がわかりますか。」

「はい。須藤三羽子といます。住所は、神宮前3丁目です。」

「えーと、まだ、登録されていないようです。日本のどこかで登録すれば衛星回線につながっていますので、すぐわかります。もう少ししたらまた来てみて下さい。」

「ありがとう。」

「向こうで、炊き出しもありますので、お昼を召し上がって下さい。」

さゆみんとまりがお礼をいう。

「いろいろと有難うございます。」「有難うございます。」

りとがおばあちゃんと連絡できないことを、みんなに伝える。

「おばあちゃん、さつきから電話がつかないの。メールも返事が来ないし。」

まりが心配そうに答える。

「災害時は電話が使えないから。」

「メールは送れているようだけれど、返事が来ない。電池がなくなっちゃったのかな。」

「そうなの。うーん。」

りととまりが考え込むのを見て、ことごとを励ます。

「もしかすると、おばあちゃん、宇宙人が来て、ワクワクで孫も忘れて高いところから観察しているのかも。」

「あっ、それ本当にあるかもしれない。えー、おばあちゃん。」

それを聞いたまりがりとに言う。

「とりあえず、おばあちゃん、子供じゃないし、歩けない距離でもないの、もう少し待ちましよう。」

「うん、おばあちゃんなら、避難所まで余裕で走れる距離だけ。」

「おー、さすがはりとのおばあちゃん。」

「でも、宇宙人で興奮して、血圧が上がって倒れていないといいけど。見てこようかな。」

「うーん、まだ少し時間はあるけれど、戻らない方が絶対にいいわよ。」

さゆみんも言う。

「係の人に言っつて、家を確認してもらおうようにお願いしてみる。」

「うん、有難う。」

そう言っつて、さゆみんが係の人に事情を告げる。まりが言う。

「やはり、さゆみん頼りになる。」

「まりの言う通り。」

さゆみんが戻ってきた。

「家を確認してくれるっつて。助かった。カレーの炊き出しがあるみたいだから食べようか。何かあったときのためにも食べておいた方がいいと思う。」

「わかった。そうする。」

「そうね、それがいいわね。」

ところが、みさに問いかける。

「またカレーでごめんね。でも、味が違うかもしれないよー。」

「カレー、美味しかったから、楽しみなんですな。」

「エビふりゃーはカレー食べれる？」

「はい、地球の食べ物を食べてみたいでございます。」

「じゃあ、見えないところで、こっそりと食べよう。」

「ことこ様、お気遣いありがとうございます。」

さゆみん、りと、ところがカレー6人前を取りに行った。廊下などに臨時の机と椅子が並べられていて、まり、みさ、三毛が席の場所取りをする。まりは、エビふりゃーのために外からは柱の陰になって見えにくい一番端の方の席を確保した。カレー班は、帰る途中に伝言板を見つけた。さゆみんが何かあったときには、ここに書くことに決めた。カレーを持った3人が到着して席に座った。さゆみんは持ってきたキャットフードを開けて、三毛にあげた。三毛は不愛想に食べ始めた。その後、みんなでいただきますをした。

「いただきますーす。」「いただきますすすな。」「いただきますでございませす。」

さゆみんがみんなに話しかける。

「家庭用カレーと違っつて、これも美味しい。隠し味はなんだろうね。」

まりが答える。

「うーん、何だろう、難しいです。でも、さゆみん、さゆみんは、もしかするとカレークレープの構想をねっつてるんじゃないですか。」

「えっ、わかる。」

「えっ、本当なんですか。冗談のつもりだったのに。」

「そう、クレープの皮をカレー味にするか、かなり甘口のカレーをクレープの中に入れるか。ジャガイモはいっぱいあった方がいい気がする。」

「なるほど。」

りとがさゆみんに意見を言う。

「やっばり、ご飯はあった方がいいと思う。」

「えっ、クレープにお米を入れるの？りとちゃんの独創性にはかなわないわ。」

「えー、カレーにお米、合うじゃないですか。」

「そうかもしれないけど。クレープにお米。わかった、試してみるね。」

「有難うございます。」

まりは二人にはついて行けないという感じで言う。

「うーん。りとが食べた後で、食べてみたいな。」

「そう？絶対に美味しいと思うよ。カレーライスクレープ。」

「カレークレープじゃなくて、カレーライスクレープ。」

それを聞いた4人が笑いながら言う。

「カレーライスクレープ。」

りとが少し不満げに聞く。

「そんなにおかしい？」

まりが答える。

「いや、意外と美味しいかもしれない。ところで、みさちゃんどう。昨日のカレーより少し辛目

だけ大丈夫。」

「大丈夫ですな。ちょっと、ピリリとして、美味しいんですな。」

「自衛隊の人が、玉ねぎを剥くときにいっぱい涙を流した隠し味なのかもね。」

りとが答える。

「やめてよ。一生言われそう。」

「そうかも。」

「もう。」

まりが、エビふりヤーにも尋ねる。エビふりヤーは尾でスプーンを上手に持って食べていた。

「どう、エビふりヤー、地球の食事の味は。」

「始めて食べる味でございます。スクーパーズ星にない味ですが、とっても美味しいでございます。」

「スクーパーズ星、あっそうか、スクーパーズ星にも長かったんですね。エビフライ星の食事と比べてはどうです。」

「あっ、えっ、エビフライ星の食事より全然美味しいです。エビフライ星では、虫のようなもの

しか食べません。」

「うーん、まあ、確かに、尾だけで料理をするのは大変そう。」

「そうでございます。地球にはいろいろな料理があるそうで、楽しみでございます。」

「わかったわ、スクーパーズが去ったら、いろんな料理を食べさせてあげる。」

「有難うございます。まりさんは優しくいらっしやいますでございます。」

「そんなにいい人ではないわよ。ただ、スクーパーズが去った後、PARKのマスコットになってもらえれば、商売繁盛と思つて。」

「さようでございますか。そんなことならば、ぜひ協力させて頂きますでございます。」

「ありがとう、エビふりやー。これで、PARKはますます発展しそう。」

「ことども嬉しそうである。」

「エビふりやー、ずうつとPARKに居てくれるんだ。宇宙の話聞かせてくれる。」

「はい、天の川銀河の話ならば何でも話すことができますよ。」

「わかった。ことども、エビふりやーさんにスイーツをいっぱい作るね。」

「有難うございます。」

りとも宇宙には興味がある。」

「私も宇宙の話聞きたいな。絵の参考になりそう。」

「その前に、りと、エビふりやーをモチーフにした、PARKのロゴを作ってくれる。エビフライ星人入店セールを開催したいわ。」

「わかった。エビふりやーがPの字の格好をしている絵で描いてみる。」

「スクーパーズと違って、人間と友好的な宇宙人の感じを出してね。」

「うーん、さつきみたいに女の子の襟巻とか。後は、ベルトを付けて、バックみたいな感じもいかもしれない。でも、躍動感もあった方がいいかな。わかった、いろいろ描いてみる。」

さゆみんは少し心配してりとに話しかける。

「でも、PARKに宇宙人がいるとなると、すごい騒ぎになりそうだけど。」

「スクーパーズじゃないから大丈夫だと思う。スクーパーズに誘拐されたわけだし。騒ぎにはなるかもしれないけど、一時じゃないかな。」

「うーん。そうかな。でも、今から心配しても仕方がないか。」

「まりも同意する。」

「だぶん大丈夫ですよ。」

「ことども同意する。」

「みんな宇宙人がいると知っちゃったから、大丈夫だよー」

六本木で救援活動にあたっている自衛隊施設大隊の警備部隊は、監視カメラのテレビ映像を見ていたが、大隊長を呼び出した。到着した大隊長にカメラ画像を見るように言う。

「大隊長これを見てください。」

「うん？若い女性がカレーを。なんだこれは。エビの天ぷらか。エビの天ぷらがカレーを食べているのか。」

「はい、そのように見えます。」

「これは宇宙人と言うことか。本隊から、スクーパーズが紛れているかもしれないから、発見しても刺激するなど命令されてはいるが。」

「6人の会話を高感度マイクで聴いたところ、スクーパーズではなく、エビフライ星のエビふりやーと名乗っているようです。」

「ふぎけた名前だな。さて、人間にわかりやすいように名前を翻訳しているのかもしれない。しかし、エビフライとエビの天ぷらを間違えているな。間抜けな宇宙人だ。それとも、間抜けなふりをしているのか。ところで、そばにいる若い女性は？」

「はい、先ほど登録した内容によると、鈴木彩友美、須藤りと、白子まり、綿紬ことこ、丸野みさです。登録した内容は住民票とパスポートの内容と一致しています。鈴木は原宿のクレープ、猫カフェの店Angelyの店員。須藤、白子、綿紬は原宿のオタク系のショップPARKのアルバイト店員で、これもほぼ確認が取れています。丸野みさはアメリカからの旅行者との申告です。パスポートに異常はありませんでした。5人とも人間である可能性が高いです。」

「エビフライ星人だが、肉眼では人間に見えているという可能性は。」

「その可能性は低いと思います。百メートルぐらい離れたところから確認しましたが、エビの天ぷらがカレーを食べているように見えるということです。また、ビデオを確認したところ、丸野みさの襟巻のような形で移動していたとのことです。」

「そうか。幼女好きの宇宙人か。見たところ、あまり悪そうな感じはしないな。」

「はい、5人と普通におしゃべりをしながら、カレーを食べています。我が部隊が作ったカレーを美味しいと言っています。」

「なるほど。我が隊のカレーを美味しいというやつに悪い人はいないからな。」

「人ではありませんが、その通りです。とりあえず、提供したカレーがエビフライカレーでなくてよかったです。」

「そうだな。さて、どうするか。エビふりやーとやらに、積極的に接触して良いか、私では判断できない。本部と連絡を取ってくる。戻ってくるまで、できるだけ気づかれないように情報を集めていてくれ。」

「分かりました。」

大隊長は連隊長に連絡をとった。ただ、連隊長も独自に決められる案件ではないため、師団長、幕僚長、国家安全保障会議と順番に上部組織に連絡していった。そのため、判断には時間がかかりそうだった。

国家安全保障会議では、朝から始まったスクーパーズによる奪取の分析に追われていた。首相

が尋ねる。

「調査室長、状況はどうですか。」

「はい、日本の各所で奪取が始まっています。幸いといいますが、人的な被害は出ていませんので、幸いという言葉を使いますが、避難は順調に終わったようで、転倒したなど以外の人が今のところ報告されていません。」

「そうですか。転倒した人の手当てはできていますか。」

「はい、病院に搬送するなどしているようです。」

「そうですね、対応はできているということですね、文化財の方はどうなっていますか。」

「文化財に関しては、通告のあったものは、見逃すことなく、奪取されているようです。狙いは正確で、2次被害のようなものは確認されていません。場所としては、日本の周辺から始まって、だんだん東京へ向かってきている感じですよ。」

「東京の避難状況は。」

「はい、ほぼ終わっていますが、原宿に関しては、現在、警察、消防、自衛隊で各戸を回って、確認を急いでいます。ですが、それよりも見て頂きたいものがあります。」

「なんでしょうか。」

「まずは、自衛隊から送られてきたビデオをご覧ください。場所は六本木の地下で、原宿からの避難民が休憩しているところです。ビデオをスタートして下さい。」

スクリーンに映像が写され、音声が流れ始め、全員が注目する。

「若い女性と一緒に、エビの天ぷらがカレーを食べているように見えますが。」

「はい、本人と言ってよいでしょうか。本人は、エビフライ星のエビふりやーと名乗っているそうです。」

「エビフライと言うより、エビの天ぷらのようですが。それは今はいいとして、スクーパーズという宇宙人がいることが証明されたので、他に宇宙人がいてもおかしくはないですが、周辺の人間に危害を及ぼすことはなさそうですか。」

「現在のところ、その様子はありません。監視は続けていますが、情報を得るためにはそれだけでは不十分で、積極的に話しかけるかどうか、現場では迷っているようです。首相のご決断をお願いしたいということです。」

「周りの若い女性は、人間なのですか。」

「はい、それは確認済みです。エビフライ星人は彼女たちに宇宙の話聞かせたりしているようです。」

「エビフライ星人は地球にナンパしに来たのでしょうか。」

笑い声が聞こえる。

「女性の方たちは、エビフライ星人をおかしいとは思わないのでしょうか。」

「はい、なじんでいるようです。原宿の女性ですから、変わったものへの耐性が高いでしょう。」



また、笑い声が聞こえた。

「そういうものですか。私には理解しがたいです。」

「それで総理、どのように対処しましょう。」

「とりあえず、監視を続けましょう。スクーパーズが去った後でも残っているようでしたら、私から話しかけてみます。六本木で他の避難者がエビフライ星人に気が付いても、広めることのないように対処することを指示して下さい。SFだと未知の病原菌に注意したりするところですが、恒星間を渡って来るぐらいの科学力を持っていますので、そのような心配は無用だと思います。」

「わかりました。」

「エビフライ星人、友好的な宇宙人だと良いのですか。」

午前11時を回ったころ、東京上空にもスクーパーズが現れ始めた。採取を行うものもいたが、ほとんどのスクーパーズが渋谷上空で待機していた。六本木からはビルなどに阻まれて、直接見ることはできなかったが、避難した住民もワングセグやモニターを通してその様子を見ていた。まりがみんなに話しかける。

「スクーパーズが渋谷上空に集まってきているみたい。」

りとがスクーパーズの行動を推測してみる。

「渋谷から原宿に行進するのかな。」

さゆみんが落ち着くようにみんなに言う。

「そうかもしれない。ただ、おとなしくしていれば大丈夫だと思う。」

そう言いながら、みさの方を見る。

「大丈夫ですな。」

りとは大丈夫とは思っているが、おばあちゃんのことかどうしても気になる。

「おばあちゃんがどこにいるか確認してくるね。待ってて。」

まりが答える。

「わかった。待ってる。でも、家を見に行っちゃだめよ。」

「わかってるって。」

まりは見送りながら、心配そうに言う。

「ほんと、大丈夫かな。」

自衛隊が開設している案内所に到着したりとが、女性隊員に尋ねる。

「あの、所在を確認したい人がいるのですが。」

「須藤さん、おばあちゃんの所在ですね。」

「えっ、なんでわかるの。」

「えっ、あつ。えーと、担当は別ですが、さきほどいらっしやいましたし。はい、自衛隊の情報

力をなめないで下さい。」

「そうですか。本当にすごいです。それで、おばあちゃんの所在が分かりましたでしょうか。」  
「ごめんなさい。それが今も探しているのですが、まだ分からない状況なんです。隊員が家まで行って確認したのですが、扉には鍵がかかっていて、電灯は消えていました。そして、声をかけても応答がなく、誰もいないようだとの情報が入っています。」

「そうですか。家に行って確認してくれたのですか。」

「どこかの案内所で登録してもらえれば、すぐに連絡する体制は整っています。そのとき、スピーカーで須藤さん呼び出すようにします。病院などに来た方も把握していますので、六本木で待っていて下さい。」

「分かりました。いろいろ有難うございます。」

そう言って、りとは案内所から離れた。

「もう、おばあちゃんは！やっぱり、どこか渋谷の近くでスクーパーズを見ているのかな。」  
りとは案内所から離れたあと、案内所でも隊長がりとの様子を確認した。

「須藤りと、どうだった。」

「はい、会話は録音してありますが、普通におばあちゃんを探している感じでした。」

「そうか、わかった。とりあえず、連隊に報告する。監視を続けてくれ。」

「わかりました。監視を続けます。」

みんなのところへ帰る途中、モニターを見ると、渋谷上空に数百のスクーパーズが集まっていた。整列を開始しているようだった。

「大丈夫とは思うけど、スクーパーズが来る前に、家の中を見てこようかな。」

みんながいるテーブルに到着した。さゆみんと三毛がいなかった。まりが答える。

「さゆみんが、なにか食べ物を探して来るって。お腹がすいたというよりは、研究熱心という感じ。」

「さゆみんも、独創的なクレープができそうね。」

「よそ見してマスタードがいっぱいのハムサラダクレープほど、独創的なものはできないかもしれないけど。」

「でも、涙が出るほど美味しいかもしれないよー。」

「もう、まりとことは。そんな話より、おばあちゃん、見つからないみたい。扉に鍵がかかっていて家の中までは見えないみたいだから、家の中を見に行く。」

「やめなさいよ。」

「大丈夫、いざとなったら、アマツマラを使って飛んで帰ってくる。」

そう言って、走り出して行ってしまった。まりが止めようとする。

「りとりー！」

みさちゃんのことを心配で、まりはりとを追うことができなかった。みさが尋ねる。

「どうしたんですな。」

「りとがおばあちゃんの家を見て来るって言って、原宿に戻っちゃった。」

「そうですな。大丈夫ですな。みさがりとちゃんの様子を見てくるですな。」

「いや、それ全然大丈夫じゃないから。」

そう言ったが、みさは走って行ってしまった。

「みさ様には、私が付いていきますからご安心を。」

えびふりヤーも、そう言って、みさが行った方向に跳ねながら進んでいった。

「宇宙人の付き添いって、全然安心できないけど。ど、どうしよう、ことごと。」

「りとちゃんを追うしかない気がする。」

「そうなの。」

「そういう運命って感じ。」

「運命は、王子様と感じていたいわ。」

「とりあえず、行こう。」

「しょうがないわね。でも、さゆみんが心配するわよ。」

「さっき決めた伝言板に書いておけば大丈夫だよ。」

「そうね。じゃあ、伝言板経由で出発よ。」

「了解。」

まりとこととも伝言板経由で、原宿に向かった。少しして、おやつを持った、さゆみんが戻ってきた。みんながいなかったの、慌てて伝言板を見に行った。

「みんな原宿に行っちゃったの。どうしよう。」

さゆみんは、状況を聞くために、案内所に向かった。

「すみません。」

「あー、鈴木さん。須藤さんたち4人が原宿に向かってしまったのですが、何かあったのでしょうか。」

「伝言が残されていて、りとちゃん、えーと、須藤さんのおばあちゃんを探しに自宅の中まで見に行ったみたいなんです。呼び戻してもらえないでしょうか。」

「原宿は立ち入り禁止区域で、30分ほど前に警察官や隊員も引き上げました。現在は無人状態です。」

「立ち入り禁止区域なのに、どうして止めなかったんですか。」

「はい、避難民にスクーパーズが紛れ込んでいる可能性があるから、避難民の行動は制限するなという命令がありました。」

「そうですか。そうですよね。」

思い当たるふしがあるさゆみんはそれ以上言うことができなかった。

「スピーカーで、立ち入り禁止区域外からすぐ出るように呼びかけてみます。」

「わかりました。有難うございます。」

みんなのことを考えながら、さゆみんは、立ち入り禁止区域の境界の近くにまで行ってみた。近くには、自衛隊員や警察官が並んでいた。

「どうしよう、私も行くべきかな。でも、間違えると私がいた方がかえって大変なことになっちゃうかもしれないし。」

そのとき、三毛が原宿の方に向かって走り出した。さゆみんは止めようとする。

「三毛ちゃん、勝手に引っちゃだめ。そっちはだめ。」

三毛の後を追いかけて、さゆみんも原宿の方に走りはじめた。

「君、そっちは危険だから戻りなさい。」

警察官らが声をかけるが、警察官も区域内に入るな、入らないことを強制するなどという命令を受けていたため、追いかけては来なかった。

りと、みさ、エビふりゃーは、りととおばあちゃんの家に到着した。りとは、鍵を開けて家に入って、呼びかける。

「おばあちゃん、いるの？おばあちゃん。」

返事はなかった。万が一倒れているといけないと思って、トイレ、台所からお風呂まで、すべての場所を確認したが、おばあちゃんはいなかった。

「おばあちゃん、どこ行ったんだろう。」

みさ、エビふりゃーも初めはりについて行ったが、みさは、りととの部屋でりととの絵を見ていた。

「すてきな部屋なんですな。」

エビふりゃーはおばあちゃんの部屋で、壁に掛けてあった旗を見ていた。りとが、おばあちゃんの部屋に戻ってきて、エビふりゃーに話しかけた。

「おばあちゃんがない。どうしよう。」

「避難された可能性が高いと思いますよ。ことここから聞いた話から考えると、やはりどこかでスクーパーズを見ている可能性が高いと思いますよ。ごさいます。」

「そう、そうよね。私もそう思う。登録だけしてくれば安心できるのに。」

ここで、エビふりゃーが変なことを尋ねる。

「ところで、りと様は地球人でいらっしゃいますか。」

「急に何を言い出すの。あたり前じゃない。それとも、私がエビ天ぶら星人に見える。」

「そんな宇宙人は天の川銀河にはいないでございませう。おばあちゃんの部屋の壁に掛けられている旗をご存知ですか。」

「うーん、よくわからないけど。この家に初めて来たときから、そこにあったよ。」

「三枚の羽の文様をご存知でしょうか。」

「知らないけど、うちのおばあちゃんの名前、3つの羽と書いて、須藤三羽子って言うの。それじゃない。それより、もう時間がない。行こう。」

「わかりましたでございます。」

そう言った後、エビふりヤーが独り言を言う。

「局所銀河群の伝説のみわりん侍従長、単なる偶然でございましょうか。」

(著者注・局所銀河群は、天の川銀河やアンドロメダ銀河など40個程度の銀河の集まり。)

りとは、みさを呼び出す。

「みさちゃん、じゃあ戻ろうか。」

「戻るんですな。PARKですな。」

「ううん、六本木。私ひとりならば、それもいいけど、みさちゃんは安全な所に避難しなくちゃ。」

「大丈夫ですな。りとちゃんが戦うならば、応援するんですな。」

「戦うというか、話してみたいとは思う。私たちが教えられることなら何でも教えるから、原宿から奪わないで欲しいって。」

「そうですな。では、PARKに行くんですな。」

「みさちゃんは強情だから。」

「りとちゃんほどではないんですな。」

「とりあえず、外にでようか。」

そうして、外に出て空を見上げると、スクーパーズの大群が隊列を組んで、渋谷から原宿に向かって来ているところだった。

「あんなにいっぱい。どうしよう。とりあえず、みさちゃんを隠さなくっちゃ。みさちゃん、ちよつとごめん。」

りとはみさを抱きかかえて、PARKの方へ走り出した。

「とりあえず、PARKに行こう。」

「PARKに行くんですな。」

後から、エビふりヤーも跳ねながらついてきた。PARKのそばまで来たとき、まりとことこに出会った。最初に見つけたのは、まりだった。

「あっ、りと、りと。」

りとは答える。

「あっ、まり、ここ。来ちゃったの。」

まりとことが答える。

「来ちゃったのじゃないでしょう。りとを一人にはできないわよ。」

「PARK経由で、りとおばあちゃんの家の方に向かおうとしたの。そうすれば、出会えるかなと思って。」

まりが上空を見ながら言う。

「すごい数のスクーパーズ。どうする、りと。」

「とりあえず、PARKへ行こう。みんなはそこで隠れて。私は話し合いに行ってみる。」

「わかった。PARKへ行こう。」  
「ことも賛成する。」

「こうなると、逃げる方が目だっちゃいそうだし、PARKへ行こう。」  
全員走って。1分もせずにPARKに到着した。ことが挨拶する。

「ただいまー。」  
「たが答える。」

「だだいまー、じゃないでしょう。とりあえず、文化的なものがないキッチンにいきましょうか。」  
「りと言う。」

「じゃあ、二人はみさちゃんと、キッチンにいて。私は、スクーパーズと話合ってくる。」

「変身して行くわけね。」

「それしかない。」

「分かったわ、私も変身する。万が一のために、りとを下から援護するわ。」

「まり。無理はしなくても大丈夫だよ。何かあると、お父さんお母さんが悲しむよ。」

「りとだって、おばあちゃんが悲しむじゃない。」

「孫を放ってスクーパーズ見物に行っちゃうおばあちゃんだけどね。」

「ことも言う。」

「私も、変身して情報の収集と分析をするよー。逃げるときに役立つかもしれないし。」  
まりが話をまとめる。

「じゃあ、3人で変身して、それぞれの役割を果たそう。PARKみたいに。」

「りとが答える。」

「巻き込んで、ごめんね。」

「そんなことないわよ。ことこじゃないけど、これが運命かもしれない。」

「ことも答える。」

「そうだよー、運命だよー。3人いれば最強だよー。」

まりが二人に始めるように言う。

「じゃあ、いくわよ。」

「わかった。」「いくよー。」

「ことこが「Our Otaku」、まりが「Our Fashion」、りとが「Our Creation」、3人そろって「Changed by PARK」と唱える。」

「眩いばかりの光が部屋を満たした。みさとエビふりゃーは息を飲んだ。」

「すごい、すごいですな。」「何という光でございましょうか。」

変身が完了すると、はじめて変身したまりは大きなバズーカ砲みたいな銃を持っていた。ことことりとが少し驚く。

「さすがまりちゃん、すごい銃。」

「まりらしい。戦うとしたら、役割は私が切りこんで、まりが後方から支援、ことが作戦や工  
作を担当という感じね。」

まりが答える。

「そうね。PARKでの役割みたいね。でも、話し合うだけよ。」  
「ことも同意する。」

「私も、がんばるよー。このタブレットで外の様子もわかるよー。スクーパーズ千体ぐらいが並  
んで、ラフォーレ原宿の上空にいる。データを送るね。」

モノアイディスプレイを見たりとが答える。

「本当だ。よく見える。この集団、こっちが先頭みたいだから、行って話してくる。話すだけだ  
し、まさか、いきなり攻撃はしてこないと思う。」

まりとことが答える。

「そうね。スクーパーズは、それほど攻撃的でないという話だし。頑張っ、りと。何かあった  
ら、逃げてきてね。」

「上空の様子はよくわかるから、分析した情報といっしょに送るね。」

「まり、ことこ、有難う。助かる。じゃあ、行ってくるね。」

そういうと、りとはボードに乗って飛んで出て行った。まりも大きな銃を持って、ボードに乗り、  
飛んで屋根の上に待機した。

「りとみたいには自由に飛べないけれど、なかなか便利ね。」

ことこも、飛んでまりの隣りに並んだ。

「まりちゃん、いよいよだね。」

「うまく行くといいけれど。何かあったら、下の2人を連れて逃げるわよ。」

「わかった。りとちゃんはどうする。」

「りとは飛ぶのも上手だし、逃げられると思うけど。」

「そうだね。」

りとはあつという間に、上昇して、スクーパーズの集団の50メートルほど手前で止まった。そ  
して叫んだ。

「お願い、いったん原宿から出て行って。そして、原宿から奪うのはやめて。もし大人しく来て  
くれるならば、絵の描き方ならば私が喜んで教えるから。文明や文化の生み出し方ならば、私よ  
りもっとすごい人が、原宿のみんなが教えてくれると思う。宇宙人とコラボレーションして何か  
を創造することを最高と思う人が原宿にはたくさんいる。嘘じゃない。だから奪うのはやめて。  
原宿には大切なものがいっぱいあるの。」

返事はなかったが、何か話し合っているようだった。言葉が分からないのかとも思って、英語で  
言おうと思ったが、あまり上手に言えなかった。

「Don't take from Harajuku. Please ask me. え

「と、あとはなんて言えばいいんだろう。英語、勉強しておけばよかった。」  
仕方がないので、日本語で繰り返した。少しして返事があった。

「大人しく降参しなさい。王女様を返しなさい。さもなければ、あなたたちの安全は保障できない。繰り返す。大人しく降参しなさい。王女様を返しなさい。さもなければ、あなたたちの安全は保障できない。」

りとは何を言っているのかわからなかった。

「何を言っているの。物を奪って、人まで連れて行こうとしているのはそっちじゃない。」

下を見ると、まりが銃を持ってこつちを見ていた。そのすぐ横に低い姿勢でパッドを見ているところもいた。

「まり、ここに、有難う。」

りとは自分が頑張らなくっちゃと思った。そして、りともさっきの内容を繰り返して言った。

「一度、原宿から出て行って。奪うのはやめて。文明や文化が欲しいならば、教わりに来て。本当に喜んで教えるから。」

しかし、スクーパーズの側も同じ言葉を繰り返すばかりだった。両者にらみ合いの時間が過ぎて行った。そのとき、スクーパーズの動きを分析していたことから情報が入った。集団のリーダーが前の方にいるらしいこと、その横のグループになにか動きがありそうなことを、モノアイデイスブレイに位置を表示しながら伝えてきた。

「そうよね、あれがリーダーよね。あのグループが何かしそうということね。」

そのときである。そのグループの1体のスクーパーズからビームの射撃があった。りとは、反射的に手に持っている棒で飛んできたビームを掃った。その射撃を見ると、今度は下に照準しているようだった。まりが危ないと感じたりとは、また反射的にその射撃しようとしているスクーパーズにめがけて飛び込んで行った。

「まりを狙っているのね。させない。」

しかし、そのグループは射撃をやめて下降して行った。

「PARKに向かっているの？まりとことこの所に、行かせるわけにはいかない。」

りとはそのグループを追って行った。

下では、まりとことが、スクーパーズが発砲したことに驚いていた。スクーパーズの1グループがこちらに向かって来て、りとがそれを追い始めたことが見えたとき、まりが気を取り直して、りとを後ろから撃たせちゃいけないと決意した。

「いくわよ。」

まりが、スクーパーズの集団に対して射撃を開始した。とにかく、りとを守るために必死だった。銃から散弾のような感じで弾が発射された。スクーパーズの方を見ると、多数のスクーパーズが落ちていくのが見えた。そして、消えてしまったスクーパーズも多数いた。驚いたことがつづやく。



「し、死んじゃったのかな。スクーパーズさん。」  
「まりにも多数のスクーパーズが消えて行ったことに罪の意識はあった。」

「仕方がないでしょう。先に撃ってきたのはあっちよ。援護しないとりが危ないわよ。」  
「ことも気を取り直す。」

「まりちゃんの言う通りだよ。悪いのは奪いに来て、りとちゃんを撃ったスクーパーズだよ。ね。わかった。いま状況を分析するね。」

「お願い。」

「りとちゃんは、こちらに向かっている。低空のスクーパーズの様子は直接は分からないけれど、りとちゃんから送られている画像によるとスクーパーズが十数体いるみたい。りとちゃんももうすぐ追いつきそう。上空のスクーパーズは撤退を開始したみたいだよ。」

「ありがとう。じゃあ、ここで、建物の入り口を守るわよ。りとが来たら向かい入れるわよ。」  
「わかった。」

建物の入り口で、まりが大きな銃を、ことが弓を構えた。まりがここに言った。

「ことが弓を持つと、魔法少女みたいね。」

「少女！まあ、いいや。」

「まりちゃんは、大きな銃が似合っている。」

「どういう意味かしら。」

「なにもも寄せ付けないって感じ。」

「スクーパーズはいやだけれど、お客様はウェルカムよ。」

二人は少し笑って、りとが来ると予想される方を見つめていた。

りとは後方の集団に追いついていた。スクーパーズを近くで見るのがはじめてなため、ちらつと見たが、先頭のスクーパーズを追うことにした。

「先頭を抑えなくちゃ。」

少しして先頭に追いつき、前をふさぐ形で止まった。PARKまで、もうあまり距離はなかった。

「止まって。これから先には行かせない。」

スクーパーズが減速して、りとを取り囲んだ。りとは、PARKの方向に体を向けた。前方少し上方のスクーパーズの1体が他のスクーパーズに指示しているように見えた。りとはこのスクーパーズがこのグループのリーダーと思った。それは、ことも同意見だった。ここから送られる情報が表示されるモノアイディスプレイにも、そのスクーパーズを重ねて、リーダーの可能性大のマークが表示されていた。また、真上と斜め上の計4体から同時攻撃がありそうなこと、他の部隊は撤退したこと、原宿にこのグループ以外にスクーパーズがいないことが文字と図で表示されていた。

「このグループを追い返せばいいのね。」

そのとき、攻撃が開始される予感が体に走った。

「うっわー。」

りとは、自分でもどこから出てくるかわからないような大声を上げながら、リーダーと思われるスクーパーズに突撃した。その瞬間、ビームが飛んできた。リーダーと思われる正面のスクーパーズからのビームは棒で掃った。それ以外のビームはりとの後方に外れていた。続けざまに2射目、それも棒ではらった。下からスクーパーズが突っ込んできたので、リーダーと思われるスクーパーズめがけて蹴り飛ばした。そして、りとがそれらのスクーパーズに達しようとしたとき、すぐ横のスクーパーズが立ち塞がった。直進しているりとは、そのスクーパーズを棒で突き刺す形になった。りとは、振り返りながらPARKの方に進み、PARKの方に行かせないようにした。棒で突き刺したスクーパーズは振り返った勢いで切れて落ちていき、その途中で消えてしまった。

両者が見合う中、リーダーが撤退を指示したのか、スクーパーズのグループは去って行った。りとは上昇してあたりを見回しスクーパーズがいないことを確認して、PARKに戻っていった。入り口では、まりとことが待っていた。

「りと、お帰り。」「りとちゃん、お帰りなさい。」

「ただいま。」

まりが声をかける。

「とりあえず、中に入ろうか。」

「うん。」

「大丈夫?」

「うん。」

PARKに入ると、3人が変身解除の呪文を唱える。

「さあ、仕事仕事。」

まりが、冗談でリラックスさせようとする。

「と言っても、お客さんは来ないわね。」

りとはまた力なく返事をする。

「うん。」

「さて、これからどうしようか。私なんかスクーパーズ数十体は殺しちゃったみたいだし。」

「そうか。そうだね。まりの方が精神的に大変だね。こめん落ち込んで。」

「私、スクーパーズに捕まったら、死刑よね。」

「私が始めたことなのに。巻き込んで。捕まったら、全部私が始めたことで、死刑にするならば私だけって言うよ。」

ことが二人の正当性を主張する。

「でも、撃つて来たのはスクーパーズが先。記録もあるよ。」

まりがりとにことに関して相談する。

「ここは逃がした方がいいと思うわ。ここは、まだスクーパーズを殺していないから。」

「そうだね。まりの言う通り。ここ、ここは今のうちに逃げよう。」

もちろん、ここは言うことを聞かない。

「いやだよー。みんなと離れるのは。それに、私もバッチリ見られちゃっているよ。」

「そうか、ごめん。ここまで巻き込んでちゃって。」

「大丈夫、今、アマツマラを最大限に生かして、みんなを守る方法を考えているんだよー。りとちゃんと、まりちゃんの武装や防御力の強化、防衛線の構築とかがんばるよ。スクーパーズのビームも分析している。」

「ここも思ったより強いね。私が一番がんばらなくちゃいけないのに。」

まりも同意する。

「3人で頑張ろう。なんとかなるよ。」

エビふりやーが言う。

「スクーパーズに捕まったとしても死刑になることはないと思いますよ。今の戦闘行為は正当なものと思うでございます。局所銀河団条約というものがございまして、正当な戦闘行為を行っていた捕虜を死刑にすることは違法になりますでございまして。」

まりが尋ねる。

「そうなの、エビふりやー。そうだとすると、私たちどうなると思う。」

「はい、スクーパーズ星に連れて行かれるとは思いますが、そこで自由にできると思いますでございまして。」

「動物園みたいなのところ？」

「動物園よりは、もっと自由にできると思うでございまして。」

「3人で人間園って感じだわね。お父さんとお母さんに会っておけば良かった。」

「ただ、この戦い、まり様たちの方が勝つのではないかと思っております。りと様のアマツマラの光の強さは間違いで今までに見たことのないものでございました。まり様のやさしく強い光、ことご様の知性的な光も、見たことがないレベルでございます。そして、その3つの光が合わさって共鳴しあうかのような光は、全宇宙を覆いつくすかのようにございました。」

「そう、ありがとね。嬉しいわ。」

りとも元気を取り戻して、冗談を言う。

「エビふりやーの言葉じゃ、あてにはならないけれどね。」

みさも言う。

「りとちゃんたちなら、スクーパーズを全員やつつけられるですな。」

エビふりやーは、少し悲しそうに言葉を漏らす。

「みさ様。」

そして、言葉が続ける。

「消えたスクーパーズのこと、心配する必要はございません。大丈夫でございます。彼らの魂はちゃんと消えないで、スクーパーズや天の川銀河の全ての生命のために尽くすのでございます。」

3人は本当の意味が分からず、その言葉をエビふりヤーの気休めとしか受け取れなかった。まりが、とりあえずの行動を示唆した。

「疲れたし、とりあえず休もうか。」

「ここが答えた。」

「まりちゃんとりとちゃんは疲れたでしょう、休んでいて。私はこれから本番。分析と対策をがんばる。」

「りと、ことこの言葉に甘えて休もうか。」

「うん。ここ、ありがとね。」

「大丈夫。じゃあ、休んでいて。」

ことは、自分が頼られ、自分にしかできないことがあるのが嬉しかったのかもしれない。アマツマラで自分のタブレットを強化して、分析を始めていた。

まりは、ソファアに横になった。2人の前では自分がすっかりしなくてはと思っていたが、一人になったら、急に恐怖が込み上げて、涙がこぼれてきた。

「お父さん、お母さん、もし二度と会えなかったらごめんね。」

そう言いながら、朝が早かったこともあり、少しして寝付いてしまった。りとは、ここに練習してると言い残して、PARKの周りでボードによる飛行や、棒の使い方を考えながら懸命に練習していた。

「私をもっと強くならないと。」

この原宿の戦闘に関しては、テレビのニュースでも報道されていた。原宿へ向かったスクーパーズが引き返したこと。地上から攻撃があり、数十体のスクーパーズが落下して消えたことなどが超望遠レンズで撮影した映像とともに伝えられていた。ただ、スクーパーズと戦った相手など、詳しい情報は分からないようだった。国家安全保障会議でも、原宿上空の戦闘に関して、内閣調査室長からの報告があった。

「原宿上空でスクーパーズとの戦闘があったようです。須藤りとはないかと思われる、ボードに乗った女性がスクーパーズの集団の前に立ち塞がり、それに対してスクーパーズからの狙撃がありました。それに応じて、下から数発の散弾の射撃があり、スクーパーズの数十体が落下しました。落下したかなりの部分が、途中で消えてしまっています。」

「どういうことですか、なにか推測はありますか。」

「武器は地球の武器ではないと思われれます。まず第一に、スクーパーズに対して有効な武器は地球にはありません。」

「やはり、エビフライ星人からのものでしょうか。」

「そう考えるのが自然と思われれます。」

「須藤たちの目的は何だと考えられますか。」

「望遠レンズで撮影した映像を、読唇術の専門家に見せたところ、『奪わないで』とか『文化が欲しいならば教えるから出直してきて』と言っているようだとのことです。」

「そうですか。話し合おうとしていたわけですか。」

「そうとも考えられません。」

「法的にはどうなりますか。」

「攻撃に関しては、スクーパーズは人間ではなく、ものと考えても所有者もいないですので、特に問題はないかと思えます。また、使用した武器が銃砲刀剣類所持等取締法に触れるかに関しては、地球のものではなく原理も不明ですので、判断が難しいと思えます。」

「総理！」

「何でしょう、防衛大臣。緊急のことですか。」

「はい、航空自衛隊宇宙監視部隊の報告によれば、宇宙空間にいた宇宙戦艦、揚陸艦が降下を開始したとのこと。目的地は渋谷と予想されるとのこと。」

「それは困りましたね。この戦闘に絡んでのことでしょうか。国民の保護は政府の最大の役割でもあるのですが、彼女たちを保護すると、周りの人間が攻撃を受ける可能性があります。」

「いま決めなくてはいけないことは、まず、原宿周辺の避難区域の拡大と彼女たちに関する対処です。」

「そうですね。ただ、宇宙戦艦の武器の破壊力がわかりません。地上を焼き尽くすことができると、もっと局所的なものなのか。」

「スクーパーズは、彼女たちの攻撃を避けるために低空ではありますが渋谷に残っていますので、大規模ではない可能性が高いと思われれます。それでも、原宿は焼き尽くしても不思議ではないと思えます。」

「半径5キロメートルでしょうか。どのぐらいの人数の住民の避難が必要でしょうか。」

「百万人は超えると思われれます。」

「わかりました。ラフォーレ原宿から5キロメートル以内の住民を避難させましょう。」

「原宿の彼女たちへの対処ですが、現状原宿に救出に行くことは難しいと思われれます。避難の呼びかけをすることはできません。ただ、逃げてきたときにどうするかという問題があります。」

「避難してきたときには、自衛隊基地か地下深くか無人の離島に隔離する他はないと思えます。」

「承知しました。移動のためにオスプレイを用意します。オスプレイならば、スクーパーズの移動速度よりは速いです。ただ、戦艦が追ってきたらわかりません。護衛については、習志野の第一空挺団から志願者を募ります。隔離場所については、至急検討します。」

「よろしくお願ひします。」

こうして、原宿、正確にはラフォーレ原宿から5キロメートル以内の百万人を超える避難がはじまり、周辺の小学校・中学校などへ避難していった。

渋谷上空では、ガーチューンたちが王女誘拐への対策の相談を行っていた。

「アルドア、戦艦と揚陸艦があと数分で到着する。到着したい揚陸艦のコンピュータで相手の武器について分析してみてください。その対策も必要だ。」

「はい、手持ちのセンサーで情報は集めてあります。その分析にかかります。」

「お願いする。私は宇宙軍の戦艦に行つて、ダウザ艦長と作戦を練る。作戦参謀は付いてきてくれ。」

「わかりました。」

ほどなく、戦艦と揚陸艦が到着し、それぞれの仕事のために乗艦していった。ダウザ艦長（少将）が出迎える。

「ガーチューン大佐、みさ王女様はどこにいらっしゃるのだ。」

「現在のところ不明です。地球の人間に連れて行かれるところを、私も肉眼で確認しています。」

「それで、君たち宇宙軍の揚陸部隊は何をしていたんだ。」

「対応を検討中です。王女様に危険が及ぶ可能性があるため、性急なことはできない状況です。情報はお渡ししますので、今後の対策を検討したいと思います。また、王女様が原宿から出て行った形跡はありません。原宿を中心に作戦を考えたいと思います。」

「わかった。しかし、王女様が人質では、戦艦の武器の使用は難しい。」

「おっしゃる通りです。その代わりに、戦艦や駆逐艦を盾にして、我々が近づくことはできるとは思います。」

「そうだな。この戦艦は速力はそれほどでもないが、スクーパーズ最強の武装と装甲を誇っている。艦の側面も通常の戦艦の装甲を4重に重ねてある。デストロイヤーズの戦艦の主砲でもそう簡単には抜かれない。駆逐艦の装甲でも、相手の手持ちの武器に抜かれることはあるまい。」

「それは頼もしい限りです。敵もボードに載って飛べるようです。対空砲の射線が地上から離れるようでしたら、対空支援もお願いします。」

「ああ、わかった。引き受けよう。」

「地表ぎりぎりまで下りて頂いて、なんとか王女様、エビふりヤー様とテレパシーで連絡を取りたいと思います。王女様の位置が分かりしだい、全力で救出にあたります。」

「なるほど。さすがガーチューンだな。こちらも最善を尽くす。王女様の位置が分かりしだい連絡してくれ。王女様に被害が出ない距離になったら、その不貞な人間に戦艦の艦首砲をくらわしてやる。」

「艦首砲ですか。」

「大丈夫。爆発しない徹甲弾だ。デストロイヤーズの戦艦の装甲を打ち抜くやつだよ。戦艦のエ

ンジンか火薬庫に当たらないと、ただ、貫通するだけのものさ。」

「そう、そうでしょうね。わかりました。有難うございます。我々は一度揚陸艦に戻って、作戦遂行の準備をします。」

ガーチューンは戦艦を出て揚陸艦に乗り込むとすぐに解析室に向かった。解析室に入ると、連隊付き技術参謀のアルドアに解析状況を聞いた。

「敵の武器に関して、何かわかったか。こちらの兵が完全に消滅してしまうという特性に関してだ。」

アルドアは分かっている範囲で答えた。

「敵のビームは、基本的には、われわれのスクープビームと似た特性をしています。スクープビームは物体情報を操作し、その物体を素粒子レベルで小型化し保存することができます。敵の武器も、物体情報を操作します。しかし、スクーパーズや物体を破壊するときの衝撃を使って、その情報のすべてを抜き取ってしまいます。そのため、物体が素粒子レベルで形を保つことができずに、やがて消えてしまうようです。」

「なるほど、我々のものと、全く異なるものではないということだな。」

「はい、その通りです。」

「それで、何か対策はあるか。」

「最初の破壊さえ防ぐことができれば、情報の抜き取りを防ぐことができます。さきほど下から撃たれた散弾に関しては、駆逐艦の装甲でも防ぐことができます。地表での棒のようなものの威力はわかりませんが、ビームをしのぐほどのものではないと思います。また、私たちのサイコバリヤーを強化できれば、防ぐことができると思います。第7連隊の隊員ならば、今回の敵の武器ならば防げる可能性が高いです。ただ、第8連隊隊員のバリヤーをただちにそこまで強化することは不可能と思います。バリヤーが強力なガジメ分隊長とゼクルルだけは耐えることが可能かもしれません。また、宿敵のデストロイヤーズのバリヤーと合わせれば防ぐことが可能と考えられます。対デストロイヤーズ戦のために、デストロイヤーズの力を、スクーパーズに組み込む方法が研究中で、それがうまく行けば可能かもしれませんが、スクープビームを使って体内に取り込むという非常に危険なことをしなくてははいけません。それに、倫理的な問題もあり、また、副作用も心配です。」

「そうかわかった。デストロイヤーズの力を組み込む方法については、私も聞いている。今回の遠征では極秘にこの連隊だけ4体分ほどの薬が配布されている。生き帰りの行程でデストロイヤーズなどに遭遇し王女様に危機が及ぶときにだけ使用が認められている。地球人に対する使用は想定外であるが、使用もやむを得ないと思う。しかし、使用はなるべく避けるようにとの指令を受けている。従って、現時点での使用は避けようと思う。現在の作戦は、戦艦や駆逐艦の陰に隠れて、地上の射手がいたあたりに4方向から接近する。そして、王女様、エビふりヤー様とテレバシーで連絡し、位置がわかりしだい王女様を救出するというものだ。」

「はい、それが一番確実だと思います。」

「王女様の発見後、突入の際に犠牲を如何に少なくするかが問題だ。」

「戦艦や駆逐艦に積んであるビーム攪乱幕を使いましょう。視界が悪くなり、こちらのビームの射程も短くなりますが、相手の武器の射程もかなり短くなります。一度に多数がやられるということはありませんと思います。」

「そうだな。ダウザ艦長にお願いしておこう。」

連隊長が去った後、アルドアは不思議に思いながらつぶやいた。

「我々から抜き取った情報をどうするのだろうか。文明や文化ならばともかく、スクーパーズの情報なんて。」

そのころ、PARKでは、ことごとりとが、まりを起こそうとしていた。

「まりちゃん、起きて。」「まり。」

まりはすぐに起きる。

「りと、ことこ。あー、寝付いていたのね。」

「まりちゃん、大変。宇宙船がやってきた。」

「そうね、宇宙人だから宇宙船ぐらい持っているわよね。」

りとがまりに答える。

「まり、もう起きたみたいね。」

「おはよう。もう起きたわ。この状況じゃね。」

「で、ことこ、どうなの。」

「渋谷の上空に、大きな宇宙船が1隻と小さな宇宙船が3隻いる。」

りとが付け加える。

「本当よ。ここからじゃ見えないけど、さっき上がって見てきた。」

「こちら宇宙船が欲しいところだわ。ことこ。」

「宇宙船は無理だけど、武装の強化と防御に関しては考えてある。りとちゃんは、さっきやってみた。」

りとが答える。

「まだ効果はわからないけど。ことこが考えたものだから間違いないよ。」

「そうね。で、ことこ、どんなもの。」

「まりちゃんの今の武器は、基本的におばあちゃんのSFにあつた反応炉エネルギー加速銃(Reactor Energy Acceleration Rifle)、通称リア銃なんだよー。」

「リア銃より、私がリア充になりたいところだわ。でも、何でそんな銃を私が作れたんだろう。」

「それはわからないよー。おばあちゃんのSFをどこかで読んだのかな。今度は、それにエネ



ギーを蓄えて、そのエネルギーを集中させたエネルギー弾を撃つことができるモードを追加するよ。モードを切り替えれば、さっきの散弾も撃てるよ。」

「何かすごそう。」

「それとビーム攪乱幕を出せるようになるよ。それで、スクープビームの威力をかなり抑えられると思う。あと、ボードをスクーパーズのビームを弾くように強化する。」

「それは嬉しいわね。で、どうすればいいの。」

「私のアマツマラからまりちゃんのアマツマラに情報を伝達する。変身するときに、アマツマラの中の情報を呼び出して。」

「わかった。」

「じゃあ、手をつないで。」

「手を？まあ、いいか。」

「ありがとう。まりちゃん。」

「でも、ことごと手をつなぐのは初めてかな。」

「そうだね。」

二人、少しだけ顔を赤らめて下を見る。(著者注：こんなゆり展開不要でしょうか。)そのときに、指輪のアマツマラを見たことが色の変化に気付く。

「あれー、このアマツマラ最初と少し変わっていない？」

「えっ、どこが？」

「色合いが。」

「そう言われれば、そんな気もするけど。気のせいじゃない。」

「そうかも知れない。じゃあいくよ。情報転送。」

ことごとほ、握っているまりの手を通じて、リア銃、攪乱幕、防弾ボードのデータを送り始めた。

「なんか、すごい。ことごと情報を送られてくる。」

「それをアマツマラに書き込んで。」

「わかった、書き込む。すごい。」

二人が輝く中、少しして、情報の伝達が終わった。

(著者注：アニメ化するとすれば、少しエロチックにしたいシーンです。)

「はい、終わり。」

「ずいぶん簡単ね。」

「データは作ってあったから、コピーするだけだったし。」

「そうね。内容はよく分からなかったけれど。さすが、ことごとね。ところどりの武器はなんてらうの。」

「りとちゃんのは、レベル無制限神経起動銃 (Level Unlimited Neuro Activating Rifle)。通称、ルナ銃。りとちゃんの手先から出ているロー

プに付いているタンクの部分が銃になるの。」

「ルナ銃か。カッコいいわね。」

「精神エネルギーを変換して放射する感じ。タンクの移動も思考で制御できる。威力は、りとちやんの精神力しだいだよ。」

「りとはびったりだわね。」

「でしょう。あと、ビーム攪乱幕と防弾ボードは、まりちゃんと同じ。」  
りと話しかける。

「で、どうしようか。」

まりが答える。

「まだ、遠いので様子見かな。」

「いきなり撃ってくるかもかも知れない。みさちゃんを何とかしないと。」  
ことが答える。

「原宿に防御の囲いを作っているけれど、もう少し待って。作るときは、巨大なものを作らなくてはいけないから、りとちやん、まりちゃんも手伝って。みさちゃんたちは、さつき、この建物の地下室を強化したので、そこをもらおうかなと思っているの。」

「さすがは、ことこ、やるのが早い。」

りとは、みさに呼びかける。

「みさちゃん。」

「何ですな。」

「ここは危ないから、地下室に行こう。さつき、ことが部屋を強化したから大丈夫だよ。」

エビふりヤーが尋ねる。

「アマツマラで地下室を強化でございませうか。」

ことが答える。

「そうだよ。もう少ししたら、原宿全体を覆う囲いも作る。」

「さすが、ことこ様。もう、アマツマラを使いこなしているでございませう。」

「じゃあ、地下室に案内する。」

みさが答える。

「地下室に行かなくても大丈夫と思うですな。でも、ことこちゃんが作ってくれたので、行ってみたいですね。」

「いっしょに行こう。」

「ことがみさとエビふりヤーを連れて地下室に向かった。地下室にみさとエビふりヤーを案内すると、ことこは、次のように言った。」

「じゃあ、ここに居てね。これでロックすれば外からは入れないから安心だよ。お菓子と飲み物を置いていくね。」

「有難うですな。」

ことは急いだ足取りでPARKに向かった。

「エビふりヤー、この部屋がどのくらい強いか試してみるんですな。」

「わかりました。姫様。」

エビふりヤーがその尾で壁を切り裂こうとする。みさが、その場所を見に行く。

「傷一つ入っていないんですな。すごいんですな。」

「私のこの形態では、無理のようです。」

「さっき原宿に壁を作ると言っていたんですな。スクーパーズが入れなくなって、りとちゃんたちに殺されなくなると困るんですな。」

エビふりヤーが悲しそうにいう。

「姫様。」

みさが毅然と答える。

「エビふりヤー、それが、みんなのためなんですな。この天の川銀河、数千億の知的生命体のためなんですな。」

それは、自分に言い聞かせるようでもあった。エビふりヤーが仕方なく納得したように答える。

「はい、姫様、わかっております。我々に課された使命を。ただ、その心配は無用でございます。」

戦艦の艦首に装備された砲ならば、壁を容易に壊せると思うでございます。」

「それも、そうですな。」

ここで、戦艦の武装について解説する。戦艦はその長手方向に通る4本の艦首砲、上部甲板に3台の3連装旋回主砲、艦の各所に配置した計12台の対空砲火からなる。艦首砲は長さ数百メートルにも及ぶ砲で、十分な長さで弾を加速することによって敵の戦艦の正面装甲を貫通することができる。旋回主砲はビーム砲で戦艦正面装甲以外の攻撃に利用する。対空砲火はレーザー砲で小型目標に対して利用する。

しばらくして、駆逐艦3隻が明治神宮上空、新宿上空、六本木上空に移動した。そして、横を向きながら、次第に原宿に迫ってきた。各艦の後ろには、スクーパーズが隠れていた。ことが、タブレットを見ながら言う。

「宇宙船が4方向から迫ってくるよー。大きな宇宙船は渋谷から来る。」  
りとがまりに尋ねる。

「どうする、まり。」

「どうするって、リア銃を使ってみるしかないわ。」

「了解。私はまりの援護をする。ことは、囲いの準備を続けていて。」

「わかったー。」

3人は変身して、りととまりは、PARKの建物の屋根に上がった。まりが言う。

「明治神宮から近づいてくる小さい宇宙船からいくわよ。あれが原宿に一番近いわ。」

「そうね。もしだめだったら、私がおとりになるから、まりも近づいて一番宇宙船の弱そうところを狙って。」

「わかったわ。それじゃ、やってみるわよ。」

まりは、リア充を起動し、小さな宇宙船にねらいをつける。

「反応炉が臨界を越えたわ。エネルギー蓄積量増大中。あと10秒で発射可能量に到達。」

「発射可能量に到達したわ。発射準備完了よ。」

まりは一度、りとの方を向く。りとがうなずく。

「いくわよ。発射。」

辺りが一瞬明るくなり、まりの銃から細長いビームが放たれた。ビームは駆逐艦に当たり、駆逐艦を貫通していった。ただ、誘爆するものに当たらず、貫通するだけで入射側の穴が小さかったため、まりの方からは何も起きていないように見えた。

「やっぱりだめみたいね。」

ただ、駆逐艦は前進をあきらめ、後退を始めた。それを見たりとが言う。

「でも見て、まり。宇宙船が煙を出しながら後退し始めた。煙はわざと出しているみたいだけど、目くらましかな。」

「本当ね。無駄ではなさそうだわ。じゃあ、大きな方にも撃ってみるわよ。」

「そうね。それで、ことこの囲みの準備ができるまでの時間が稼げるといい。」

まりは、今度は戦艦に狙いをつける。

「反応炉、臨界。エネルギー蓄積完了。発射準備完了。宇宙船、下がちなさい。」

ビームは戦艦の装甲ではじかれ、上空へ伸びて行った。

「当たった。大きい宇宙船も下がってくれるかな。」

「うん。きつと下がるよ。でも、今の光、綺麗だった。」

「りと、今は絵を描いている時間はないわよ。」

「わかってるって。」

最初のリア銃の集中エネルギー弾が駆逐艦に被弾した直後、戦艦の艦橋では、警報が鳴り響く中、状況を分析していた。

「駆逐艦A3738にビームが被弾。駆逐艦を貫通しています。駆逐艦A3738はビーム攪乱幕を出して後退を開始しました。後ろに第8連隊がいるため、ゆっくりと後退中です。」

「適切な判断だな。こちらも、ビーム攪乱幕の発射準備をしろ。」

「わかりました。」

そのときである。まりの銃が戦艦を指向していることが確認できた。

「敵の銃、こちらを指向しています。」

「ビーム攪乱幕発射、全員衝撃に備えろ。」

そのとき、まりのビームが戦艦を直撃し、大きな振動が走った。

「被害状況は？」

ダメージコントロール室から連絡が入る。

「左舷中央の装甲の第1層が破壊され、第2層に被害が及んでいます。第3層、第4層は無事です。」

「わかった。とりあえずは大丈夫だが、同じ場所を被弾するとまずいな。戦艦の旋回主砲程度の威力はあるのか。急いでビーム攪乱幕を張れ、後退はゆっくりと。ガーチューンを呼び出せ。作戦の中止を連絡する。」

そのとき、ガーチューンから連絡が入った。

「ダウザ艦長、状況はどうなっています。」

「ガーチューンか。敵のビームが駆逐艦を貫通した。戦艦の方は貫通はされなかったが、装甲にかなりの被害を受けている。一度ゆっくり後退する。敵の武器は、少なくとも戦艦の旋回主砲程度の威力がある。」

「そんなにですか。わかりました、こちらも、駆逐艦の後ろにいた隊員に被害が出ています。作戦を中止して、渋谷まで撤退します。」

みさとエビふりやーは、勝手に地下室を出て、隣の建物で状況を見ていた。みさは、双眼鏡で状況を見ているエビふりやーに話しかける。

「エビふりやー、どうですな。」

「彼女たちは、一体何なんでしょうか。まり様の武器は、駆逐艦を貫通して、戦艦の装甲にもかかりの被害が出ているようです。同じところに当たると、戦艦と言えども危ない状況です。艦隊はビーム攪乱幕を張りながら撤退しています。両艦の撤退は落ち着いていて、さすがは、ダウザとガーチューンです。」

「みさの目には狂いはないですな。」

「そうではございますが。連隊にどれほどの被害が出るかと思うと。」

「みさは、3つの連隊とも全滅すると思うんですな。そのぐらいの3人なんですな。」

「さすがにそこまではいかないとは思いますが、それに近いことが起きるかもしれません。悲しいことでございます。」

「みんなのためなんですな。」

「承知してございます。」

PARKが入っている建物の屋根に、変身したことが上がってきた。まりが声をかける。

「あっ、ここ。ありがとう。時間は稼げた。宇宙船は壊れなかったけれど、撤退していったわよ。」

「本当だ。いなくなっている。宇宙船は壊せなかったけれど、良かったー。」  
りとは2人に話かける。

「でも、宇宙船が壊れちゃったら、地上の被害もすごいから、壊れなくて良かったんじゃない。まわりも同意する。」

「それもそうだね。で、ことこ、囲いの準備はできたの。」

「大丈夫だよー。おばあちゃんの高密度中性子壁を参考にして構成するの。あと、原宿の建物の表面も強化する。囲いほどは強力ではないけれど、スクーパーズのビームなら跳ね返すと思うよ。情報を二人のアマツマラを送るから、手をつないで。」  
りどが感心する。

「おばあちゃんが言っていた、中性子星ぐらいの密度の中性子の膜状の集まりね。すごい、ことこ。それを本当に作っちゃうんだ。」

ことこを中心に、りど、まりが手を繋ぐ。りどとまりが、ことこに準備OKを伝える。

「準備OK。」「準備OKよ。」

ことこが情報を送り始める。

「それじゃあ、いくよ。」

3人が輝く中、情報伝達が始まる。まりがぼやく。

「ことこの情報は難しいわね。全然分かんないわ。まあ、書き込むだけだけど。」

情報伝達が終わって、ことこは、囲いの作成を開始しようとする。

「りどちゃん、まりちゃん、このまま囲いを作ろうよ。」

りともまりも答える。

「了解。」「了解よ。」

3人の輝きが増し、まばゆいばかりになった。原宿の囲いが形成されていった。それは、交差点で言えば、神宮橋、表参道、南青山三丁目、神宮前三丁目、神宮前一丁目、千駄ヶ谷小学校、原宿外苑中学校西で囲まれる範囲である。天井もできている。

囲いの形成がおわった。ことこが終わったことを告げる。

「囲いができたよ。」

とても薄い白いすりガラスのようなもので、原宿の周りが覆われていた。りとは、囲いを一周を見回してから、ことこに尋ねる。

「さっき送られた情報からして、地下も囲われているんだよね。」

「そうだよ。」

「電気がついているのはなぜ。」

「えっ、何でだろう。」

まりが言う。

「囲いを調べる必要があるかもしれないわね。」

りとも同意する。

「私が見てくる。飛ぶのは得意。」

まりが、答える。

「そうね、お願い。でも、スクーパーズがいたら逃げてくるのよ。」

「わかった。」

そう言っ、りとは壁を見に行つた。まりは、ここに話しかける。

「私たちは、PARKの様子を見てこよう。スクーパーズがいなくなるまで、いなくちゃいけなさそうだし、みさちゃんも心配だわ。」

「了解。でも、電気、何でかな。」

新宿上空では、スクーパーズたちが原宿に囲いが形成されていくのを見ていた。ガーチューンがダウザ艦長に連絡を取る。

「原宿に囲いが形成されているようです。これから、斥候を出して調査させますので、囲いへの攻撃は少し待ってください。」

「分かった。報告を待っている。」

3体一組のスクーパーズが低空を飛んで、原宿に向かった。そして、囲いの周りや上昇して、上をチェックし始めた。壁は原宿全体を覆っていた。ただ、原宿駅竹下口の近くに直径3メートルほどの穴が開いていた。斥候の1組がそこから中に入ろうとすると、棒を持った人間が向かってきた。3体がビームを放つたが、ビームがかわされたり、棒ではじかれ、あらぬ方向からビームが飛んできて1体が消滅した。2体は囲いの外に出た。人間も囲いの外には出てこなかった。斥候は状況をガーチューン連隊長に報告した。ガーチューンは、ダウザ艦長と相談することにした。

「囲いの材質は中性子でできているようですが、構造の詳細は不明です。そして、原宿のほとんどを覆っています。一か所、竹下通への入口だけ開いています。そこには人間が待ち構えているようです。そのため、残念ながら隊員1名を失いました。」

「わかった。とりあえず、艦首主砲を使って囲いの破壊を試みる。侵攻する経路は多い方が良いでしょう。」

「はい。王女様に被害を及ぼす可能性は。」

「なるべく王女様がいらっしゃると思われるところから遠い部分を攻撃する。最も貫通力のある弾は細いし、破片も横には飛ばないので心配する必要はない。穴が開いたら、爆発物で穴を大きくすることはできるか。」

「はい、それはこちらの工作部隊が担当します。戦艦が攻撃する間は、我々は一度後退して待機します。」

「そうしてくれ。」

戦艦が原宿に近づいて行つた。戦闘班長のザダイが号令をかける。

「反応炉から艦首主砲加速器エネルギーバンクへの回路を接続。」

「反応炉出力最大。エネルギー充填開始。」

「艦を壁に正対する。」

「エネルギーバンクへのエネルギー充填を継続。」

「正対誤差計測。」

「エネルギーバンクのエネルギー量、発射基準量まで、あと24秒。」

「壁との正対誤差が0.1度ある。操舵手は艦の向きを修正をお願いします。」

「エネルギーバンク、エネルギー充填完了。」

「艦方位、修正完了。壁との角度90度、90度。砲弾装填。発射前最終確認。よし。」

「艦長、発射準備完了しました。」

ドウザ艦長が答える。

「うむ。艦首4連装主砲、斉射。」

「艦首主砲斉射。」

4つ弾丸が光のように壁に向けて放たれた。しかしながら、壁にはじき返されて、1発は戦艦艦首に当たり、2発は大気圏外に出てき、1発は館山をかすめて太平洋の方に飛んで行った。ザダイ戦闘班長が戦況を確認する。

「観測班は、壁の状況を観測して戦闘班まで報告して下さい。ダメージコントロール班、ダメージの状況を報告して下さい。」

ダメージコントロール班より、報告が上がる。艦首装甲は基本的には、艦側面と同じ材質であるが、16層に強化されている。

「正面装甲、4層まで被害が及んでいます。その衝撃で3番艦首主砲の軸がずれている可能性があります。他の軸は大丈夫と思われれます。これから3番主砲の軸の確認作業を開始します。」

観測班より報告が上がる。

「困いは無傷のようです。」

ドウザ艦長がガーチューン連隊地に連絡する。

「艦首4連主砲を斉射したが、こちらからの観測では傷は観測できない。そちらで、詳しく観測することは可能か。」

「わかりました。すぐに斥候を出します。」

ガーチューンが連隊付技術参謀アルドアに命令する。

「困いの様子を見てきてくれないか。」

「わかりました。個人的にもあの困いには興味があります。」

「うむ。」

アルドアは班員と観測機材といっしょに、困いの方へ飛んだ。壁に到着し、戦艦からの情報を元に、命中地点の観測を始めた。班員から情報が上がった。



「表面は滑らかで、傷のようなものは確認できません。」

アルドアは表面からサンプルを取ろうとしたが、どんな硬いものを使っても、全く歯が立たなかった。

「戦艦の艦首主砲で無傷なんだから当たり前か。」

そして班員に命じた。

「持っているすべての観測機器で、データを収集してくれ。後で分析を試みてみる。」

班員は、光、X線、ガンマ線などの電磁波や、電子線、陽子線、中性子線、スクープビームで解析を開始した。アルドアはガーチューンに連絡した。

「囲いに傷は全くありません。囲いは、中性子星程度の密度で中性子が集まった膜で出来ていません。強い力で結合していますので、電磁力で結合している物体では貫通は難しいと思います。」

ガーチューンは、ダウザ艦長にこのことを伝えた。ダウザは答えた。

「そうか、艦首主砲で貫通が難しいことはわかった。ただ、王女様が人質になっている状況では、できることをやってみる他はない。4つのエネルギーバンクのエネルギーを1つの主砲に集中して使用する。それで、砲弾のエネルギーを高める。」

「そんなことをしても、大丈夫ですか。」

「その砲は壊れるかもしれないが、そんなことを言っている場合ではない。」

「わかりました。第8連隊は渋谷まで下がります。」

「もの陰に隠れているようにしてくれ。」

「わかりました。」

ダウザ艦長には、砲が壊れる事より気がかりなことがあったが、この作戦を実行することにした。

「ザダイ、4つのエネルギーバンクのエネルギー回路をすべて艦首1番砲に接続してくれ。」

「艦長、そんなことをしたら1番砲は。」

「ああ、わかっている。やってくれ。さらに今度は、囲いに肉薄し、ゼロ距離射撃を行う。これで最大のエネルギーを囲いにぶつけることができる。」

「それで、囲いが弾を弾いたときには。」

「本艦は、甚大な被害を被るだろう。それでも、みさ王女様が人質になっている状況では、やるしかない。」

「わかりました。エネルギー回路の変更の準備を開始します。」

ザダイ戦闘班長は4つのエネルギーバンクからのエネルギー回路を右舷上部の艦首主砲へ繋ぎ変えること、そして作業が終わり次第、全員が左舷に避難することを指示した。

渋谷では、アルドアがガーチューンに、その計画を止めるように進言する。

「連隊長、ゼロ距離射撃の作戦をやめさせて下さい。貫通する可能性はほとんどありません。それより、跳ね返された弾で16層の装甲が破られる可能性があります。」

「お前の言うことは、きっと正しいのだと思う。ただ、あれはスクーパーズ最強の戦艦だ。艦隊の最高指揮官が人質になっている状況では、どんなに危険でも最良と思われることをしなくてはいけない。それが、最強の武器を与えられたものの責任だ。」

「わかりました、連隊長。一つだけ進言させてください。戦艦の破片が飛び散る可能性があります。戦艦の後方プラスマイナス45度から、隊員を退避させてください。」

「わかった、そうしよう。」

エネルギー回路の変更が終わった戦艦では、ダウザ艦長が前進を命令した。ザダイ戦闘班長が、号令をかける。

「微速前進。エネルギーバンクにエネルギー注入。」

「囲いの前で停止。」

「壁に対して正対しろ。」

「ゼロ距離射撃を行う。もう一度、ゆっくりと前進しろ、囲いの直前で停止しろ。」

「角度修正。」

「距離、角度、確認。」

「エネルギーバンクのエネルギー量、発射基準量まで、あと11秒。」

「エネルギー充填完了。正対角度よし。艦長、発射準備を完了しました。」

「わかった。発射管制をこっちに渡してくれ。」

「了解しました。射撃スイッチ、艦長に渡します。」

「うむ。」

艦長は、艦内一斉放送のスイッチを入れた。

「こちらは、ダウザ艦長だ。みんなも知っているとは思いますが、みさ王女様が人間に拉致された。そして今、王女様がいる原宿は強力な囲いで覆われている。それを部分的にでも壊し、第8連隊の突入口を作るのが今回の作戦の目的だ。敵の囲いは強力で、弾がはじかれた場合、艦に大きな被害が出る可能性がある。少なくとも、スクーパーズ星から応援が来るまで、この艦を失うわけにはいかない。艦に被害が出た場合は迅速に艦の被害を最小にすべく、最善を尽くしてくれ。放送終了後、10秒で発射する。各員、衝撃に備えろ。」

ザダイ戦闘班長はカウントダウンを始める。

「10、9、8、7、6、5、4、3、2、1。」

ダウザが発射ボタンを押す。

「発射。」

発射と同時に艦が大きな音を立て、大きく揺れた。ただちに、ダメージコントロール班から連絡が入る。

「壁で弾かれた砲弾は1番艦首砲にもどり、途中で飛び出し、右舷上部装甲を突き破り、艦橋右下部の装甲をえぐって大気圏外に出ていきました。各所で火災が発生していますが、反応炉は無

事ですので、消し止められると思います。乗組員も軽い傷を負ったものの以外は全員無事です。ただ、1番砲の修理は基地に戻らないと不可能です。」

ダウザ艦長が答える。

「報告ありがとう。そうか、全員無事でよかった。全員で消火と復旧を急いでくれ。ザダイ、囲いの様子はどうか。」

「観測班からの報告によれば、変化なしのことです。」

「そうか。変化なしか。この艦の能力ではどうしようもないということだな。申し訳ないが、第8連隊に頑張ってもらうほかはないようだ。それにしても、やつらは何者なんだ。姿が似ているデストロイヤーズが地球の人間に紛れ込んでいるのかと思ったのだが、こんな強力な装甲はやつらも持っていないはずだ。まあ、いい。とりあえず、ガーチューンと連絡する。」

ダウザから連絡を受けたガーチューンがアルドアと相談する。

「敵には強力な武器と囲いがあり、突入できる場所は1カ所、そこで敵は待ち構えている。それをわれわれだけで突破しなくてはいけない。何かいいアイディアはあるか。」

「ビーム攪乱幕と戦艦の装甲を使うほかはないと思います。こちらで、装甲を移動させるための台車を作成します。それに隠れながら侵攻します。これで敵の散弾は防げると思います。強力な方はビーム攪乱幕に期待するしかないわけですが、こちら側のビームも効かなくなること、視界が悪くなることに注意が必要です。また攪乱幕の効果を出すためには、敵を近づけてはいけません。後方から援護射撃も必要だと思います。」

「そうだな、わかった。まず、戦艦の下部旋回主砲を使いつつ竹下通りの入り口に橋頭堡を確保する。その後、竹下通りを第2中隊と第3中隊が超越交代で進む。第4中隊が後方からビームで支援する。第1中隊は予備戦力とし、攻勢に出る場合に突入してもらう。その方針で作戦を立案する。装甲を台車の載せる準備にどのくらいかかるか。」

「20台は作らなくてはいけないと思います。明朝までに準備を完了します。」

「わかった、明朝、900に作戦を開始することにしよう。」

「了解しました。」

(著者注：超越交代とは、軍隊が敵地を前進していくときの基本的な方法の一つである。A、Bの2つのチームに分け、Aがある程度前進して停止しそこに陣地を作る。Bはそこを通り越しある程度前進して停止して陣地を作る。そして、また、Aは先のAが作った陣地を出発して、Bの陣地を通り越し、ある程度前進して陣地を作るということを繰り返すものである。相手が攻勢に出る時退却するときは、もう一つのチームが作った陣地まで後退して、2チームで相手の攻勢に対応するという戦術である。)

ここは地下室にみさたちの確認に行ったが二人がいなかったため、PARKへ行き、直接PARKに戻ったまことにこのことを相談した。まりはとりあえずりとこの帰りを待つことにした。

かし、少しして、みさたちがPARKにやってきた。

「ただいまですな。」

まりが尋ねる。

「みさちゃんどこへ行ってたの。」

「となりの建物で、まりちゃんたちの活躍を見ていたんですな。戦艦と駆逐艦をやっつけて、カッコ良かったですな。」

「そう。後退させたただけけど。それより、危ないから地下室に隠れていなくちゃだめじゃない。」

「ごめんなさいですな。でも、何も分らないまま、死んでしまうのはもっといやなんですな。」

「それもそうね。ことこ、何か作れる？」

「わかったー。地下室外の様子がわかるものを作っておくね。」

「ありがとう。さすが、ことこね。」

「ありがとうございます。」

そのとき、囲いから大きな音がした。まりが驚いた。

「なに、今の音は？」

エビふりヤーが答える。

「スクーパーズの戦艦が主砲を壁に向けて発射したのではないかと思うでございます。ここも同意する。」

「囲いに外から4発、当たったみたい。でも大丈夫。」

まりが感心する。

「ここが作った囲いだもの。そう簡単には壊れないわ。」

エビふりヤーが確認する。

「4つでございますか。とすると、戦艦の艦首主砲だと思っておりますよ。それに耐えるとは、すごいというか、少し信じられないでございます。たぶん次は、4つのエネルギーを一つに集中して撃つてくると思うでございます。」

ことこが、答える。

「4倍。まだ大丈夫。耐えられるよー。」

「そんなに、強いでございますですか。」

「うん、高密度中性子壁、まだ千倍ぐらい余裕があるよー。」

「そうでございますですか。それではスクーパーズは入ってこれないでございますね。少し安心しましたでございます。」

みさは独り言で反対のことを言う。

「それは困ったですな。」

まりが聞く。

「どうして、困ったことなの。」

「えっ、まりちゃんたちの活躍が見れないですな。」

「そんなことで、活躍したくはないわよ。可愛いファッションとか、ダンスとかで活躍したいわ。」

「それも見てみたいんですな。まりちゃんのダンス。」

「じゃあ、ちょっとだけ見せてあげるね。」

「嬉しいですな。」

まりも少し安心したのか、ダンスを披露する余裕ができたようだった。

「すごい、カッコいいですな。みさも、やりたいんですな。」

「わかった。教えてあげるね。まずは初心者ステップから。こんな感じ。」

「はいですな。」

まりとみさがダンスの練習をしているとき、また囲いから大きな音が聞こえた。ここがエビふりヤーに話しかける。

「さっき、エビふりヤーが言った通り。うん、弾は1つで、エネルギーは4倍になっている。エビふりヤー、スクーパーズのこと詳しいー。」

「はい、そ、それは、何年も捕まっている間に詳しくなったのでございます。まりがエビふりヤーに尋ねる。」

「スクーパーズはこれより強力な武器を持っているの？」

「たぶんないと思うでございます。」

「それは嬉しいわ。これで、あきらめて帰ってくれるといいんだけど。」  
そんなときに、りとから連絡が入る。

「ここ、大変。原宿駅の竹下口の近くで囲いに穴が開いている。スクーパーズが入り込もうとしていたので、ルナ銃を使って撃退した。」

「わかった、りとちゃん。今から見に行く。」

「私は、ここでスクーパーズが入ってくるのを阻止する。」

まりも、りとに連絡する。

「私もいっしょに応援に行く。」

りとが答える。

「ありがとう。」

まりが、みさに言う。

「囲いに穴があいているということだから、私たちはそこに行かなくてはいけないの。みさちゃんたちは、地下室にいて。」

「わかったですな。」

「いい子ね。じゃあ、いってくる。ここ、行こう。」

「わかったー。」

まりとここが、変身して竹下口の方に向かった。二人が出て行ったところで、みさはエビふり

ヤーに嬉しそうな顔で話しかけた。

「良かったですな。」

エビふりヤーは無言でうなずいた。